十七日、壬辰、二條城ニ天台宗ノ論義アリ、

〔駿府記〕六月十七日、天台論議云々、

十八日、癸巳、堺奉行長谷川藤廣、堺ノ町割ヲ定ム、

〔本光國師日記〕十七　六月五日、長谷川左兵衛六月五日之狀來、堺町割日取之儀申來、

六日、長谷川左兵衛ヘ返書遣ス、堺町割吉日六月十八日、是ハ餘能ハ無之候ヘ共、急之由申來候間、此日を書付遣ス、相延候ゐも不苦候者、重ゐ可承由申遣ス、

尊書忝存候、其地ヘ被成御越、御仕置共被仰付候由、乍御苦勞目出度存候、然者町割被遊候付ゐ、吉日書付可進由被仰越候、一六月十八日ミつ（の）のミ（カ）、月曜寄宿、此日可然存候、惣別九日ゐ末者、日共指合申候ゐ、上々之吉日者見ヘ不申候ヘ共、來月ヘ延申候儀者如何と存、十八日と書付申候、可被成其御心得候、若相延候ゐも不苦候者、重ゐ可被仰越候、恐惶〳〵、

六月六日　　金地院

長谷川左兵衛樣

御所樣御息災ニ御機嫌能被成御座候間、可御心安候、已上、

〔薩藩舊記增補〕二古御文書廿二卷中家久公御譜中ニ在リ

○上略、島津家久上洛シ、家康ニ謁セシヲ賀スルコトニ係ル、本月五日ニ收メタリ、罷上、御見廻可申上候ヘ共、爰元町割以下ニ付、不得寸隙候間、乍存御無沙汰樣御座候、何樣御在洛中、与風罷在（出カ）以面上可申上候間、不能具候、恐惶謹言、

元和元年（朱カキ）六月八日　　長谷川左兵衛判

嶋津陸奥守樣貴報

○堺町割ノ月日詳ナラズ、今姑ク本光國師日記日取ノ記事ニヨリ、コノ日ニ掲グ、又長谷川藤廣ノ堺奉行ニ任ゼラレシコト、慶長十九年十二月二十四日ニ、大野治房ノ堺ニ放火セシコト、本年四月二十七日ニ、各其條アリ、ナホ家康、堺市ノ再建ヲ命ゼシコト、閏六月十三日ニ收メタルパジェー日本耶蘇教史ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔御手鑑〕乾延享四年八月改　堺初年數傳

一堺初リ白鳳貳癸酉年ト申傳

元和元年六月十八日

延享四丁卯年迄千七拾五年ニ成、

但長谷川左兵衛堺奉行之時、元和元乙卯年ゟ町割在之申、延享四丁卯年迄百三十三年ニ成ル、

〔全界詳志〕上奉行　元和元年、長谷川氏〇廣藤ノ時、町中地割アリ、

〔本光國師日記〕十七　五月十三日、さゝい油屋道幾、五月十日之狀來、日野殿へも狀來、則届ル、右之狀天野坊主衆届候也、

崇傳葛島道半ノ屋敷割ヲ藤廣ニ依頼ス

一書令啓達候、先日者尊書忝存候、則御報申入候、其地ニ永々御逗留御苦勞共奉察候、隨ゟ堺町人葛嶋道半ハ、鹿鹽宗具姉ゟて、拙者久敷知人ゟて御座候、堺屋敷前々之筋目被聞召届、可然樣ニ被成御渡被遣候者、拙老別ゟ可爲大慶候、猶期後音候、

六月八日　　金地院

長谷川左兵衛樣人々御中

右之折紙鹿鹽宗具へ渡ス、

〔本光國師日記〕十八　九月十一日、宗具來、長谷川左兵衛狀來、返書宗具被歸候時可遣也、宗具ハ知行所大窪村へ被越也、

十二日、さゝい長谷川左兵衛へ狀遣ス、諸白貳荷、松茸一折遣ス、則返書來、

十六日、狩野內匠九月十四日之狀、久右衛門方迄來、堺之龍雲坊と云仁持來、堺之居屋敷之儀ニ、長谷川左兵衛へ狀遣し候樣ニと申來候へとも、狀を不遣也、內匠へも返書重ゟ從是可遣也、

〔本光國師日記〕十九　十二月廿七日、堺大寺之西坊、天神ノ奥坊、御朱印ノ訴訟ニ下ル、鹿鹽宗具極月十二日之狀來、久寶寺之宗因極月十二日之狀、琢首座極月十五日之狀來、何も西坊奥坊持來、

同廿八日、さゝい妙國寺之使僧來、妙國寺十二月八日之狀來、鹿鹽宗具十二月八日之狀來、續目御朱印之事申來、

同廿九日、堺之光明院下、〔廬〕蘆山寺十二月十三日之狀來、光明寺領高十八石之御續目之御朱印所望之由也、等順ゟ元竹方へも狀來、

二十日、乙未、月次聯歌御會、

〔土御門泰重卿記〕一　六月廿日、晴天、禁中月次御連歌、予も御連衆、申刻雷電風雨甚、初夜之時分止、

秀忠ヲ聽ク

秀忠、二條城ニ抵ル、是日、二條城ニ天台宗ノ論義アリ、

〔駿府記〕六月廿日、幕下二條御所渡御、暫御密譚、〇下略、家康、秀忠ニセイタヲ賜フノ條ニ收メタリ、本月十一日、古田重然死カ肩衝ヲ贈ルコトニ係ル、

〔梵舜日記〕十九　六月廿日乙未、天晴、二條御城罷出、天台衆之論之有リ、江戸將軍御聽聞也、

〔言緒卿記〕六月廿日乙未、雨、前大樹ヘ被參衆花山院大納言、飛鳥井中納言、冷泉中納言、德大寺中納言、久脩朝臣、予等也、將軍二條御所ヘ御出也、天台論儀アリ、題者惡則是善ト云也、

〔附錄〕

〔言緒卿記〕六月十七日壬辰、雨、前大樹ヘ參衆烏丸中納言、〇廣光冷泉中納言、予等也、

十八日癸巳、雨、前大樹ヘ出仕之衆德大寺中納言、〇實久冷泉中納言、久脩朝臣、予等也、

十九日甲午、雨、前大樹ヘ被參衆廣橋大納言、三條大納言、冷泉中納言、久脩朝臣、予等也、

二條城ニ論義アリ

廿一日丙申、雨、前大樹ヘ被參衆廣橋大納言、三條大納言、冷泉中納言、庭田前宰相中將、予、竹內刑部少輔等也、

廿二日丁酉、雨、前大樹ヘ冷泉中納言、予參了、

廿三日戊戌、雨、前大樹ヘ冷泉、予參了、

廿四日己亥、雨、前大樹ヘ參了、冷泉、予兩人也、

廿五日庚子、天晴、前大樹ヘ被出衆廣橋大納言、三條中納言、飛鳥井中納言、烏丸中納言、冷泉中納言、德大寺中納言、業光朝臣、予、花山院少將、雅胤朝臣等也、

廿六日辛丑、天晴、前大樹ヘ被參衆飛鳥井中納言、冷泉中納言、西洞院宰相、水無瀨前宰相、久脩朝臣、予等也、論儀アリ、

廿七日壬寅、夕立、前大樹ヘ被參衆冷泉中納言、予等也、

〔梵舜日記〕十九　六月十日乙酉、天晴、御城ヘ罷出、

廿五日庚子、天晴、二條之御城ヘ罷出、

廿八日癸卯、天晴、二條御城ヘ罷出、

二十二日、丙酉、幕府、佐竹義宣ニ歸國ノ暇ヲ賜フ、

〔譜牒餘錄〕二十六　佐竹右京大夫　同〇慶長二十年六月廿二日、於京都、從台德院樣、安

遠國故暇ヲ賜フ
銀子百貫目拜領
義宣梅津憲忠ニ賜暇歸國ノコトヲ報ズ
二十八日京都發
閏六月下旬歸國ス
秀忠ヨリ脇差拜領

藤對馬守殿爲上使御出、被仰渡候ハ、今度之御陣ヨ早々罷登、俄之儀ニ、人數あとも多召列御祝着候、遠國之儀ふて、在京も太儀被思召、御暇被下候、罷下休息可仕由よて、銀子百貫目致拜領候、

〔羽陰史略〕一　五月廿三日、義宣公、書ヲ梅津憲忠ニ賜テ曰、

上ヲ略ス、昨日安藤對馬殿上使、手前宿エ御越如被仰出者、此度之御陣ニ、間モナク早々罷登、俄之儀候處、人數ナト召連參候由、御祝着ニ被思召候由、被仰出候、其上遠國ニ候而、在京モ太儀ニ候條、先罷下休息可仕由、被仰出候而御暇被下、銀百貫目拜領、無殘所仕合ニ而下國候、爰許廿八日相立候而、北國通ヲ可下候間、其元エ來廿日前ニ可打着候間、其心得可仕候、

〔佐竹氏記錄〕閏六月下旬、義宣公久保田御着城、或ハ七月三日、京都御立ト申傳アリ、出羽國坂田御通御下ニ付、御迎御馬久保田ヨリ行、

〔秋藩紀年〕六月廿二日、安藤對馬守殿上使ニテ、御歸國御暇、白銀百貫目御拜領、壬六月御着城、九月十日、御城ニテ御家中大振舞有、今年台德院樣秀忠公ヨリ靑江長光ノ御脇差拜領、

〔細川家記〕十四忠興八　六月中、忠興君より御國へ被下候御書七通、○他ハ略ス、

佐竹義宣上杉景勝ノミ暇ヲ賜ハル
蘆名盛泰義宣ニ從ヒテ秀忠ニ謁ス
上杉景勝暇ヲ賜ハル
六月歸城

一佐竹、景勝あとも、近日御暇被下、下向之由ニ候事、
一此外別ニ御暇出候衆も無之候事、○上下略、六月二十五日附、氏家宗入外七人宛、忠興書狀、
一東ニてハ、景勝、佐竹兩人ニ御暇出申候事、此外諸國之面々、何も御暇出不申候事、○上下略、六月二十九日附、氏家宗入外十六人宛、忠興書狀、
○義宣ノ大坂ニ到著セシコト、四月九日、義宣、秋田ヲ發スル條ニ收メタル佐竹氏記錄ニ見エタリ、參看スベシ、

〔參考〕

〔蘆名家傳記〕○羽後　慶長十九寅年大坂御陣ノ時、平四郎盛泰出陣、於伏見奉見家康公、秀忠公、翌元和元卯年御防戰之砌、亦義宣公○佐竹同道、六月廿五日、京都二條御城ニオヒテ、秀忠公エ謁見、

○上杉景勝、相馬義胤ノ暇ヲ賜ハリシコト、便宜左ニ合敍ス、

〔上杉年譜〕四十九景勝二十九　同月、○五月　公歸鄉ノ暇ヲ玉ハリ、京師ヲ發シ玉ヒ、江戶ノ邸ニ入テ、暫ク稽留シ玉フ、諸軍勢ハ、段々米府ニ遣シ、公ハ六月中旬ニ米府ニ着城シ玉ヘリ、

元和元年六月二十二日

相馬利胤病ミ父義胤代リテ従軍ス利胤上洛ス

〈相馬中村家譜〉利胤相馬大膳大夫、元和元年大坂再役、又従軍、有疾、次于駿州府中、於是父義胤、率二子及胤、尚胤、發中村、至則大坂城既陷、利胤亦愈、父子四人見家康、秀忠而歸、

〈奥相茶話〉十　利胤攝津大坂參陣事

○上略、冬役従軍同ノコトニ係ル、元和元年春三月、兩公御進發ニ依テ、供奉參陣催促ノ御觸侍リキ、其比利胤駿州(府カ)城下ニテ風病ニ犯サレ、十死一生ニ依テ、供奉難成、駿府城下ニ病臥シテ御坐ス、此故ニ御父義胤、相馬ノ人數ヲ引率シテ參陣給ヘキニ成リヌ、同夏四月、隱居所標葉郡泉田ノ城ヲ發路シ、先ツ江戸ヘ參府シ玉ヘリ、義胤近習外樣ノ者ニ向テ宣フハ、太閤ヨリ以來天下一統シ、安靜ノ世成シカハ、可指(惜カ)身ヲ疊ノ上ニテ朽果ヘシト、夜々ノ寐覺ニモ、是而已殘多カリシニ、斯ル不意ノ事出來侍テ、剩天下ノ武將ノ御爲ニ命ヲ隕サンハ、是ソ誠ニ老ノ果報、老後ノ大幸何事カ加之、枯木ニ再花ノ咲ト云ハ此事ナリト悅玉フ事不斜シトナリ、二男左近及胤、三男越中久胤(十六才)ヲ相具シ、八數引率シテ立給ヘリ、義胤此時六十六歳計ニ成給ラン、其頃下々申ハ、常々諸平家ヲ聽玉フニモ、修羅ヲ好テ聽玉ヒ、御心浮立樣ニ思召シケレハ、此度

五月九日義胤草津ニ著ス

相馬氏戰ニ遲ル

佐竹義宣ノ周旋ニテ家康ニ謁ス

ハ實ノ修羅也、左社進ミ玉ハメト申合ケリ、其時分ハ、家中ニモ老功ノ者殿ノ前ニハ立(タ)、跡ニハ立間數ト存含ル者共殘命シテ供ヲ致シケリ、同五月九日、江州草津ニ到着有シ處、ハヤ一昨七日大坂落城シタリトテ、諸勢歸陣也、往行ノ諸卒口々ニ申ケリ、是ヲ聞給テ、義胤ヲ始申、其外老士若士下々迄進ミ勇ミケル者共、力ヲ落シケルカ、先大坂迄ハ可參陣トテ行玉フニ、路次ニテ歸陣ノ諸卒雜人等、相馬衆ヲ見テ、是ハ何事ニ行ソ、跡ノ掃除ニ行カ、又城番ニ行衆カ抔ト申ケル時ハ、各顏ヲ橫向テ通リシト語リケルト也、扨先ツ詮方ナサニ、醍醐ノ方ニ宿陣在テ、佐藤丹波ヲ御使ニテ、佐竹右京大夫義宣ヘ伺玉ヘハ、八數ヲハ過半奥州江返シ、義胤醍醐ニ入テ御坐セ、遲參ノ子細老中ヘ達シ、兩公ヘ上聞ニ達スヘシト被仰遣ケル、扨利胤モ病腦(ママ)思シヨリモ快驗有テ、上洛シ玉イケルカ、是モ醍醐ニ至テ宿陣シ給ケリ、斯テ大御所幷將軍家無御別心由ニテ、佐竹義宣御同路ニテ、於二條御城御父子四人、兩公ヘ奉謁見ケリ、其後御父子共ニ歸陣シ玉ヘリ、

○景勝、米澤ヲ發セシコト、四月十日ニ、入京セシコト、五月九日ニ、各、其條アリ、參看スベシ、

連日降雨

水深二尺

二十三日、戊戌、京都大雨洪水、

〈土御門泰重卿記〉一　六月十七日、雨天、
十八日、雨天、
十九日、雨天、
廿日、晴天、申刻雷電風雨甚、初夜之時分止、
廿一日、雨天、終日也、
廿二日、雨天、
廿三日、雨天、大水、東方小路如大河、一時洪水耳目驚のミ、水深二尺許也、

〈言緒卿記〉六月十七日壬辰、雨、
十八日癸巳、雨、
十九日甲午、雨、
廿日乙未、雨、
廿一日丙申、雨、
廿二日丁酉、雨、
廿三日戊戌、雨、

三條橋上水越ス

白川ノ水見物

廿四日己亥、雨、

〈孝亮宿禰日次記〉四　六月十七日壬辰、風雨有之、
十八日癸巳、晴、
十九日甲午、雨降、
廿日乙未、雨降、
廿四日己亥、雨降、近日大雨洪水有之、
廿五日庚子、晴、近日之大雨、去廿三日雨、三條橋上水越之由、彼邊人來語之、

〈義演准后日記〉十九　六月十七日、大雨、〇本書十九日、二十日、廿一日、廿二日、廿三日、廿四日ノ條天候ノ記事ナシ、
廿六日、洪水、近代ノ儀云々、白川ノ水見物、京宿坊ノ門前道人渡カ予タル時也、
廿八日、大住村洪水ニ田地過半損シタル由注進、珍事、

〈梵舜日記〉十　六月十七日壬辰、雨降、
十八日癸巳、雨降、
十九日甲午、雨降、
廿日乙未、天晴、

廿一日丙申、雨降、

廿二日丁酉、陰、

廿三日戊戌、雨降、○中略以外大雨洪水也、

廿四日己亥、雨降、不晴天氣也、

〈細川家記〉十四忠興八　六月中、忠興君より御國へ被下候御書七通、○他ハ略ス、一、當年上方大雨大洪水ニ而、其國如何候哉、田畑之儀やうゐ被申候事、○上下略、六月二十五日附、氏家宗入外七人宛、忠興書狀、

二十五日、庚子、是ヨリ先キ、肥前佐賀城主鍋島勝茂ノ父直茂、使ヲ幕府ニ遣シテ、大坂ノ落城ヲ賀シ、物ヲ獻ズ、是日、秀忠之ニ答フ、

〈鍋島勝茂譜考補〉四　五月廿二日、公ヨリ多久圖書茂富ヲ直茂公ノ御使者トシテ、本佐州へ可被遣ノ旨、被仰付、御書アリ、其文ニ云、

急度申遣候、大坂落去之爲御祝儀、從加州、○茂直本佐州御父子迄、其方爲使差出可申候間、途中ゟ可被罷上事待入候、不可有油斷候、恐々謹言、

信濃守
勝茂御判

五月廿二日

多圖書殿　進之候

依之圖書頭茂富船ヲ早メテ大坂ニ至リ、先ツ公ヘ御目見シ、仰ヲ承テ、直茂公ノ御使トナリ、本多佐州、同上州ヘ御祝儀ヲ申上ケルト云、其後大御所○秀忠ノ誤ナラン、ヨリ直茂公ヘ下サレケル御書ニ云、

就今大坂落居、使者殊ニ太刀一腰馬代銀子百枚金襴五卷猩々皮到來、喜思召候猶本多佐渡守可申候也、

六月廿五日　御判

鍋島加賀守とのへ

二十七日、壬寅、是ヨリ先キ、大野治胤京都ニ捕ハル、是日、幕府、堺奉行長谷川藤廣ニ命ジテ、之ヲ堺ニ誅セシム、

〈駿府記〉五月廿日、大野道犬於大佛邊生虜之、

六月廿七日、大野道犬被遣堺津、長谷川左兵衛奉行、今度堺津燒亡妻道犬依所爲、於堺可令誅旨被仰付云々、

〈孝亮宿禰日次記〉四　五月廿三日己巳、朝間雨降、大野道見於大佛邊搦取云々、

〈譜牒餘錄後編〉二十三大御番　小林田兵衛　八番安藤丹波守組　祖父小林田兵衛

治胤大佛邊ニテ捕ハルル　堺ヲ燒キシ罪ニテ同地ニテ誅セラルル

小林元次野間重成治胤ヲ捕フ

治胤ノ佩刀ヲ兩人ニ賜フ

本多正信酒井忠世ノ奉書

元次儀、權現樣に、慶長十乙巳年被召出、御奉公申上、大坂兩度御陣ニ供奉仕、元和元卯年五月七日、攝州大坂落去以後、同五月廿一日、野間金三郎同道仕、從伏見二條御城に出仕ニ趣途中、於洛陽大佛、大野道犬に行逢、速(マヽ)時に搦捕、二條御城に差上候處、依之酒井雅樂頭、本多佐渡守兩人奉ニゐ、御褒美御奉書金三郎、田兵衞兩人ニ被下之畢、其上道犬指罷在候大小被下之、刀者金三郎家ニ所持仕候、脇差御奉書ハ小林田兵衞于今所持仕候、

御奉書之寫

猶以、物每被爲入御念候付ゐ、如此儀書中ニ己(ヒカ)申謝候、以上、

昨日者爲御目見得御越、御前之御仕合能御上着之處、於大佛ニ大野道犬被召搦、今朝二條之御年寄中に被爲上候由、示預候趣、披露仕候處、御前之御仕合殘所無御座候、委細面談可申承候條、早々及御報候、恐々謹言、

五月廿二日　本多佐渡守判

酒井雅樂頭判

小林田兵衞殿

野間金三郎殿御報

野間金三郎重成

大坂落人ノ穿鑿

長曾我部盛親ノ所刑

〔譜牒餘錄後編〕三十二　小普請七　内藤出羽守組　野間三之丞　養祖父野間金三郎重成、權現樣に奉仕、濃刕關ヶ原御陣、大坂兩年之御陣供奉仕、元和元卯ノ年五月七日ニ、攝州大坂落去以後、同五月廿一日、小林田兵衞同道仕、伏見二條御城に出仕趣途中、於洛陽大佛、大野道犬搦捕、二條御城に差上、依之酒井雅樂頭、本多佐渡守兩人承ゐ、御褒美御奉書田兵衞、金三郎兩人被下之畢、其上道犬所持之大小田兵衞、金三郎に被下之、御奉書脇指者田兵衞家ニ持傳、刀者拙者方ニ所持仕候、○本書、本多正信、酒井忠世ノ奉書ヲ載セタレドモ、上ニ同ジキヲ以テ略ス、

〔中山文書〕○加賀　包紙ニ　利常樣御親筆　大坂御陣御文

此廿日ニむらさきのニて、ゑいけん㐅○英賢、前田利長の御ふつしをいさし候、一さんけつゝうニて候つる、そこもとゝうこハいゝゝいさし候や、一筆申候、こゝもと相ゝゐる事も御入候ハす候、兩御所㐅一さん御きけんよく御入候、ゑやうくん㐅せつ〳〵二てうへ御さ被成、何やらん御さんゝうまてニ候、大坂のおちうときひしき御せんさくニて、そう〳〵よりとらへまいり、一日ニ五十人百人つゝゑときられ申候、いつまもさふらいとゝへ申候、めもあてられぬあり㐅ニて候、てうそゝめと申ゝ、まへかと四こく

大野治胤ヲ堺ニ火刑ニス

國松處刑

大坂譜代衆ノ赦免

ニぬ〳〵ニて候か、此いせんの一らんニろう人いさ〳〵、こんと大坂へまいり、とらへられ、十日計いせんニらく中を御ひき被成、御せいれい被成候、しふのせう〇石田三成ゟやうニいさし候、おうのとうけんと申ハ、しゆりゟおとゝニて候、これもとらへられ候か、これハさゝいをやき申あいさ、さゝいへつゟ見され、さゝいよてあふりころ〳〵ニ被成候ハんよ〳〵申候、見ゟきミ見も四五日いせんニ御せいれい被成候、中〳〵可申樣も御入候ハす候、大坂の御ふさい衆ハ御ゆるし被成候、そのしさいハ、此いせんいゟやうニも御所ゐしさいニなされよく御さ候ハんよ〳〵、たつて御いけん申ゆへと相きこへ申候、兩御所ゟ御かへり、いつともいまさきゟめなく、へん〳〵としたる事ニてめいれく申事ニ候、そこもといつしも御そくさいニ候やと、御こゝろもとなく存事ニ候、やゝて〳〵かへり候へく候、れくとの御そくさい候や、我事一さん〳〵そくさいニ御入候あいさ、御きつゟい候ましく候、ゟし、

五月廿七日　　ちくせん

〔薩藩舊記〕後集三十二御文庫拾七番箱十八卷中　家久公御譜中ニアリ

治胤豐國社ニ匿ル

一大野道見ハ逃候處、方々被成御尋候へハ、豐國之敷板之下ニかくしを居候を見出候て搦とり、籠ニ被入置候、未成敗無之候事、〇上下略、六月十一日附、巨細書、

〇大野治胤、福島ヲ守リシコト、慶長十九年十一月二十九日、東軍、野田福島ヲ攻ムル條ニ、堺ヲ燒キシコト、本年四月二十八日、大坂兵堺ヲ燒キシ條ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔土屋知貞私記〕

大野道犬

堺ノ町人重衡ノ先例ニヨリ治胤ヲ申受ク

七日、〇五月落京都東福寺前ニテ被生捕、和泉之國堺之者ニ被下、於堺磔ニ掛、大野道犬以下知堺ヲ燒ユヘ也、

〔武功雜記〕十七　大野修理弟ヲ市兵衞ト云、東照宮メシツカハレ、少々御寵愛ナリ、任官ノ壹岐守ト云、三千石被下、修理子ヲ彌十郎ト云、後ニ切腹ス、道犬モ修理弟ナリ、最前チトヒケナル事ノ名アリテ、京都松木町ヘ養子トナリテユキ居タリ、後ニ大坂ニ籠リ、堺ヲヤキシ頭人ナリ、落城以後、京ト臥見ノ間ニテ捕ヘラル、堺ノモノトモ、重衡ヲ南都ヨリ所望セシ例ヲ引テモラ

治亂ヲ碟ニス

堺町人ノ訴訟

道犬生捕ノ狀況

フ、板倉伊賀守ヲカハス、堺ノモノ、道犬ヲ碟ニカクル、伊賀守無興ニテ、ムカヒ南都ノモノ重衡ヲ碟ニセシヤトイフ、堺ノモノ閉口迷惑セシ由、

〔元寛日記〕一　六月五日、大野道軒大佛ノ近所隱居養源院有告之、板倉遣雜色大勢生捕、暑氣甚、板倉勞之、禁高手免小手、于時道軒、警固侍取付、川井與五左衞門カ脇指爲拔、川井、道軒ヲ押伏、忽小手ヲモ强ク禁也、堺ノ町人皆訴ヘテ曰、抑堺ノ地ハ、堂社佛閣寺院民家繁昌之地、道軒去頃放火シテ燒失伽藍、剩燒死ノ者街ニ滿、平重衡卿燒奈良、任罪科ノ例、賜鄉民、可行罪科之由、頻ニ依望申、賜堺ノ者共引渡シ、後斬罪ス、

〔兵家茶話〕一　大坂御陣過て、大野道軒をハ、小林太兵衞、沼野金三郎兩人まて生捕る、小林ハ元來秀頼公へ仕へ奉りしゆへ、大坂落城して、二條の御城へ出仕〳〵して立のき、東照宮へ御奉公申上る、大坂道軒を見付しゆへ、むそうよ同道の沼野金三郎へ申々るハ、兼〳〵御尋被成るゝ、大野道軒ハ、これよ見へさるよし也、我行てすうすべし、よき時節よ聲を立へき間、手早く參りて生捕給へとて、茶店のかさいらよ隱し、太兵衞壹人、道軒う居さる茶屋へ入る、太兵衞、道軒

どゝ知る人ありて、道軒へ申々るハ、某義、近年大御所へ仕ふれて、御身の事身方うへても申宥むへしと念比よすうしうり、道軒ハ太兵衞とみるや否や、討て捨んと思ひしう、太兵衞別よ敵すへき躰もあく、なにらう成そのあれハ、少し猶豫しさるを、太兵衞聲を立々れて、金三郎飛來りて道軒よ組み、太兵衞と兩人して、終よ生捕さり、道軒ハ大力量の者なれて、中〳〵太兵衞壹人の働きよて生捕事ハ成まじきよ、金三郎と兩人よて精力を出しさるゆへ、手もおく生捕、二條の御城へ引て參り、駒寄にくゝり置て、見るその夥し、皆いふ、道軒ハ聞及ひしよりも大男ありと、道軒聞て申々るハ、流石よ士さるそのとも覺へぬそのゝいゝやふ也、うほく我をいましめしよふり、ての者ともを一〳〵いま〳〵むべきとおもひしよ、口をしき次第也と、聊臆せし氣色もおし、其のち終り首を刎らる、太兵衞、金三郎へハ、道軒を生捕し事を感し思し召との御奉書を下さるゝ、道軒う差さる刀を金三郎へ下さゝ、脇指をハ太兵衞へ下さる、今よ太兵衞う家よ脇さし奉書ありり、脇さしハ關兼定あり、此とき御加增ありて、六百石の采地を下さる、奉書よ小林太兵衞を誤りて、尾林田兵衞と認らるゝとあり、上ニ同、○中川重興話

本多忠政治胤ヲ禮ス

治胤綾小路定利ノ刀ヲ忠政ニ贈ル

治胤ノ墓

治胤ノ子僧トナル

首斬ラレテ後一働

〔本多氏記錄〕綾小路定利刀之由來之事

大野道犬、五月廿一日被生捕、京二條の城大手ゟ面縛せらまて居たゟ、諸人往來されを見て、或ハ笑て耻しむ、美濃守忠政ハ、道犬ゟ見て馬ゟ下り、禮を正敷して曰、貴客被生捕面縛せられゝ、夏、運命盡たゟ也、武士ハ古今皆以不珍、必以耻とハすゑからす、武士のゑらいゟ候ト被申、道犬大ゟ喜て、御芳情謝ゟ言葉ゑし、某以前ゑ秀頼公ゟ賜たゟ綾小路定利の刀、何某許ゟ置たゟ、寺院とも、されを以貴客ゟ進といふ、忠政此趣き茂兩御所ニ言上して、此刀茂取て子孫ゟ傳ふ、今ゟ家藏ゑり、

〔雍州府志〕十陵墓門愛宕郡　大野道犬一家塔　在同寺、○本國寺

〔江藤文書〕坤○筑前

一大野道犬子落城以後、法花坊主ニ成、談議を說あゟき候由申候間、有所を存候歟、又ハ其在所ニ於有之ハ、召連可來事、鄉中吉利支丹宗門此以前之をく無油斷穿鑿可仕事、○上下略、慶安二年二月十三日附、法隆寺宛、中坊長兵衛書狀掲記同月八日附板倉重昌制狀、全文ハ慶安二年二月七日ノ條ニ收ム、

〔葉隱聞書〕一　首打落させてゟ一働ハしゝとせるその也と覺さり、義貞、

ストノ說

家康堺ヲ殘シ大坂附近ヲ燒ク

治胤家康ノ意ヲ悟リテ堺ヲ燒ク

治胤ノ死屍見物ヲ斬ルトノ說

大野道賢抔ふて知まさり、何そ人ゟ人ゟ劣るゑき哉、三谷如休ハ病死も二三日ハこさへ可申と申候也、口傳、

〔葉隱聞書〕八　大坂之城落去之後召とらまし大野道犬齋を、泉州堺之町人等申賜て、是を火あふりニす、情なゟりし沙汰とも也、其謂を尋るゟ、往し冬一端御和義之事ニおよふニ付、大坂近邊之民屋を關東之御下知とゝて、悉ク是を放火被成、堺之町計殘し置ける、右ハ大權現樣御賢慮有りて之事之由、然るを道犬やさしくも此御謀を奉察、さへぎつゝ大坂方ゟ堺を不殘自燒せ、爰ニおひゝ、彼ノ地之町人、深ク道犬をにくミ、こぞつゝ申乞さると也、扨町人原、道犬を請取、心之儘ニ行えんとせ、彼ノ浦ニ引出し、終ニ火あふりニ行也、前代未聞之仕方也、道犬無念骨髓ニ徹シたるとゟや、已ニ時刻ニなまハ、燒草次第ニ燃上り、惣身全躰こかまゝ、はなぎ置さる柱も早燒ぞたゟなりぬ、諸見物之者も、あなむさん寂早絕命し給ふらんと云のゝしる所ゟ、柱ニつなける鉄鎖を引切、向ニはゝと飛出、正面ニ見物して居さりし者之脇差を引拔、其者之胴腹を突拔さまニ、其儘倒まゝ死さり、人々あゟて取寄見まハ、素り五躰炭之をくにして、十指を過半落さりしゟ、右之通之働、大勇

家康治胤ヲ辱シム

治胤家康ヲ罵ル

猛之者之一念向所かくのをゝ、不思議也、

〔葉隱聞書〕十　大野道賢火ゐふり之事

慶長十九年大坂冬陣和談ニ成り、大坂之御城廻り外堀埋らを候樣ニと御約束ニゐ、家康公駿府へ御歸被成候、其跡ニゐ、外堀を惣堀と被取成、ゑゑゑゑゑ埋申候、秀賴公之内大野修理弟道賢入道、此樣子を見、家康全和談之心底ニあらを、來年者和談を破り、大坂を責ゐよ支度也、味方之者共、其心を不悟、要害を失候事不及是非次第也、家康手配を致工夫候得者、來年之備ニハ、堺之町ニ隱勢を可仕ゑ仕組置可被申候、責ゐ之無念をらしニ、堺之町を可燒放思案いさし、風を見立致放火候、道賢付火と有事、自然と世上ニ唱、家康公被聞召、御心底を考、如右仕候義と御さつし被成、深く御よゑみ被遊候、夏陣之折仰出ニ、今度第一番之戰功ハ、大野道賢を生捕之者ニ被相極候由、御觸被成候、依之諸人道賢一人を目懸取卷候を、無比類働いさし、終ニ被生捕候、此段申上候付ゐ、白洲ニ引出候樣ニと被仰付、則御出座ニゐ、高聲ニ被成御意候者、汝ハ天下ニ名を知れさる勇士なるゝ、今千筋之繩ニ懸り、諸大名之前ニ耻をさらに事、無面目ハおををぬゝと被仰候、道賢ハ首をうなされ

治胤ノ屍檢視ノ役人ヲ刺殺ストノ說

居申候ゝ、此御詞を承り、きつとのひ上り、眼を活と見開き、其方如此致さんと存候得共、運盡ぬをハ不及力、今生捕ゑ成事、古今之勇士ニ有習ひ、何そ恥ゑせんや、夫ニゐハ天下無心元、大たをけ也と廣言申候付ゐ、愛相盡、御詞をあし、其時堺之町人罷出、此者付火故、我々難義此上無御座候、町之燒跡ニて火あぶり可仕候間、町人共へ被下候樣ニと奉願候、家康公被聞召、則被下候間、隨分憂目を見せ可申由被仰付候、頓ゐ撿使罷越、遠ゐぶりよて苦ミ候樣ニゑしらへ候得共、少も動キ不申候、燒死候付ゐ、火を取直候得ハ、眞黑ニからさ計見候ゝ、其儘撿使ニ飛懸り、撿使之脇差を拔とり、只一突よ突殺、ゝらさハ忽灰ニ成候由、

二十八日、癸卯、秀忠、二條城ニ抵ル、

〔駿府記〕六月廿八日、幕府二條御所渡御、

〔言緒卿記〕六月廿八日癸卯、天晴、前大樹へ武家御來儀也、被參衆大炊御門大納言、廣橋大納言、花山院大納言、日野大納言、六條中納言、飛鳥井中納言、廣橋中納言、冷泉中納言、西洞院宰相、水無瀨前宰相、久脩朝臣、予、永慶朝臣、孝治、實清等也、

池田忠雄備前國ヲ賜ハル

忠雄入國ニツキ土御門泰重ニ祈禱ヲ依賴ス

〔孝亮宿禰日次記〕四　六月廿八日癸卯、晴、今朝伏見之將軍上洛、二條城有御成云々、

〔附錄〕

〔言緒卿記〕六月廿九日甲辰、天晴、前大樹へ被參衆六條中納言、予等也、

幕府、淡路由良城主池田忠雄ヲ備前岡山城ニ轉ジ、亡兄忠繼ノ遺封ヲ繼ガシメ、播磨宍粟赤穗佐用ノ三郡ヲ、其弟輝澄、政綱、輝興ニ分與ス、

〔駿府記〕六月廿八日、幕府二條御所渡御、松平宮內少輔召御前、備前國賜之、舍兄左衞門督〇忠繼遺跡故也云々、

閏六月二日、松平武藏守、松平宮內少輔出御前、本多上野介承之、是依將軍家仰、宮內少輔、舍兄左衞門督遺跡拜領備前國、爲御禮出仕云々、

四日、〇中略、蜂須賀至鎭ノ淡路加賜ヲ謝スルコトニ係ル、淡路者、松平宮內少輔雖令知行、今度備前國被改補之故如此云々、宮內少輔者阿波守〇至鎭聟也、

〔土御門泰重卿記〕一　閏六月十四日、晴天、今日家君、〇久脩備中守護宮內少輔、備中一國美作半國從公方拜領也、則入國、就其方角吉凶相改祈禱賴申候由被申候付、金神太塞免札又地鎭樣子にて二夜三日之行法用意よて、今日下向也、人雇ゐと相添、侍七人下男八人也、以上十五人也、

廿五日、晴天、山科所放ニ參候由、家君備中ヨリ歸京、一段之□(仕カ)合ニテ候、二夜三日神事終る、帷子五しゆ、單物二つ、銀子五十枚、從國守宮內少輔送られ候由承及候、家君供者ニ侍七人ニ銀子壹枚つゝ也、下男九人ニハ、料足一貫つゝ被遣候由承及候、念入さる事感入候也、馳走中〳〵難盡候由、家君御物語承候也、予帷子一つ、銀子三枚爲御末(スソ)分拜受也、

池田政綱播磨赤穗郡ヲ賜ハル

〔寬政重修諸家譜〕二百六十三　池田稱松平輝政三左衞門、右少將、參議、

利隆武藏守、　母は清秀〇中川ゟ女、

忠繼藤松、三郎、左衞門督、　松平銀之進昭邦ゟ祖、母も東照宮ゟ御息女督姬君、

忠雄勝五郎、新次郎、宮內少輔、　母は上りおゐし、兄忠繼ゟ家を相續も、

輝澄松千代、左近、石見守、　松平但馬守喜生ゟ祖、母も上におゐし、

政綱岩松、右京大夫、從五位下、從四位下、　母も上みおゐし、

輝興古七郎、右近大夫、　母も上におゐし、

政綱　元和元年六月二十八日、播磨國赤穗郡をたまひ、三万五千石を領も、

〔寬政重修諸家譜〕二百六十五　池田忠雄宮內少輔、　六月二十八日、忠繼卒して嗣

忠雄播磨三郡ヲ三弟ニ分與センコトヲ請フ

忠雄備前及備中ノ四郡ヲ賜ハル

池田輝澄播磨宍粟郡ヲ與ヘラル

池田輝興播磨佐用郡ヲ與ヘラル

忠雄駿府江戸參禮

なきよより、その遺領を賜ぬれところ、播磨國三郡の領知を、弟石見守輝澄、右京大夫政綱、右近大夫輝興よりあちあさへむ事を請けより、それむきよまかせらる、忠雄よハ備前國をよひ備中國淺口窪屋下道都宇四郡のうちにをいて、三十一万五千石を賜ひ、このとき忠雄ゟ領せし淡路國をおさめらる、

〔寛政重修諸家譜〕二百六十六　池田輝澄左近、　元和元年大坂の役よりあさあひたてまつり、六月二十八日、播磨國宍粟郡のうちよおいて、三万八千石の地をさまひ、從五位下石見守よ叙任し、山崎よ住に、

輝興古七郎、　元和元年六月二十八日、播磨國佐用郡よをいて、二万五千石をたまふ、

〔寛永諸家系圖傳〕十九　池田忠雄　元和元年七月、忠繼子なきによりて、備前の國を拜領す、此冬拜禮のため、江戸駿府よゆきて進物を獻す、

○池田忠雄ニ淡路ヲ賜フコト、慶長十五年二月二十三日ニ、忠繼卒去ノコト、本年二月二十三日ニ、各、其條アリ、又忠繼ノ播磨三郡ヲ加賜セラレシコト、忠繼卒去ノ條ニ見エタリ、マタ、幕府、淡路ヲ蜂須賀至鎭ニ加賜スルコト、閏六月三日ニ其條アリ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔山本日記〕○上略、藤堂高虎加封ノコトニ係ル、池田武藏守、左衞門督兄弟病死相果、池田宮內少兄左衞門督跡備前拜領シ、宮內跡知九萬石淡路一國ヲ、蜂須賀阿波守爲加增拜領、池田新太良○光政微若ナル故、武藏守○利隆(マヽ)知ノ高ヨリ少不足ナレ𪜈、因幡伯耆兩國主被仰付、

高橋賴次忠雄ニ從ヒ備前ニ赴ク

〔後醍醐院及高橋系圖〕○因幡　高橋賴次勝三郎、半右衞門、　同○慶長十八年、輝政公逝去、公之男宮內少輔忠雄公、領淡州、賴次從之、同十九年之冬、元和元年乙卯之夏、從忠雄公于浪花之役、甚有軍勞、同年忠雄公轉淡路而領備之前州、賴次從行、

村田宗加輝澄ニ仕フ

〔吉備溫故〕四十干城十八　村田宗加　宗加義、武藏守樣へ、慶長七年より御奉公仕、元和元年、石見守○輝澄樣へ被遣、御知行四百石被下御奉公仕候、宗加義年罷寄申よ付、子作右衞門、孫新五左衞門御用相勤申內、石見守樣御身上潰申候剋、浪人仕候、○上下略

輝澄ノ山崎町經營

黒田氏ヘノ令

喫煙ノ禁煙草賣買及ビ培養ノ禁

〈宍粟郡志〉上袋三十四所收○播陽智惠市　山崎町、是ハ一郡ノ都會ナリ、郡府トイフナルヘシ、○略中元和元年、松平石見守殿輝澄政四男、ト云、當郡ヲ拜領シタル時、山崎町ノ裏通北ニ値テ、魚市一町ヲ設ケテ新町ト名付テ、今ノ北魚町是也、漸々ニ工商ノ人集シ、大野町、紺尾（屋カ）町、大雲寺町、今ハ寺町、籠ノ町今ハ茶町、造リイトナミ、棟ヲ連軒ヲ接シメ、寛永八年未年、石見守殿佐用郡加領有シ時、山崎町ノ西ニ繼キ、佐用町、今ノ新町、門前町、其後亦山田町裏ノ北ニ高野町、今ハ福原町、此家來福原小左衛門ト云人居住故、後ニ自然ニ町ノ名トナル歟、是迄町數都合十町ト成、○下略

幕府、諸國ニ令シテ喫煙、煙草ノ賣買幷ニ栽培ヲ禁ズ、

〈黒田文書〉○前筑　黒田紀聞之内

將軍樣被仰出タバコ御法度ノ御觸狀

急度申入候、タバコ吸候儀、彌御法度被仰出候間、猶御領分タバコ賣買同作候儀、具以可被致停止候旨上意候條、可被成其御心得候、恐々謹言、

慶長十年六月廿八日

安藤對馬守在判

土井大炊助在判

酒井雅樂頭在判

島津家久煙草ヲ好マズ　島津氏ノ煙草ノ禁

島津氏ヘノ令

〈薩藩舊記增補〉二義弘公御譜中寫在梁瀨善右衛門○長政

黒田筑前守殿

一其元たゝこを〳〵しをそやり、其匂ひよき迷惑被成之由尤存候、いつを共、たゝこの儀者、他國之人者なをもて候間、不及申候、或又小者或人足以下も、自然世上にそやり候とて、大方之心得を以のミ候ハヽ、其科遣間敷由、よく〳〵被仰聞可然存候事、○上書狀、全文ハ本月五日ノ條ニ收メタリ、

御文庫廿三番箱十七卷中寫也　家久公御譜中ニ在リ

急度申入候、仍、たゝこ吸之儀、彌御法度被仰出候間、於御領分、たゝこ賣買同作之儀共（以カ）、可被致停止旨上意候條、可被成其御心得候、恐々謹言、

元和元年（朱カキ）六月廿八日

安藤對馬守

重信

土井大炊助

利勝

球麻郡ヨリ島津領ヘ煙草商賣ニ來ルコトノ禁

嶋津陸奥守殿

酒井雅樂頭

忠世

御文庫四拾八番箱中　家久公御譜中ニ在リ

○上略、本月五日ノ條ニ收メタリ、

一たゝこの儀、天下御法度之由、諸國へ被仰出ニ付、御奉行衆ゟ、到貴所被遣候廻文之趣、具ニ致拜見、得其意申候、彌以爰元之儀、其分ニ堅可申付候、如御存知、たゝこの儀者、是非共御法度堅固ニ被仰付候ハんハ、以來可爲笑止儀多々在之由、此中我等申候つる、乍案申、其段聊無相違ゟ存事候、御分國中ゝ御法度稠候へ共、求麻○肥後球麻郡ニ煙草行ハルヽコト、慶長十年是歳、煙草渡來ノ條ニ見エタリ、ゟよても、たゝこ商賣ニ通候由、内々承付候間笑止ニ存、比紀州、町勝兵へ談合申、一昨日廿三日、猿渡新介、長壽殿爲見廻求麻へ差越候間、内藏助殿迄、此元たゝこ堅法度申付候條、自然其表ゟ商人衆なと、たゝこの荷物、此表へ通候てハ不可然候間、左樣ニ無之樣ニ、御領内へ被仰渡候て可給候、然間

自今以後、求麻ゟ此表へ可通荷物ゝ相改候樣ニ、眞幸表へ内々申付候條、旁其御心得尤さるへき由申遣候、如此求麻へも申越候許ニ、市來八左衞門尉罷下、御奉行衆ゟ之御法度狀致一覽、愚老きとくニ申合さると存事候、猶巨細之儀共、伊勢兵部少輔迄申上進候條不詳候、恐々謹言、

朱カキ元和元年閏六月廿六日　惟新御判

廿五日　御譜中如此、六日ハ寫誤歟ト被存候也、

陸奥守殿らる

〔舊典拔書〕○舊典類聚十四所收

義弘公御譜三十一　元和元二月廿七日御狀　忠恒樣也

一たゝこのミ候人ハ知行可召上候、

一この比承ニ、西丸女房共、たゝこのミ申つるよし、ゟ付ハ内々きゝせ申候、正儀相知申候ハヽ、又々可申上候、

〔島津國史〕二十四慈眼公中　二月二十二日、公○家久使鎌田左京亮言於松齡公曰、縣官禁淡婆姑、其法甚嚴、國中倘有喫淡婆姑者、宜收其秩、二十七日、又上松齡公書、請索喫淡婆姑者、同上、○慈眼公舊譜、和事始云、吳興沈穆石匏氏撰本草洞詮第九、烟草、一名想思草、漳州府志蓬溪類說、稱爲淡婆姑、慶長十年、日本人初喫烟草、元和元年六月二十八日、將軍家下令、禁烟草、即慶長二十年也、今據公書、則此年正二月之間、已禁之矣、且慈眼公舊譜、安藤重信、土井和勝、酒井忠世、慶長二十年六月二十八日與公書、縣官申命禁淡婆姑、則其令之下也、蓋在六月二十八日以前矣、按喫烟無益於人、有害於身、和事始論之（マヽ、下同ジ）

詳矣、然將軍家所以禁之者、爲南蠻種故也、蓋烟草之爲物、味辛氣溫、而有毒、烟氣自口吻入、循脉而行、瞬息之間、洽於四肢百骸、無所不至、猶南蠻邪教之入人者、故痛絶其法、遂禁其物云爾、六月五日、縣官命禁淡婆姑、二十八日、安藤重信、土井大炊助和勝、酒井忠世、以書告公、令國中人不得種淡婆姑及賣買、據慈眼公舊譜、按改撰諸家系譜、土井氏譜、有利勝、無和勝、蓋リ誤作口、有球麻人來賣淡婆姑、松齡公遣使、告相良氏禁之、又命眞幸、議賈人自球麻來者、點撿其貨、同上、

三寶院領ヘノ令

〔義演准后日記〕十九　閏六月十日、タハコ禁制、作タルモ悉引捨了、當鄉昨日尙相觸了、

十一日、タバコ伊賀守法度狀來、寺領分相觸了、

會津領ヘノ令

〔新編會津風土記〕十六　陸奥國若松之四　郭外　上町上之下　大町　舊家梁田仙右衞門○中略、梁田氏ノ來歷、及ビ代々ノ領主ヨリ賜ハリタル文書ヲ載セタリ、

又慶長以來辻札ニ懸ル所ノ制札ヲ藏ム、其文如左、

たれこすひ候儀、かさく御法度に候間、たれこうゑかひ同にくわ候儀、可令停止之旨、江戸御奉行衆より被仰出候條、手前ふ有之たれこ、來十五日以前ニ、を〳〵をひきすてやき捨可申候、もし十五日過申候て、をひ候歟、取あつゥひ候ハヽ、可被成御成敗間、可成其意者也、

慶長廿年七月五日　稻田數馬

信濃ノ禁令

〔安川文書〕○信濃

今度たれこの事、重ゐ御法度被仰付事、

一たれこのミ申間敷候事、

一たれこ鄉中ニてつくり申間敷候事、

一たれこうりゥい申間敷候事、

右之分相そむき申、たれこのミ申ゥ、又ハ鄉中ニつくり申ゥ、うりゥい申候ハヽ、そにん次第ニ、五人くミ共ニ御せいれい可被仰付候、一札如件、

う七月五日　五木村

中野七藏樣　御申候　將監㊞

□□□○猶次ニ署名ヲ異ニセル文書三通アリ、一ハ臺門村源左衞門、及ビ相百姓、一ハ村名不明源兵衞、一ハ久右衞門、及ビ相百姓衆ナリ、何レモ文言、日附、及ビ宛名ヲ同ウスルヲ以テ略ス、

〈對州編年略〉下　○筑前　元和元年六月二十八日、日本有禁煙草之台命、

煙草ヲ燒棄セシム

煙草ノ流行

DIARY OF RICHARD COCKS.

August 7,[1615.]*　　*　　*　　*　　*　　*　　*

Gonosco Dono came to the English howse, and amongst other talk tould me that the King had sent hym word to burne all the tobaco, and to suffer non to be drunk in his government, it being the Emperours pleasure it should be so; and the like order geven thorowghout all Japon. And that he, for to begyn, had burned 4 *piculls* or C. wight this day, and cost him 20 *taies pico*; and had geven orders to all others to doe the like and to pluck up all which was planted. It is strange to see how these Japons, men, women, and children are besotted in drinking that herb; and not ten yeares since it was in use first.

〈リチャルド・コックス日記〉一六一五年八月七日、○新暦十七日、元和元年六月二十三日ニ當ル、權之助殿英商館ヨ來リテ、種々談話の際、國王より、煙草をすべて燒棄し、領内に於て何人にも喫煙を許さゞる樣命令あり、おは皇帝の意ヨ基くものにして、同樣の命令は、日本全國に出されたりと語れり、又彼は第一着手として、此日自ら四ピクル卽ちハンドレッドウェートを燒却せしが、其價一ピクルに付二百目なりき、尙他人にも之に倣ひ、且植付たる煙草をすべて抜去ることを命ぜりといへり、此等日本人が男女兒童皆此の草を喫するに熱中せるを見て、不思議の感にたえず、然も其始めて用ひられし以來、未だ十年にも及ばざるなり、

○煙草流行ノコト、慶長十年是歳ニ、煙草禁止ノコト、同十四年七月是月及ビ、同十五年十月十四日ニ、煙草ニ關スル禁令ヲ頒チシコト、同十七年八月六日ニ、更ニ煙草ヲ禁ズルコト、元和二年十月三日ニ、各其條アリ、參看スベシ、

〔參考〕

LETTERS RECEIVED BY THE EAST INDIA COMPANY FROM ITS SERVANTS IN THE EAST.

Vol. II. No. 133.

William Eaton to Richard Wickham in Edo.

Osaka, March 11, 1614.

[*Extract.*]

Here of late hath been divers to the number at the least 150 persons apprehended for buying and selling of tobacco contrary to the Emperor's commandment, and are in jeopardy of their lives, besides great store of tobacco which they have here burnt, etc.

煙草密賣買者ノ檢擧

白木屋煙管ヲ買占メテ巨利ヲ得

其後禁制漸次弛ム

〔東邦に在る使傭人より東インド商會に贈りし書翰〕　第百三十三號

千六百十四年三月十一日（慶長十九年二月一日ニ當ル、）大坂發、ウィリヤム・イートンより、江戸滯在中のリチャルド・ウイッカムに贈りし書翰の一節

當地にては、近頃數多の人、少くとも百五十人は、皇帝の命令に反して、煙草を賣買したるが爲めに捕へられ、其生命を失はんとし、又多量の煙草を燒きたる等の事あり、

〔本朝世事談綺正誤〕　七十九　煙管　（略）　上

元和元年六月廿八日、天下一統に、多波古御停止ありける、そのころ白木屋といふもの、柳原の封疆（ドテ）を通るに、つかれたる乞食の、菰の下にしのびて、たばこを呑をみて、渠がおもふは、かくきびしき御停止に、糧につきたる者だに、これを捨得ざる事、かほとに世の人好むなれば、近ほどにゆるやかならん事を考、江戸京大坂の捨れるきせる、其外たばこの器の當時用だゝざるを買求め、庫に納む、はたして程あく、此禁の弛けり、時に右の器物をうりて、大きに利を得て、富有となりて今にさかふ、

按るに、程あく御制禁の弛けりといへるはひがことなり、ひと度御禁しの

ありしより、今に御免はなきを、つき〳〵をゆるやかになりもて行しなり、そかゆへにきせるのみ、御用とて名のれる職はあらず、今兩國に村田屋といへる喜世留も、御飾御用といへるとぞ、また白木屋の事、俗間に傳ふる所のもの、本文にかはれることなし、今現にかの家の印に〆如此なるものをつくるは、きせるをもてふたつうちちがへたるかたちをかたどりたるものといへり、

〔墨海山筆〕　四別　破烟草の辨

夫れ烟草といふもの、元巒國の產よして、中華の物よもあらじ、曾て聞、慶長十年の比、そ〳〵めて此國へわさ〳〵、元和のそ〳〵めより、都鄙よ普くなへて翫ふ事よなりぬ、（以下煙草ニ關スル利害論、及ビ詩歌ヲ輯ム、以後ノモノナルニヨリ省略ス、）

是ヨリ先、東大寺堂衆、大乘院信尊ノ受戒會戒和尚ノ事ニ關シ、家康ノ裁決ニ服セズ、再ビ之ヲ訴フ、家康更ニ之ヲ審判シ、東大寺南觀音院宥雅ヲ戒和尚ト爲ス、是日、信尊受戒ノ儀ヲ行フ、

〔東大寺寶珠院舊藏文書〕

以上

大乘院御門跡可有御受戒會ニ付ゐ、戒和尚職之儀、東大興福兩寺之堂衆及相論候、於御前被聞召届、東大寺之和尚職久雖退轉候、先規在之上者、戒臈次第可相任旨被仰出候、興福寺ニ相限舊記有之否、重ゐ雖令穿鑿候、其證據無之候間、守舊例、受戒會被相調尤候、爲其申入候、恐々謹言、

戒和上ヲ東大寺ニ定ム

兩方ノ申分

大乘院信尊ノ受戒延期

二月廿九日　○元和元年

金地院　崇傳（花押）

板倉伊賀守　勝重（花押）

東大寺堂衆

〔本光國師日記〕 二十　慶長十九年

態以次飛脚申入候、南都大乘院御門跡御受戒會ニ付ゐ、兩堂衆戒和尚出入、先日一乘院御門跡御下府之刻被聞召、東大寺之戒和尚百六十年退轉之由候故、如近年ら被仰出候然處ニ今度東大寺之清涼院被罷下、中古興福寺も百六十年退轉之記錄有之由被申上候故、當秋御上洛之刻、双方之記錄令一往可被成御覽候間、大乘院御門跡御受戒會、先御延引候樣ニ可申入旨被仰出候、其由急度可被仰渡候、爲其令啓候、恐惶謹言、

六月十三日　○慶長十九年

金地院

本多上野介

板倉伊賀守殿　人々御中

昨日以次飛脚申入候、爲念重ゐ令啓進候、

六月十四日

金地院

本多上野介

板倉伊賀守殿　人々御中

右兩通上野殿へ持せ遣ス、

七月廿三日、大乘院殿七月十五日之御書來、受戒會之儀早々相極候樣ニと申來、則返書遣ス、土岐左馬殿ゟ被届、則返書左馬殿へ持せ遣ス、

當月十五日之御書、同廿三日令拜見候、戒和尚出入之儀、急度相極候樣ニと被仰越候、東大寺衆當地ニ被相詰候舊規共被聞召届可被仰付旨ニ候、

信尊受戒ノ日ヲ定メンコトヲ崇傳ニ依頼ス

元和元年六月二十八日

東大寺之堂衆又罷下由候條、貴寺之堂衆も、定ゑ可罷下と存候、落着次第御受戒尤可爲珍重候、御取成之儀、疎意不存候、此由可有御披露候、恐々謹言、

七月廿三日　　金地院

大乘院御門跡御內

因幡法眼

當月十五日之御書、同廿三日令拜見候、一大御所樣御上洛之儀、未定ニ御座候、一戒和尙之出入、双方申分、舊規被聞召届可被仰付旨ニ候、東大寺衆于今當地ニ被相詰候、堂衆も追々下府候由候、貴寺之堂衆も、定ゑ可被罷下と存候、一御前珍敷御沙汰も無御座候、節々御上左被仰出、御取成共申上候、猶期後音不能詳候、此由可有御披露候、恐々謹言、

七月廿三日　　金地院

一乘院御門跡御內

中沼左京殿

七月廿九日、南都興福寺五師中ゟ飛脚來、五師衆七月廿三日之狀來、一乘院殿七月廿三日之御書來、何も返書遣ス、

〔本光國師日記〕三十　慶長十九年

急度令啓達候、南都東大興福兩寺戒和尙出入之儀、寅前一乘院殿御下向之刻、東大寺ハ和尙職百六十年退轉之由被仰上ニ付ゑ、此中如有來、可然樣ニ被思召候處、今度清凉院被罷下舊記被相考、如此書付被指上候、中古興福寺よも百六十年和尙職退轉候、是ハ戒臈無之候へハ、互ニ中絕申事ニ候、幸今度ハ東大寺ニ戒臈有之儀ニ候條、任舊例被仰付候樣ニと訴訟被申ニ付ゑ、此目安興福寺へ指越、被申分於有之者、可被申上候、舊記此書付之通ニ候者、此度東大寺戒和尙補任尤之旨被仰出候、右之樣子、於其地双方被遂穿鑿可被仰越候、以其上落着之儀可被仰出候、爲其東大寺之目安相添進候、恐々謹言、

八月廿四日　　金地院

板倉伊賀守殿

本多上野介

東大寺提出ノ先規調書

一受戒會和尙出入付、東大興福兩寺守臈次任和上候、此以前興福寺仁百六十年退轉之子細者、戒臈之仁無之故候、又東大寺仁七百六十餘年闕如之儀者同前ニ候、和尙被望候仁者、此方衆中之八人目末仁着座候、此度者東大寺仁戒法傳受之老僧御座候、所詮如先規、兩寺戒臈之法度相立申候樣被仰付候者、忝可奉存候、

一聖武天皇天平五年癸酉爲受戒法送詔於唐朝鑒眞和尙賚來朝事、雖領勅請、來朝不疾、次

孝謙天皇天平勝寶六年甲午二月入朝、卯月初、

大佛殿之御前築戒壇、

法皇聖武御登壇、恭受三聚圓備淨戒、

皇后光明御受戒、是則和國戒壇濫觴、其次代々御門後嵯峨天王、伏見院宮、

禪林寺之法王、其外御室、關白九條之天下、鹿薗院、普光院、公武御受戒度々也、

戒和上次第

天平寶字七年癸卯東大寺鑒眞之弟子法進大僧都　八十一

寶龜五年　藥師寺　如保　年八十四

延曆五年　元興寺　昌禪　年七十八

同十四年　招提寺　豐安　年八十

大同元年　興福寺　長惠　八十二

弘仁四年　法隆寺　義觀　八十五

同七年　東大寺　慶修　八十二

天長七年　藥師寺　常詮　七十八

承和七年　法隆寺　義運　八十三

同十二年　興福寺　壽敎　八十二

仁壽元年　元興寺　惠隆　七十六

天安二年　東大寺　玄幡　八十一

貞觀八年　東大寺　寂敎　七十八

同十五年　元興寺　覺詮　八十一

元慶二年　法隆寺　眞敎　七十八

同　四年	元興寺			
仁和三年	東大寺	壽詮	八　十	
昌泰二年	東大寺	祥勢	八十二	
延(喜)壽五年	大安寺	叡南	七十九	
同十三年	招提寺	壽慶	七十七	
延壽十七年	大安寺	運湛		
延長六年	大安寺	安矣	七十八	
承平九年	大安寺	安虛	八十二	
天曆二年	東大寺	昌矣	七十九	
同　四年	東大寺	寶惠	八十七	
同　八年	東大寺	慈高	九十一	
同十一年	東大寺	增敏	七十八	
應和元年	東大寺	明祐	八十三	
康保二年	東大寺	武忠	七十八	
天祿元年	東大寺	安達	七十三	
		正蓮	七十八	

天延元年	元興寺	平油	八　十
天元貳年	東大寺	昭鏡	八十二
永延元年	東大寺	仁延	七十三
長保三年	東大寺	仁泰	七十六
寬弘元年	興福寺	忠與	八十九

自承和十二年至寬弘元年百六十年興福寺ニ退轉、

應安七年	東大寺	堯辨	七十四
嘉吉二年	興福寺	祥寬	八十二
文安三年	東大寺	春專	七十一

自應安七年至文安三年七十三年東大寺ニ退轉、

又自文安三年至慶長十九年百六十九年東大寺ニ退轉、

自古至于今ニ從末一和上ニ登候事ハ無之候、末座之仁此度戒和尙仕候へハ、二月堂を初として、諸會式戒臈之次第相破候間、法度相立申候樣被仰付候者、忝可奉存候、以上、

東大寺

寅　月　日

伊賀（うらかき）殿へ折紙相添候間、持參可申候、伊賀殿ゟ興福寺へ可被相尋候也、

名も判も無之

八月廿四日

右折紙とひとつゟ清涼院へ渡ス、

兩堂衆

受戒會和上之儀仰出之樣子、板伊州迄、本上州、拙老連判ニゟ、折紙上申候間、可被得其意候、○上下略、八月二十六日附、興福寺五師中宛、崇傳返書案、

〔本光國師日記〕十五　元和元年二月三日、大乘院殿ゟ御書來、御受戒會之儀申來、則返書遣ス、案左ニ有之、

御書忝存候、從公方樣御服銀子御拜領候ゟ、被成御滿足之旨尤存候、隨ゟ受戒會之儀被仰越候、板伊州へ可令双談候、猶以伊州へ被仰入尤存候、此由御披露所仰候、恐々謹言、

二月三日

大門樣御內

金地院

因幡法眼

二月十七日、清涼院十六日之狀來、上生院被居、

廿四日、東大寺師二月廿四日之狀、青銅三十疋來、則返書遣ス、

廿五日、東大寺堂衆上、年預五師二月廿四日之狀來、清涼院二月廿四日之狀來、何も堂衆持來、

當御門跡可有御受戒會ニ付ゐ、戒和尙職東大興福兩寺之堂衆相論故、御延引被成御迷惑之由尤存候、東大寺之和尙職久雖退轉候、先規有之上者、戒臈次第可相任旨被仰出候間、被成其御心得、急度御受戒會御執行可爲珍重候、此由可有御披露候、恐々謹言、

二月廿九日

金地院

板倉伊賀守

大乘院御門跡御內　○衆宛、崇傳勝重連署書狀ヲ載セタリ、上ノ東大寺寶珠院舊藏文書ニ同ジキニヨリ略ス、

〔本光國師日記〕十七　元和元年

元和元年六月二十八日

從東大寺、如此目安被上候、御受戒會御下行物、如先規被仰付、申分無之樣ニ可然存候、些少之出入立御耳候ゟ、御外聞如何ニ候、一乘院殿へ御双談尤候、此由可有御披露候、恐々謹言、

六月廿一日

大乘院殿御內
因幡法眼

覺

一從大乘院殿、東大戒和尙ニ渡り候入用ニ、八木拾石可被渡ゟ、因幡被申候、此以前興福和尙之時如此由候、他寺之事ハ、此方ニハ不存候當寺之竟辨戒和尙之時者從御受者古升貳拾石渡り候舊記御座候事、

一二十石渡り候ても、七大寺之從役者七十余人、其外上下召連候共ニ、下行幷一献等度々ニ候へハ、於和尙ニ中々仕合難調候、御勘定申趣幷催七大寺拜堂之入目等退ゟ辨置候、各不如意之躰ニ候へハ、迷惑ニ存候へ共、昔ゟ家職難捨候故、面々出錢仕、法事調候事、

金地院
板倉伊賀守

一右之趣、度々御理候へ共、何ゝと被申理、會式可有執行候也、

候樣ニ被仰付被下候者、可忝存候、此以前一乘院殿御執行之時も、寺へ二十石、和上へも二十石同前之義ニ御座候、以上、

六月十八日

東大寺
戒和尙宥雅

金地院和尙樣
板倉伊賀守樣

大乘院殿へ折紙相添候ゟ被申候間、如舊規二十石之通無相違被渡

（うら書）

六月廿一日、二條御殿ニて、此裏書折紙伊賀殿へ遣ス、祖藏司遣、戒和尙も遣ス、直ニ歸り候へと申遣也、

六月廿五日、大乘院殿內因幡法眼來、大乘院殿六月廿四日之御書來、則返書遣ス、一乘院殿去月廿四日之御書來、

〈東大寺雜事記〉

一　慶長十九年五月六日、雨天、

仰堂（抑當カ）寺戒壇院受戒會ニ付、戒和上之儀、先規ニハ、南都七大寺ゟ、大十師之內一腹役ニ而、次第ニ闕如之後、戒會ニ混亂ナシ、拜堂セラレ畢樣ナルヲ、

東大寺兩堂衆駿府ニ訴フ

中比末寺衆ニ年月拜堂被無沙汰ニ付而、然者ト云テ、兩寺ヨリ限タル樣ニ和上被持樣ニ聞畢、然共近年者當寺ニ受者依無之、任勝手、恣ニ和上他寺所持ノ樣ニ有之也、然處先年天正年中ニ、信長公御代ニ、一乘院受戒有之、其刻種々申分雖有之ト、其甲斐ノナクメ、興福寺愛染院和上ス、其後又天正之年號ニ、大納言殿守護之時、無申分他寺ヨリ彼和上勤役ス、是レハ又大門受戒也、然ニ今度大乘院若御所受戒可有ニ付、家安（康）將軍ヘ訟訴可有之旨、度々評儀在之、拙子（○佛生院實雅）申分ニハ、ハヤ百五六十年モ當寺ニ持ヲクルヽ、其上時分柄兩堂無物也、且ハ駿府ヘ下向、旁以難成條思召トマリ候ヘと、數重理リ申處、他寺兩堂衆ニ依等閑ナキニ、右通存分不調トテ、違背之旨不及是非、依其如右記、兩人寶住院龍藏院在駿府ス、如案當寺非勝手ニ御前ニ而相濟、然ハ拙子如申、此地ニ而無作トメ張儀云テ、法事取行ナウタルカ可然ケレ共、無心得衆二三人所行トメ、幾金銀遣テ、無用和上ヲ見テ、後代迄惡例限沙汰也云云、

九日、半日雨、例年大佛殿御經受戒會公事ニ、料所納依遣ワルヽニ無執行、無勿躰事也云云、

中性院駿府ニ下ル

東大寺衆上洛

廿三日、終日雨、從兩堂駿府江戒和上出入右左ヲ聞ニ、與五郎ヲ被指越、

七月廿日、受戒會之事、當寺勝畢ニ成カト云、大佛ミクシ可被成旨ニ而上生院又被越ト云云、受戒會出入ニ中性院被越ト云云、

廿七日、受戒會之儀ニ付、中性院駿府ヘ寺クワントテ、受戒之儀ニ付被罷越、雖不參參勤八月十八日、中性院駿府ヘ被越ル、

帳ニ被付畢、一膓も雖不參共同之、是ハ勿論カト存、

九月廿四日、天氣、上生院ト中性院、法住院、駿府ゟ歸寺、

〔東大寺雜事記〕ニ　慶長二十年二月十七日、受戒會公事、重而京ヨリ與福寺訟訴ニ付、當寺兩堂衆ヨヒニクル也、

十八日、觀音講有之、吉祥講行壇供ノ次當坊也、雖然受戒會公事入目ニ、彼料遣由□□□□壇供モ、午玉モ不出、杖切承仕下行壇供ハカリ、遣乘院ゟ帳被出由、我等不參、元興寺ヘ出頭、

廿四日、去年以來受戒會公事ニ、兩奉行ヨリ召文來云、兩堂衆五人上落、

（ニカ）二月朔日、如例三晝夜開白受戒會之儀、戒和上東大寺勝□□□成候テ五人被下ル、大乘院殿ヘも、當寺堂衆ヘも、兩奉行折紙付畢、

南觀音院宥雅上洛

七日、南觀音院戒和上綸旨ノ爭ニ上落、深宗ト順良ト同心云云、

十日、南觀京都ヨリ下向也、兩奉行□(讀カ)申也、綸旨ノ儀ハ兩人跡ニ殘ルト云云、

廿二日、文殊院樽壹吊ヤル、綸旨ノ儀ニ、深宗小野ヘ被越也、

五月八日、大佛殿御經無之、受戒會公事ノ入目ニ遣ト云云、

南觀音院宥雅戒和上ノ綸旨出ヅ

廿四日、戒和上御綸旨出ルル、南觀音院宥雅大八十一歲、法花堂ノ一臈也、

六月九日、大乘院殿御受戒之案內有之ト云云、

廿一日、雨天、戒和上精進料之儀ニ付ゐ、深宗房出京、

廿四日、兩堂衆各々申分我等申分曖有之、曖衆新禪院、戒壇院、大喜院、阿彌陀院、曉和談、

宥雅戒和上拜堂

廿七日、午ノ刻戒壇院千手堂出仕、鈍色白五帖大小十師共ニシタウツハガス、香呂モ不持、小者ヒタヽレカミシモ日カサヲサヽスル、

出衆和上宥雅(東法方)　東羯磨師(法)快音　羯磨ノ和上(中)泉海　弘玄(小十師法)　實雅(法)

西羯磨師(法)眞快　羯磨(マヽ)ノ阿闍梨(中)貞弁　良宥(小十師法)　清秀(法)

興福寺出仕大小四口、大案寺壹口昭(祖)提寺二口、藥師寺二口、法隆寺二口、

萬事別記ニ有之、

廿八日、巳ノ刻ニ出仕、法眼青甲大乘院殿御出仕、午ノ刻申ノ刻仕舞、別記有之、

受戒曳物

廿九日、和上坊振舞有之、

晦日、大小十師布施物和上坊ヨリ被曳ル、廿七日ニ請ル事本戎(戒カ)也、依其他寺末寺等ハ廿七日ニ被曳ル也、風呂有之、

請文書樣

請　大乘院御受戒會曳物事

合

右法花堂方小十師實雅分之所請之狀如件、

慶長廿季(乙卯)六月廿七日　請使判

廿石和上ハ下行十合□□□ノ廿貫下行之記モアリ、此時ハ一斗三升ツシト見ヘタリ、升ハ寺升定長器定ツシハ貳斗ツシ、

出衆之事中方法方ト云ワカチ無之、夕ヘ東大方大小四口、元興方大小四口、合東元兩寺之出衆座上ヨリ次第ニ人口出仕ト云云、一献ナシ、料ニ而引故也、

爰ニ長泉房者、順良房ヨリ座上ナレトモ、辭退アリテ下座順良ヘ、小十師ニ被出畢、惣而中門四口法花四口トワカル程ニ、法花衆ヲ中ヨリカタラ

東大寺衆家康秀忠へノ禮

ウナント云事ハ無躰儀也、次第ニ兩堂ヨリ八口出而、上四口次第ニ大十師、下四口次第ニ小十師トナルカ正躰也、今度我等ヲ中門ノ役者ナル程ニカタラワスノ、ヒノハウ專乘ヲ出サウナト云事、ナニヨリ〳〵中門非儀也、我等イロ〳〵云達而出ル、右如記辭退ナレハ、尤從今古如此也、

今度受戒會年預五師者正源院中將公カリヤ料廿石被請取レ畢、學侶一獻者コクヤニ而有之、不審、

潤六月十日、通夜番、今日迄次上八泉房ニ渡ス、戒和上成就之禮儀ニ深宗房出京、

十五日、學侶者戒和上祝ニ、南觀音院振舞有之、行也、

十七日、三ヶ院衆和上祝ニ、南觀音院御振舞、行也、

七月十八日、如例觀音講兩度ノ一座ニ在之、日中以後元江出仕、戒和上公事勝手ノ御禮ニ、將軍家康二條之御城江、持寶院上落、入目兩堂ゟ半分、和上半分、

〔東大寺戒和尙相論記錄〕（表紙）○大和

慶長廿年三月十六日

受戒會戒和上相論之覺日記

龍藏院弘玄」

兩寺ノ申分

一今度受戒會之相論各連判旨以被相企候事、慶長十八年ヨリ至慶長廿年之二月廿九日相濟候、慶長拾九年三月十九日ヨリ寶住院と龍藏院と兩人駿府へ罷越候、同卯月十八日ニ、於御前對決有是、然處ニ、目安之面ハ悉々申分相濟候處、爰ニ東大寺ニハ百六拾九年久々退轉仕と長老被申上候、然者興福寺ニハ退轉其例なきかと御尋被成候返答ニ、御定ニ候、たゝ一度之間さへ廿六七年御座候、然者四五度他寺ニ戒臈御座候へハ、百五六十年程ニも、無御座□□（談カ）重雖問答候、御望御身ニ不立候て、先規次第と被仰出候間、急同卯月廿一日ヨリ、龍藏院ハ罷上、同廿八日ニ歸り付候、寶住院ハ跡ニ被殘候、然處ニ要錄勘合候ゟ見候へハ、承和（仁明天皇）十二年ヨリ寬弘（一條院）元年迄、興福寺ニも退轉其例見出候間、今一度者是非ニ清凉院ニ被仰上候ゟ給候へと、各賴被申候、其樣子者、其以後中性院又駿府へ御越也、清凉院と同心候ゟ御上有也、

家康先規次第トス

東大寺ノ先規調査

東大寺先規ヲ申出ヅ

一東大寺ニ百六十九年退轉御座候、興福寺ニも百六十年退轉御座候、

元和元年六月二十八日

兩寺衆ノ對決

一戒臈次第ニ上座有之事者、諸衆共ニ同前事、

一末座之仁一和上ニ任事、往古ヨリ無御座候事、

右三ヶ條内々被申上度と候處、同六月十二日ニ、從上樣御尋被成候間、清涼院具ニ被申上候へハ、懇ニ聞召被屆、又同七月十二日ニシキニ被仰出候ゐ、興福寺ニも退轉例有之ハ、和上職之儀、戒臈次第卽此度東大寺ニ戒臈之体有之者堅其通ニと被仰付候、就其金地院、本田上州との兩判ニテ、板倉伊賀守殿へ折紙付候、其故伊賀殿ヨリ興福寺金勝院へ折紙被付候、其折紙ニも寫置、受戒會之箱ニ有之、尙々書ニ、此上ニゐもたゝ敷處分於有之者急々と候樣それを條ニ取、又慶長廿年卯二月十五日ヨリ、他寺之衆在京候ゐ訴訟申也、

一當寺衆ニも可罷上之由、長老ヨリ申被下候間、同廿四日ヨリ、中性院、寶住院、龍藏院、深乘房、蓮乘院五人罷上候、興福寺衆ハ正法院と金勝院と兩人迄也、

一同二月廿九日ニ、伊賀殿ニテ、長老と兩人前ニテ對決有り、興福衆兩人、此方之衆中性院、寶住院、龍藏院三人對決ニ出也、

東大寺ノ勝ニ決ス

一興福寺ヨリ十二ヶ條雖書上候、一々用ニ不立候、日中前ヨリ申ノ剋過迄也、

對決有リ、

一伊賀殿御申樣ニ、扨東大寺ニハ不持云證跡ヲ出候へと御尋候處、新リ、

一戒和上者興福寺ニ限ル、東大寺ニハ戒和尙持タル勅宣ヨリ、度々ノ觸狀慥有敷紙ニ書たゐ物を出候、長老、伊賀殿御覽候ゐ、是ハ用ニ不立、其爲ニ猶々惡敷物を剩被出候と御申候、其證跡者、

一東大寺ニ戒壇有之故ニ、深沙彌之二字ヲ下置候、然者二字ヲのそき、和上職持道理ニテハ無之かと、伊賀殿たつて御申候て、其まゝ他寺ノ衆ハ御立き候也、

一同廿九日之晩ニ、中性院と龍藏院と、又伊賀殿へ參候へハ、大乘院殿へと此方へと一落濟申候、兩判ニゐ折紙給候、扨々雨降地うたまゐとハ加樣之事ニテモ候哉、不斜ヨロコヒ罷歸候、神慮第一道理之旨ニゐ候歟、

一大乘院殿への折紙もうけし、此方之折紙ニまきそへ、受戒會之箱ニ有之、重ゐ違亂之事有之ハ、取出可被見者也、

元和元年六月二十八日

一興福寺ニ百六十年退轉之證跡者、八幡宮新造屋五卷目ノ要祿(錄)ニ有之、

一此時之和上者、南觀音院宥雅大也、同三月七日ヨリ、長老板倉伊賀守殿ヘ

禮ニ御上候ゑ、同十日歸坊也、長老、伊賀殿一段之きゝまん也、興福東大二通之折紙も、ウラニ寫置也、

一其以後大御所樣ヘ禮ニ、持寶院長職上洛、二條之御城ニテ禮有り、此時ノ造作者、和上と半分ッヽ、相方より半分ニ有之り、〇中略、二月二十九日附、因幡法眼宛及ビ同日附、東大寺堂衆宛、金地院崇傳、板倉勝重連署狀ヲ載セタリ、上ノ東大寺寶珠院舊藏文書及ビ本光國師日記ニ同ジ、

慶長廿乙卯年六月廿八日、東大寺南觀音院宥雅大新戒和上ナリ、大乘院殿御受戒ナリ、六月十(廿)八日午鐘定ニ出仕有り、拜堂者前日有ル、拜賀者同廿九日辰鐘定ニ有之、一受者之御寶名者義尋ト云、

公事之入目等遣方之事

一戒和尙之相論ニ遣方兩堂カケイミノ供物、悉ク被指遣、其上大佛千部經方モ一兩年被遣候、其外ニ、

一坊舍九間ニ貳百五拾匁つヽ出銀候也、小日記等別紙ニ有之、各此通難澁候ヘ共、戒法一乘示越了、建立也、

一慶長廿年卯二月廿四日、各五人在京ノ雜用ニ貳百五拾匁借銀有之、其以後惣ノ禮ニ遣乘院上落(洛)之禮錢迄也、

一兩堂連判之供物を手當ニ借被置候也、

一高惣都合參貫五六百匁程も入候歟、大形、

一諸會合坊舍九間ニ廻り有之、度々ノ雜作不及申、

東大寺戒和上宥雅拜堂記

就大乘院家御受戒會、從慶長十八癸丑及相論、遂ニ京都馳登、天下奉行衆懸明鏡焉、判者金地院長老、板倉伊賀守等也、至明年甲寅未落着、三月上旬之比、興福寺ノ兩堂實光寺駿府ヘ下着ス、隨其左右、當寺兩堂ヨリ使僧相ヒ供下ス、貞辨弘玄等也、於源朝臣家康公御前、雖及多重問答ニ、未究、同□半夏節、花嚴之碩德實英權律師論義決□達再三上聞、大將軍彼隨言上ニ、戒臈次第可補任旨被成下知畢、于時慶長二十之春、比丘戒者和上興福寺限ニ令言上、當寺返答云、往古者七大寺之以戒臈ヲ爲和上焉、三國傳通律之綱要等備亀鏡ニ、不ル私謂證文ト、和上職補東大寺、爰興福寺兩堂司者、魂煩忙然去座、東大寺之喜慶不可過之者歟、□□勅許之

元和元年六月二十八日

宣旨被下、同年乙卯六月廿七日拜堂矣、

一　寺次第之事綱所坊前札（中間ヲ挾ミ白糸ヲ縣、厚紙廣サ也、十同串長三尺五寸七分四方、四行歟、）

東大寺臨時受戒會寺次第

東大寺和上宥雅大德律師

　東羯磨師快音大德律師

　西羯磨師眞快〃〃〃〃

興福寺東教授師隆深〃〃〃〃

　西教授師寶光〃〃〃〃

東大寺沙彌戒和上　貞辨〃〃〃〃

　沙彌戒羯磨師泉海〃〃〃〃

招提寺講遺教經師　行賢〃〃〃〃

法隆寺說相師　琳清〃〃〃〃

大安寺說淨主　高珍〃〃〃〃

藥師寺作時師　英宥〃〃〃〃（弘玄眞宥）

　堂達師　此三ヶ□

　依時□

慶長二十年六月日　如此書畢

一大乘院殿御受者之方ヨリ七大寺ノ交名取ニ來ル時、右ノ寺次第ノ趣ニ書送畢、但シ役者付ハ無シ、交名計也、先々者受者之方ヨリ、僧綱之（牒カ）牒ヲ七大寺ヘ廻ラサレ畢、

威儀師從儀師等ノ名ヲ書ス、畢今度者和上坊ヘトリニ來ル也、

一大安寺不闕分ニ興福寺之唐院可被出之由、大乘院ヨリ被申屆畢、久退轉之寺如何ト返事アリ、重而大乘院ヨリ云ク、唐院者彼ノ寺舊記重而靈寶以下ヲ預リ、由緒無紛由被理畢、無異儀出仕ス、先年之受戒會ニハ笠之荒神ノ住出仕ス、是モ彼ノ寺ノ由緒ト云々、

一大乘院家御受者ヨリ、訪料和上坊ヘ二十石被渡畢、內々可有減少由被申處ニ、以京儀押テ廿石請取也、

一和上出仕之用意、先戒壇院ヘ案內之事、

法服　紫甲　表袴大文　念珠　檜扇　三衣袋　草座　鼻高　手輿付綱

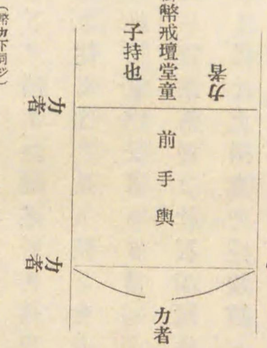
　唐笠持袋入　從僧二人　鈍色　白五帖二具　表袴　鼻高　香呂入香呂箱

　三衣袋入居箱　水瓶　同タライ　襪子　草鞋　中童子　大童子二人　褶束

元和元年六月二十八日

二具　力者八人（此内二人ハ香呂箱持居箱持、□人ハ草座持、一人ハ水瓶持、殘者唐笠圓座等ヲ持、）

先和上氣比之社ヘ參次第



右　從僧　三香呂箱
　　從僧　ワラスハキ　二草座
　　一鼻高

中　童子　大童子
　　大童子

左　威儀僧
　　威儀僧　二行ニ立、下人等供ス、

和上以下著座

一御蘩（幣カ下同ジ）之支度事　氣比之社ノ用

串二本檜木、長三尺五寸、廣サ一寸ハカリ、白米三合、

裹紙ハ一枚三ニ疊テハサム、四手ハ二枚ヲ重四流ニ切也、

一氣比之社ノ前ニテ、手輿ヨリ下リ畢、從僧御蘩ヲ取テ和上ニ奉ル、和上三拜畢、從僧弊ヲ取テ、戒壇堂童子ニ渡、某請取テ社壇ニ進之、然後ニ戒壇堂南中門ノ壇下ニテ、輿ヨリ下リ畢、中童子鼻高ヲ以テ從僧ニ奉ル、從僧鼻高役畢、和上堂前ヘ參ル、請師ノ座ニ半疊（今ハタヽミ一帖）ヲ敷、其上ニ圓座ヲ敷畢、其上ニ

誦經導師中性院眞快

從僧草座ヲ敷、和上着座ス、サテ從僧左右ヘ蹲踞ス、中童子大童子庭ニ將（林）木ニ腰カケテ侍ル也、威儀師ハ西ノ方ニ立侍也、誦經畢テ退出、中門ヘ出、西ニ廻テ千手堂ヘ行、堂前ニテ輿ヨリ下リ着座ス、從僧香呂ノ箱等ヲナヲシ、草座ヲシキ畢、和上ノ草鞋ヲ從僧ナヲス、

南ノ戸口出入

東頭　南座　東大寺　大小十師八人　招提寺　藥師寺

中ノ戸口出入　後ニ屏風

千手堂　和上座　草座　圓座疊

北ノ戸口出入

東頭　北座　興福寺　大小十師四人　大安寺　法隆寺ト　依勤役（座カ）□　配□（達カ）

一大小十師裝束之事、　鈍色　白五帖　檜扇計也、

但シ誦經導師者青甲ヲカク、從僧香呂箱等可用意、

一前々者法用定役者付ノ取奉云云、或帳ニ見ヘタリ、近來絶耳、

但シ寺次第ニ書載上ハ、不及奉ニ歟、可隨時云云、

一誦經導師之事、今度者中性院眞快大德也、

（朱書）「作法了テ上和（和上カ）ヲ引率メ壇ヘ詣ス云云、」

一衆中問云、大小十師、氣比之社戒壇堂ヘ和上ニ相供スカ否、

答非、千手堂ヘ直ニ移ルヘシ、

一曳物之事　大十師分

世俗ノ領ヲ曳箱ノ圖
蓋底ニ緣少アリ、
長サ五寸四分歟、
横三寸六分計
中ニ札有
上ヘ一寸七分計、

單衣代　世俗代
繪手箱代菓子幷袋米代
合三百五十七文

此代七斗一升四合、長合二斗和市也、
十口ニ合七石一斗四升者、以上大十師分也、

小十師分者
箱少也、大形
如圖、

小十師合（分カ）曳物

白布代　世俗代
入札有白手箱代菓子幷袋米代
合貳百七十文

此代五斗四升長合升ニ二斗和市也、
十口ニ付合五石四斗也、

諸下行方

一御佛餉　五斗、長合升也、戒壇堂童子請取

一公人六人ニ各三升宛、長合升也、酒食ノ代四升一合、惣中ヘ下行大炊堂童子モ六人ノ內也、

一小綱二人各三升宛、酒食ノ代一升長合也、

一鎰取二人ニ下行分

三斗五升十合升ニテ下行米錢代也、

三口之綱所捧物之事

威儀師分　因幡法眼也、合六百五文　此代米六斗五合送十合升也、
單衣代白布代繪手箱代菓子米代也、
從儀師分二人　維那註記　合八百十六文　此代米八斗一升六合二人送十合也、
白布代黑布代手箱代菓子米代也、

一誦經導師　三百文代米ニテ十合升三斗送畢、

一拜賀之導師同　同

一神主葬三本五百文　依時多少アリ、

寺務へノ擧狀

此外從僧僮僕衆三升宛ホト下行、
大小廿箱ノ代　四升當升
蘇串二本　　札串一本代二升五合當升
寺次第板ノ代　一升五合當升
以上拜堂之支度也、
勅宣拜領之趣記
一御寺務　東南院殿へ擧狀之案文
東大寺法花中門兩堂大小十師等簡定言上、
法花堂司大法師宥雅年八十二戒臈七十六
右件大法師者常住伽藍籠居年尙、尤足戒和上之器、仍爲令遂彼業大小十師等簡定、言上如件、
慶長二十年三月七日
如此書アテ所ハナシ、
一御寺務へ樽一荷兩種進上、
御內衆へ音信アリ紙一束ツヽ、五人、

廣橋兼勝參宮

奏聞擧狀

廣橋兼勝へノ贈物

禁中以下へノ獻上品

(傳)天奏廣橋大納言殿(兼賢ノ誤)參宮ノ間、重而上洛可被由(申脫カ)被仰出畢、御下向ノ時分出京ス、
御內衆へ音信アリ、小刀一二本ツヽ、
從大納言殿使者ヲツヘラレ奏聞ス、
一奏聞擧狀案文
東大寺大小十師等謹言上
欲早以當寺宥雅大德律師、可補戒和上職由、被經奏聞事、
右戒和上者釋門之崇班、律家之棟梁也、爰宥雅大德者、久翫木叉之月、偏瑩草槃之球、內外之行莫不周備、而今依七寺之高薦、既爲諸德之上座者、早被下勅許宣旨、將勤壇上之役矣、仍大小十師等言上如件、
慶長二十乙卯年三月日　付所者無シ
天奏廣橋大納言殿へ進上樽一荷斗入也、
速水安藝守取續へ油煙五挺
禁裏樣江進上杉原十帖大油煙十挺
女御樣江進上杉原十帖油煙五挺

女御樣取續江杉原十帖油煙五挺
官務江上錢一貫二百文
南奏辨殿江一貫二百文
上卿　一貫二百文
右此內緣次第ニテ理申セハ少々減少在之、
天奏廣橋大納言殿江一貫二百文ノ代ニ帷子一ッ安藝へ帷一ッ一貫二百
文代也、
以上勅宣之趣也、
勅宣寫
左辨官下東大寺
應以大法師者宥雅爲戒和上事
右得彼寺今月日奏狀偁、件大法師者、常住伽藍籠居年尙、尤足戒和上之器、仍
爲令遂彼業、大十師等簡定者、々々權(行カ)大納言藤原朝臣資胤宣、奉勅、依請者寺
宜承知、依宣行之、
慶長廿年四月六日　中務大輔兼左大史博(等脫カ)士小槻宿禰奉在判

戒和上勅宣

大乘院ヨリ戒和上ヘ受戒ノ案内

左中辨藤原朝臣在判
一大乘院ヨリ和上坊ヘ案內之文
　表書戒和上御房
當月廿八日臨時受戒會可有御始行候、被得其意、七大寺大德被相催、任例
可致調進候旨、被仰出候由所候也、恐々謹言、
六月九日　　長舜
　戒和上御房
　返事アリ、
來廿八日、臨時受戒會可有遂行旨、七大諸寺へ之可致相催由、可得其意候、
恐々謹言、
月日付大形如此　　戒和上宥雅
　因幡法眼御房
　拜堂觸狀
牒　七大諸寺大小十師御中
右牒申之處者、以羊才之身、可應戒和上之器由、恭令頂戴宣下、仍、來廿七日午

戒和上觸狀

同返書

元和元年六月二十八日

剋於戒壇院千手堂可遂拜堂之業狀如件、

年號月日

東大寺 戒和上宥雅

會式觸狀

牒　七大諸寺大小十師御中

右大乘院家臨時御受戒會、來廿八日可被始行之旨、綱牒到來、仍當日巳剋於戒壇院千手堂可被定法用之狀如件、

年號月日

戒和上某

私云、此狀一通ニテモ、先々被相觸畢、今度受者出入有之、隔別ニ觸畢、會式之觸狀者、前日ニ廻シ、拜堂之狀者、十日計以前ニ廻畢、先後依時違也、

補　和上職於東大寺狀（折紙也、○中略、本光國師日記二月二十九日附、東大寺衆及ビ因幡法眼宛書狀幷ニ寶珠院舊藏文書ニ同ジ、）

右此二通之狀賜事、永代東大寺之規模也、可秘藏々々、但一通者當寺ニ留リ、一通者大乘院ニ在、

松明四ツ可用意事

一會日之事　和上之裝束如拜堂、

大十師分者　法服　衲衣　念珠　香呂箱　檜扇　草鞋　鼻高　座具　襪子　從僧（鈍カ）純色白五帖等　直垂着　小者等、

小十師分　法服　青甲　念珠　香呂　檜扇　襪子　直垂着　小者等

一出仕之鐘之事　和上房ヨリ催（但受者ノ方ヨリ案内辨沙汰之、）

鐘三長打、小綱二八松明ヲ持、

次出仕之次第、千手堂ヨリ戒壇堂ヘ趣事、

和上之座如拜堂座ヲ去ル時、左右ニ向テ默禮、次ニ中ノ戶ヨリ出、鼻高ヲハキ、道中ヲ行ク、大十師共ニ座ヲ立テ默禮、終テ鼻高ヲハク、二行ニ列シ、衝戒壇堂西ノ近廊ニ趣畢、草鞋ヲハキ、手ニ香呂ヲ取リ、肘ニ係半具、弟子ニ衣鉢香呂箱等ヲ令持、後ニ坐シ、終テ面々ノ前ニ可置云々、

次請師之座南之邊ヲ通リ、堂前之過キ、東ニ向テ列リ、向堂前（デ）ニ三拜、坐具ヲ草鞋（ヲノ）坐、北ニ置ヘシ、此間（ニ）受者之三拜終テ、二羯磨二教授之所作在、

一請師之作法終テ、坐ヲ立、引頭之隨教授師（ニ）、堂內ニ入、但シ受者訃ヲ取リ、先々ハ卅時（（鈍カ））□

元和元年六月二十八日

和上作法

依本式ニ註之、近代ハ壇上ニテ說相已後被取訃畢、

一和上之所作東羯磨師敎發戒緣終テ後、堂達受者ヲ引テ問難ヘ出畢、

次單白差八問緣

先和上自手打磬、若ハ彈指ス、

和上問　僧集會(ハ)セリヤ不、東羯磨答僧集セリ、

〻問　和合セリヤ不、答和合セリ、

〻問　未受具戒者出、答此中無未受具戒者、

〻問　不來諸比丘者說欲及淸淨、答此衆無說欲者及淸淨

〻問　僧今和合何所作爲、

答　爲某甲(受者ノ名)作受大戒羯磨、手ニ受者ノ交名ヲ持、

幷和上此句ヲ微音ニ唸(ヤヽ)シ畢

以上和上ノ問羯磨師答畢、

此外和上役無シ、出堂ノ時隨敎授師退出、

一小十師從行烈出堂次第、松明二本堂童子持、從千手堂大十師之跡ニ行ニ烈、戒壇堂之後ヘ廻リ、東之廻廊之跡ヲ行、勅問之假屋ヘ移ル、近代ハ受者

小十師出堂

授衣之文役

之先立(サキニ)畢、依本式、後可立也、請師之作法終テ、堂達授者ヲ引テ、問難之假屋ヘ移ス、小十師跡ニ烈行、入堂之儀式畢、又廻リ樣式帳ニ詳也、繁ヲ恐テ不述、

次受者之座中壇ニ設、南面之東也、

次小十師之座中壇ニ設、南面之西也、五口坐、

次小十師之座中壇ニ設、西面之南也、五口坐已上戒壇堂童子之役也、

堂達小十師之拜終テ坐ス、

次堂達坐ヲ立テ受者ヲ引、至本座、令三拜畢、其以後沙彌戒遺敎經等戒緣終テ、堂達受者ヲ引テ、問難ヘ出令坐畢、從此已後受者引入作法、敎授師之役也、具ニ帳ニ載畢、

一小十師之內授衣之文役四人也、

此四口者、六念法之始ル間ヲ□□□□西(ノ)之戶口ヨリ出テ、授衣師之假屋ヘ行、東頭南向テ坐畢、徐壇上ノ作法終テ、堂達受者ヲ引テ來リ、三拜畢テ、令坐、次第ニ授衣之文唱畢、受者合掌、

次堂達受者ヲ引テ入堂、三拜終テ退散、

一授衣之文役者二人者、當寺勤之、二人者興福寺江指シ勤之、今度ハ如此、近年者當寺ニ計勤之云云、

唄

一唄之事　堪能之役大十師中ヘ沙汰之云云、依本式註之、

今度者和上唱之、

散花封揚

一散花封揚事　小十師之中堪能之役、依本式註之、

今度者堂達勤之、近代興福寺ニ和上職ヲ持不(不持カ)耳、羯磨等之上首、皆以彼寺勤役ス、今度者悉ク當寺ニ勤之、衆中之大好千悅有餘、斯レ乍如戒律相續之基歟、

假屋

一假屋之事

初問　戒壇堂南中門之東　授衣師所南中門之西

休所　南中門之外西寄　問難所戒壇堂東

已上依近代註之、本式ト者有異スルヿ、

拜賀

一拜賀之事後日沙汰之、

和上裝束如拜堂諸從皆以拜堂ニ同シ之、

但シ袈裟者納(衲カ)衣也、　表白導師相供シ、八幡ヘ參詣、御弊(幣)神主被出畢、

和上拜之屋ニ居ス、導師御弊請取テ和上ニ奉ル、和上請取テ、祝言後ニ神主請取テ神前ニ奉ル、次ニ合白掌三度、數ハ九也、從其大佛殿ヘ參リ、表白アリ、導師唱之、唱終テ、氣比之社ヘ參、歸院ス、

表白導師法住院貞辨

一表白導師之事、今度者法住院貞辨大德也、拜賀之儀式、以近代之躰ヲ綴之、從上古至中古、此沙汰無歟、

一問云、拜賀之時大小十師相共ニ、和上ニ從カ否、　答非從ニ

當寺和上職久而絕、故撰舊記等拜堂記編、庶後學者鑒察之、

東大寺戒和上記

慶長二十年　南觀音院宥雅

祐範大乘院ニ祗候ス

〔春日社司祐範記〕八慶長二十年乙卯年日次之記　六月廿六日、大神主殿同道シテ、大門樣ヘ祗候了、來廿八日、御受戒會アリ、爲御禮也、兩種一荷ツヽ持參、御對面御盃アリ、

信尊受戒後春日社ニ詣ヅ

天氣快然

廿八日、御受戒會、戒師東大寺堂衆沙汰也、今度興福寺堂衆相論、既達上聞、東大寺ヘ落居了、　御受戒已後ソノマヽ御社參、御奉幣祝師祐長御先途始仕合也、御門樣(マヽ)御祝着之由也、

祐長大乘院ニ祇候ス

信尊春日社社參奉幣

大乘院ノ春日社司招待

〔春日社記錄〕

一慶長廿年乙卯六月廿四日以來辰市家記中臣祐長○大和同○元和元年

乘院殿御受戒會有之、仍廿七日、御禮ニ祇候了、タウフ十五丁進上、

同日、巳刻因幡法眼御房ヨリ、

明日御受戒會御祝參御社參ニ付、奉幣之杉原二帖進之候、兩社計候、恐々謹言、

六月廿七日　因幡法眼

辰市左馬助殿　長舜判

上古ハ御幣串新調到來之由也、但辰市家舊記無之條不分明、同廻文有之、予悉相觸了、

就當御門跡樣御受戒會、明日廿八日辰之貝定御一獻被仰付候、御祇候待思召候所也、恐々謹言、

六月廿七日　因幡法眼

大宮神主殿　長舜

信尊春日社參

受戒ノ祝トシテ春日社ヘノ奉幣

正預殿
若宮神主殿
新　殿
正眞院殿
辰市左馬助殿

右之衆ハ御受戒會ニ付、御樽進上之故歟、辰ノ貝各祇候了、予奉幣役者之故不及一獻御理申、罷歸了、酉ノ刻御社參、戒壇院ヨリ直ニ騎馬以下悉供奉也、御車ハ略也、網代ゴシ二ノ鳥居下ヨリタゴシニテ御社參也、奉幣式如常、予束帶也、

壬六月三日、爲奉幣料百疋被下了、先規ハ三石之由也、

御受戒會御祝參爲御奉幣料百疋被進候、相心得可申入旨、御氣色所候也、恐々謹言、

壬六月三日　因幡法眼

辰市左馬助殿　長舜判

元和元年六月二十八日

御受戒會御祝參爲奉幣料百疋被下候、忝存候、以參上御禮可申上旨可然樣御披露所仰候、恐々謹言、

壬六月三日　辰市左馬助

因幡法眼御房　祐長判

○大乘院信尊受戒ニツキ、東大興福兩寺ノ堂衆、戒和尙ノ事ヲ爭ヒ、家康之ヲ裁シテ、興福寺ノ堂衆ヲ戒和尙ト爲シヽコト、慶長十九年四月十八日ニ、コノ後、マタ東大興福兩寺ノ僧徒戒和尙ニツイテ爭ヒ、幕府之ヲ裁決スルコト、寶永七年十月二十六日ニ、各、其條アリ、參看スベシ、

〔參考〕

〔華頂要略〕百四十四　諸門跡傳五　信尊大僧正　鷹司殿下信房公息、異本後法音院左府伊房公息云々、慶長二年誕生、同四年三月（イ八月）十日入室、（異本云）慶長十六年十一月十六日得度、戒師金勝院實光律師、イ良禪房、同十九年（二十）六月廿八日受戒、

二十九日、甲辰、本阿彌又三郎、故豐臣秀賴ノ骨喰刀ヲ得テ、家康ニ獻ズ、家康之ヲ返ス、又三郎、更ニ秀忠ニ獻ズ、秀忠、黃金ヲ又三郎ニ與フ、

黃金十枚ヲ賜フ

〔駿府記〕六月廿九日、秀賴所持之骨喰刀吉光一尺九寸五分、本阿彌又三郎尋出、献御前處、則被下於本阿彌、然所本阿彌將軍家差上ル、則黃金十枚賜之云々、○本阿彌次郎右衞門家傳ニヨレバ、當時又三郎ト稱セルハ、光室ノ子光溫ナレドモ、歲尙十三ニ過ギズ、コヽニ所謂又三郎ハ蓋シ光室ナラシ、

光室秀忠ニ鑑定ヲ指南ス

〔本阿彌行狀記〕一○上略光室、台德院樣刀脇差の御目利御稽古を被成、每日貳時斗宛御指南申上ける、御座の間の御次にも人を不被置せ、ぬき（刀脫カ）を御手より下され、御手に差上ける、冥加至極の者也、大阪落城の刻、秀賴公御刀を持出し、急き二條の御城へ持參し、權現樣に差上ける所に、殊の外御機嫌能、則光室に下されける、大名共に高直に賣候へ、去なから先將軍樣の御目に懸よと御意被成、則伏見に持參、台德院樣に差上ければ、御指領に被成へきよし仰出され、白銀三千枚拜領仕、此銀を親光德に千枚いたゝかせ、今千枚を親類朋友久敷召仕へも家人女童に至る迄殘りなくいたゝかせ、今千枚を我藏に納めける、此ほねはみは、大坂冬陣の時、秀賴公の御めのと子木村長門守鳴野口の御門を開、佐竹殿のそなへに押寄、一番鎗を突て、澁谷內

白銀三千枚拜領

骨喰刀ノ由來

膳と言ふ家老を打取ける、流石ゥさき備へ成故、早く引取ける、後藤又兵衛、
眞田左衛門佐抔見物して、古今無双の花鎗なりと感けるとなり、此時に秀
頼公御感状に添て、此ほねはみを拝領申也、明(年カ)則五月六日、此ほねはみをさ
して打死しける、權現樣御刀を御覧被成、これは秀頼公より木村に給りけ
ると聞〳〵召けるか、是を差ていさき能打死をしける、かはねの上の面目是
成へしと御意被成けると、光室同苗共に語り申也、總て名將の御陣刀は皆
名物也、小笠原右近殿古例をいへるハ、陣刀には七千貫の義弘、指添は五千
貫のはかた藤四郎也、如此名物の陣刀は、珍ら敷御ことと申けれは、武士の一
大事は最期也、親と兄は打死しける、我數ケ所深手を負けれとも、仕合悪し
敷なからへける故、自然のことも有はと、朝な胸にせまり有なり、餘の人々ハ
大きに違たる身なれば、陣刀に至る迄心得有、御心安き故おかゝき御物語
被成ことに被仰ける、小松中納言利常卿は、名物ならては常にも御差不被成也、
世に並なき名物數々御所持也、楠正成最期には、鬼切丸國綱、此御太刀は御
たゝり有之、依之秀頼公本阿彌に御預置被成しを、大坂落城の後、權現樣に
光室差上けれは、大閤より御預被成し太刀なれは、其儘家に置候得ことの上

鬼切丸國綱

藥研藤四郎吉光

河内ノ民之ヲ又三郎ニ賣ル

藥研藤四郎ノ由來

意にて、今に於て家の寶物なり、妖怪の者大に恐れ近付す、此太刀のことを、大
森彦七所持之刻、色々のふしき有、悉く太平記に見へたり、天下の金物の中
に第一と貴ヒ奉るは、天子樣の御寶物に名作の物有、態と名を顯はさす、此
御劔度々の炎上に恙なく、聊煙もかゝらす、鎚かねは湯に成御太刀に流れ
かゝると言とも、中心の色迄もかはることなし、此太刀は人作にては有へか
らず、

〔参考〕

〔武徳編年集成〕七八十 六月廿九日、太閤秀吉へ、大友宗麟ガ獻ゼシ短刀藥
研藤四郎吉光長サ壹尺九寸五分、或ハ骨喰ト稱ス、大坂落城以後、河州ノ鄉民是ヲ
得テ、本阿彌又三郎ニ見セシム、本阿彌是ヲ買取テ、響ニ神君へ捧ル所、則又
三郎へ與ヘラレシヲ、台徳公黄金五百兩白銀千枚ヲ以テ、本阿彌ヨリ召收
メラル、是ハ畠山尾張守政長所持シ、極運ノ時生害セント欲シ、其腹ヲ突ト
雖モ、其身ヲ傷ルコト無シ、政長鉦刀タルコヲ怒リ、傍ニ捨ル所ニ、藥研ニ當リ、
忽チ切破ルヲ以テ、無類ノ名刀ニ決定スト云々、

〔武邊雜談〕乾 秀頼公脇差骨喰と號吉光一尺九寸五分有之を、河内の百

骨喰粟田藤四郎吉光

姓むろね侯を、本阿彌取上指上侯、將軍樣に被進、小サ刀よ可被成由、大御所樣上意也、百姓よ黃金五百枚銀貳千兩被下、本阿彌よ金百兩被下、

〔名物記〕藤四郎

骨喰粟田藤四郎吉光　一尺九寸六分　御物

此刀ニテ切付侯得ハ、骨之縫綴侯樣ニ相脳(マヽ)侯ト申切レ物之由ニテ、骨喰ト名附之由申傳侯、

袖長刀ニテ室町家所持也、松永彈正へ渡リ、大友家求之、スリ上、長刀直シ差料ト成、千利休茶道見分之タメ九州へ下向之刻、此刀ヲ見歸國之上噂申侯ニ付、大友家ヨリ大坂へ送ル、木村長門守鳴之口戰功、佐竹家之侍澁江內膳ヲ討取、右高名無比類、秀賴感狀ニ骨喰ヲ添テ給之、并伊家之士長門守カ物具ヲ刻取、本阿彌又三郎手ニ入、權現樣へ奉入上覽侯處、長門守骨喰ヲ持タル事、骸上面目トノ御沙汰ニテ、又三郎御前ヲ退侯所、又被爲召、台德院樣へ入上覽侯樣上意ニ付、伏見へ罷越奉入上覽侯處、直ニ被遊御留メ、銀千枚被下置侯、

〔名物集〕下

骨喰ノ名ノ由來一說

同○御物

骨喰　長壹尺九寸六分　無銘

昔し大友の長刀也、高氏公鎭西御下向之時ニ、誓詞御味方ニ參侯時上ル、骨喰と申子細ハ、タハムレニ切マヲヲ致ニモ、先の者骨クタケ死スル故名付ル、段々不思儀成事數々有、後大內ニ有之、其刻刀ニ直ス、長刀直シ表本櫃之內ニ倶利伽羅、裏櫃の內ニ梵字、其下ニ不動有之、段々將軍家に傳り、秀吉公御物ニ成リ、秀賴公に御傳へ、大坂落城之刻失ル、其後御城之堀る出侯由ニ候、町人光室方に持參仕侯間差留、早速ニ二條御城に致持參、家康公に奉入御覽、以之外御喜悅ニ被爲思召侯、然れとも寸も長重ク侯間、御指ニ難被成由就上意、伏見に致持參、秀忠公へ奉入御覽侯處、御意應、御指ニ可被遊旨ニ候、白銀千枚拜領仕ル、今燒直〳〵ニ成テ御城ニ有之、

三十日、乙巳、家康、片山宗哲等ニ命シテ、僧雲叔所獻ノ書籍ヲ點檢セシム、

〔本光國師日記〕七十　六月晦日、二條之御殿よて、雲叔上り本(マヽ)點檢仕侯へと被仰出侯ゑ、宗哲、上田善次各數寄屋之御書院よて致校合、書立上申侯、目錄ともも上侯、案左ニ有、

書籍日記

一左傳 但一册不足書本也、 十九册
一詩經 朱氏註 三册全
一大學臆意中庸法 一册全
一綱鑑 但閉樣亂雜 四册全
一孟子集註 三册全
一曆法通書 四册
一三重勻 付序一册別在 一册全
一用馬法尉鐐子大宗問答合三册全
一古文眞寶後集 麁本 一册全
一百中經 但曆書也、 一册全
一押勻淵海 十册全
一山谷假名抄 四册全
一古註蒙求 三册全
一胡曾詩 一册全
一毛詩 但麁本 五册全
一中庸 一册全
一大學指南 一册全
一中庸或問 一册全
一中庸大全 一册全
一東坡 高麗大本 十五册全
一老子經 一册全
一廬山外集 一册全
一山谷 麁本 四册全
一紹運圖 一册全
一孝經 一册全
一藏叟摘藁 一册全
一聯珠詩格 五册全
一秦漢文書 四册全

一神皇正統記 五册全
一六物圖抄 二册全
一職原抄 二册全
一法花科註 八册全
一念誦懺法抄 一册全
一大惠書 一册全
一觀音陀羅尼經 幷諸咒 一册全
一中庸大全 幷或問 二册全
一孟子大全 但一册不足 六册

以上四十五部

一前漢書 但大不足 七册
一洪範內篇 但大不足 一册
一貞和集 但不足 二册
一論語大全 但取合本不足也、 六册
一東萊先生評篇 但大不足 四册
一式目抄 一册全
一三躰詩 但絕句麁本 三册
一千字文石摺 一册
一觀音懺法 二册全
一地藏本願經 一册全
一四教義 但一册八抄 二册全
一大學集註 一册全
一孟子 但一册不足 六册
一御製文集 但不足 一册
一禮記 但奥不足 八册
一宋元通鑑 但不足 七册
一四書上論 但不足 四册
一綱目通鑑 但大不足 五册

一朱氏大全 但大不足 三冊
一國朝儒先錄 但不足 二冊
一首楞嚴 同 三冊
一孟子聞書 同 一冊
一大學中庸 同 一冊
一古文眞寶前集 同 一冊
一少徵通鑑 同大不足 二冊
一山谷抄 同 三一
一禮部勻 同 二一
一年代記 同 四一
一性理大全 同大不足 一一
一仁川世稿 同 一一
一東坡 大小同 五冊
一晦菴語錄 同大 一一
一小學 同 一一

一柳文 但大不足 一冊
一周易大全 但不足 三冊
一孟子書 同 六冊
一大學衍義 同 一冊
一毛詩 同 二冊
一大學輯略 同 一冊
一對類 同 三一
一諸氏文獻 同 八一
一五星臺歷 但歷書也 九一
一職原抄聞書 同 一一
一宋鑑 同大 二一
一歷代通鑑 同 二一
一山谷 同 二一
一古今歷代 同 一一
一七政臺 同 一一

一天玄賦 同 一一
一空谷集 同 一一
一事林廣記 同 一一
一禮記 曲禮 一一
一二程全書 同大 一一
一羲之十七帖 同 一一
一莊子 同 一一
一國語 同 二一
一企業集 同 二一
一佔畢集 同大 一一
一禮記 檀弓同 一一
一杜詩抄 同 三一
一昌黎集 同大 二一
一文式拔書 一一
一碧山堂集 一一

一鼓吹續編 同 三一
一杜詩 同大 一一
一皇花集 同 二一
一文獻通考 同大 一一
一奉先雜儀 同 一一
一靖節文集 同大 一一
一清異錄 同 三一
一蒙求抄 同 一一
一通鑑帝王圖 一一
一將監 同 一一
一大藏一覽 同大 一一
一花神三妙 同 二冊
一資治通鑑 同大書本也 一一
一佛讚錄 但不足 一一
一論語抄 但不足 四一

一祕密諸經諸咒　一一
一三躰詩抄 但二三之卷　三一
一勸學文　一一
一施餓鬼註　二一
一千家詩 同　二一
一禮記大全　一一
一鏡湖集　一一
一風雅集　一一
一子昂石摺 字書　一一
一注千字文　一一
一法花經聞書　一一
一大唐名藍圖　一一
一詩集 共　卅三册

右雲叔上リ本

慶長廿卯六月晦日點撿之、

一智者略敎　一一
一古文眞寶聞書　一一
一金剛經注　一一
一碧岩抄 但不足　二一
一曉風集 同　一一
一倭漢禪刹次第　一一
一水老鶴 策彥假名抄　一一
一愚慮草　一一
一中興抄 但不足　二一
一作新記　一一
一古則艸紙　一一
一諸法語佛事 共　十六册
一不具雜本　五十七册

崇傳天海等二條城ニ候ス

右如此目錄本共ニ宗哲ニ相渡也、

〔駿府記〕六月晦日、大御所出御前殿、金地院、南光坊僧正、智積院、勸學院以下伺候、

○前左大臣二條昭實、略秘抄ヲ家康ニ進ムルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔孝亮宿禰日次記〕四 六月十四日己丑、晴、二條殿依仰、畧秘抄五十二册、外題、予書進之、是自二條殿被進將軍大御所云々、

上賀茂社制札

是月、板倉勝重、上賀茂社、貴船社、鞍馬寺及ビ大德寺等ニ制札ヲ出ス、

〔賀茂別雷神社文書〕四 ○山城

制札

當社山林竹木猥伐採夏、堅被停止訖、若違背輩於在之者、速可被處嚴科之旨被仰下者也、仍下知如件、

慶長二拾年
六月日

上賀茂境內

伊賀守㊞

貴布禰社制札

制札

貴布禰境內

當社山林竹木幷柴猥伐採事、堅被停止畢、若於違背之輩者、速可被處嚴科之旨被仰下者也、仍下知如件、

慶長廿年六月日

伊賀守㊞

貴布禰

〔貴船神社文書〕○山城

制札

當社領山林竹木幷柴猥伐採事、堅被停止訖、若違背之輩於在之者、速可被處嚴科旨被仰下者也、仍下知如件、

慶長廿年

六月　日

伊賀守㊞

鞍馬寺境內

〔鞍馬寺文書〕三

制札

當寺山林竹木幷柴猥伐採事、堅被停止畢、若於違背之輩者、速可被處嚴科之旨被仰下者也、仍下知如件、

慶長廿年六月日

伊賀守㊞

〔妙心寺文書〕○山城

制札

當寺境內山林竹木猥伐採事、堅被停止訖、若違背之族於在之者、速可被處嚴科旨被仰下者(ヘ)也、仍下知如件、

慶長廿年

六月　日

伊賀守判

紫野天瑞寺

〔大德寺文書〕

制札

當寺境內山林竹木猥伐採幷下草刈取事、堅被停止訖、若違背之輩於有之者、速可被處嚴科旨被仰下者也、仍下知如件、

慶長廿年

六月　日

伊賀守㊞

靜原村

〔本光國師日記〕七十

制札

當山林竹木幷柴猥伐採事、堅被停止畢、若違背之輩於在之者、速可被處嚴科之旨被仰下者也、仍下知如件、

慶長貳拾年六月日　　伊賀守判

島津家久、琉球ノ質佐銕王子朝昌ヲ歸國セシム、

〔薩藩舊記增補〕二　御文庫拾七番箱十八巻中　家久公御譜中ニ在リ

敬白　天罰起請文之事

一去年爲質人、被召寄貴邦上者、永可爲在麑嶋之處、案外ニ御暇被下、致歸國、加之琉球國之諸置目等三司官ら可致熟談由被仰付、幷過分之御知行被宛行、以何如斯之可奉謝御厚恩哉、永々代々奉對御當家、不可奉存疎意候事、

一奉對惟新樣、奥州樣、若逆心之輩有之者、縱緣者親類知音さりといふ共、不致同心、則可致言上候事、

一若球(ヤヽ)國之輩、忘御厚恩、企惡逆者有之ゟ、自然國主雖爲其旨同心、於拙身者、屬薩州御幕下、毛頭不可相隨逆出(ヤヽ)之無道事、

一此方之儀、何篇以讒訴致言上輩有之時者、被遂御糺明事奉賴候事、

一此起請文之草案寫置、讓與子々孫々、奉對薩州、不可致不忠之旨、可令相傳候事、

佐銕王子

朝昌判

血判

○佐銕、佐敷同名ニシテ、何レモ後ノ尚豐王ナリ、

朝昌ノ起請文

右之旨若於僞申上者、

牛王神文略

慶長二十年六月吉日

高崎大炊助殿

町田駿河守殿

○勝連按司等、初メテ鹿兒島ニ質トナリシコト、慶長十六年十二月十五日、尚寧ノ使駿府ニ抵リシ條ニ、佐敷王子ノ質タリシコト、十八年六月一日、家久琉球ノ法度ヲ定ムル條ニ、勝連按司等歸國シ、國上按司代テ質タリシコト、十九年是歲ニ、佐敷王子薩摩ニ使スルコト、元和三年三月ノ條ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔薩藩舊記增補〕二　義弘公御譜中　寫在梁瀨善右衞門

○上略

一琉球納方之儀、如承去年當年兩度之出物ものそろれ、加之さハりしき事

琉球ノ上納

唐船琉球傳ニ來ル

をも、遠方故不存、ゆるゝ〳〵と彼國之衆者被罷居候條、毎年之上納者、銀子三十二貫目之究ニ候へとも、當年者分ゐ賴之由被申理、一倍よ〳〵六拾四貫目可致上納由とよゝくもくうけあひにて、爲使如琉球歸國候間、定ゐ其分者異儀有間敷候、彼是亘細者鹿兒嶋をり可被申上候條、爲御心得候事、○中略

一琉球傳ニ參候唐船之儀、長谷川左兵衛佐殿より、彼唐人共心次第早々致商賣候樣ニと被仰候、其狀先日從中途被遣候、慥相届候、紀州、勝兵をヒ、其分ニ被申付候、併向後大事之儀候間、長谷川殿書狀、爲證跡不失樣ニ召置候へと、老中衆ニ申渡候、如書面御遣物ニ可罷成似合之物共在之者、被求置候て肝要之由、是又鹿兒へ（マヽ）申理候、乍去無然々舟よて、爲何珍敷唐物も無之樣ニ承候事、○下略、六月二十六日附、島津家久宛、同惟新書狀、全文ハ本月五日ノ條ニ收メタリ、

祇候ノ公家衆

家康梵舜ニ鴨長明ノコトヲ問フ

多聞院眞尊

閏六月 小 丙午朔 盡

一日、丙午、院御所ニ、天台宗論義アリ、

〔言緒卿記〕閏六月一日丙午、夕立、院參申、天台衆之論議アリ、致聽聞、次御物語アリ、

公家衆僧侶、二條城ニ抵リ、家康ニ謁ス、

〔言緒卿記〕閏六月一日丙午、夕立、前大樹へ被出衆廣橋大納言、花山院大納言、日野大納言、六條中納言、飛鳥井中納言、冷泉中納言、德大寺中納言、西洞院宰相、水無瀨宰相、兼賢朝臣、業光朝臣、予、永慶朝臣、雅胤朝臣、康滿、孝治、光賢、種忠等也、

〔梵舜日記〕十九 閏六月一日丙午、天晴、予二條御城へ罷出、能仕合ニテ御目見申入也、鴨長明之事御尋也、則歸洛、吉田へ令歸院、

〔高野春秋〕十四 閏六月朔學侶惣代多聞院眞尊於二條御城中拜賀、

〔附錄〕

〔言緒卿記〕閏六月二日丁未、夕立、前大樹へ罷出、冷泉中納言、予ト兩人也、三日戊申、夕立、○中略、言緒等伏見城ニ候スルコトニ係ル、次ニ前大樹へ參了、

四日己酉、夕立、前大樹へ被參、衆六條中納言、冷泉中納言、久脩朝臣、予等也、

三日、戊申、幕府、阿波德島城主蜂須賀至鎭ノ戰功ヲ賞シ、淡路ヲ加賜ス、

〔駿府記〕閏六月三日、松平阿波守淡路國拜領、

四日、大御所出御前殿、蜂須賀阿波守出御前、仰曰、去年以來、不惜身命、抽無貳之忠節條、尤神妙也云々、言上云、爲將軍家仰、淡路國加增拜領、厚恩餘身由云々、本多上野介奉之、淡路者松平宮內少輔○池田忠雄雖令知行、今度備前國被改補之故如此云々、宮內少輔者阿波守舅也、

閏六月廿日、本多上野介申云、蜂須賀蓬菴○家政御目見、獻刀脇指、松平右衞門佐正久傳之、則出御前、蓬菴早々上洛大儀之由被仰、蓬菴申云、阿波守頻以使者急令上洛、御禮可被申由頻雖申、風波高故、渡海少延引、又申云、淡路者有由緒爲國之處、阿波守拜領、厚恩餘身不知所謝云々、仰曰、今度粉骨不惜身命、抽無貳之忠、其上爲嫡孫聟條、與公達同事思召云々、蓬菴承此仰、頁久押感涙退出云々、

以上

〔金地院文書〕一 ○山城

至鎭淡路加賜ノ恩ヲ謝ス

蓬菴淡路加賜ノ恩ヲ謝ス

家康ノ慇懃

稻田示植ヲ由良城代トナス

從細川內記殿之御使者御傳狀忝拜見仕候、如仰罷下刻、以使札成とも御暇乞可申達之處、不能其儀所存之外候、誠今度私仕合、兩上樣別而忝御諚とも、殊重而御國被仰付之段、外聞實儀餘身忝奉存候、頓而爲御目見、可罷上候條、其節切々可得尊意候、寄思召貴簡見當至極ニ候、委曲期後音、早々及御報候、恐惶謹言、

壬六月十八日　　松平阿波守

金地院樣　拜復　　至鎭（花押）

〔寬政重修諸家譜〕三百六十一 蜂須賀至鎭 阿波守、○上略、元和元年ノ役ノコトニ係ル、御凱旋のゝち、台德院殿伏見城よ御座のとゝ、めさまて淡路國を加へ賜ひ、都て二十五万七千石を領す、このとゝ路國由良城乃城代とゝ、

〔蜂須賀家記〕一 峻德公 五 特以岩屋鄉屬于官、未幾盡賜之、七萬百八十石、於是幷阿波淡路、食二十五萬七千石、閏六月三日、公詣二條城謝恩、九日歸國、七月賞諸臣之功、稻田植次賜

五月二十一日、○元元和年 台德公在伏見、召公加賜淡路、

諸臣ノ功ヲ賞ス

祿千石、森村重加賜七百石、尋又加三百六十石、森氏純加賜三百石、自是二森世掌船艦、每東覲護送至大坂、岩田政長加賜三百石、任淡州政務、民澤可三加賜百石、賜伴與兵衞祿百石、與兵衞强悍多力、嘗殺人出亡、稻田至政匿之民間、及大坂之役起、公思與兵衞曰、與兵衞若在、吾用之、至政曰、君幸赦其罪、臣請搜索焉、公許之、至政乃携與兵衞進見、公賜佩刀衣服、命從軍、果有功、中村重勝之死、公召其子可近（若狹）襲父祿、至是益二千石、其餘賞賜有差、於是公宴群臣、先賜杯民澤可三、謂衆曰、戰陣致死、固士之常也、然主將殞命、則一軍功皆廢矣、今余幸免矢石、蒙將軍恩賜、皆由卿等之功、而最感作右之志也、衆咸悅服、是月公巡視淡路、置戍兵於由良岩屋、以稻田示植爲由良城代、

至鎭淡路ヲ巡視ス

至鎭岩屋ヲ公領トナス事ニ反對ス

〔森古傳記〕（淡路）○同○五月八日ニ、茶臼山岡山ヘ、至鎭公御出在テ、天下一統御利運ノ御祝被仰上、直ニ城州伏見ノ城ニ御供被成所ニ、大樹秀忠公伏見ノ城ニ入玉ヒテ、至鎭公ヲ召テ、大坂ノ役ニ於テ、軍功他ニ勝レタルニ依、淡路國ヲ加封仕給フノ由ノ命在リ、至鎭公御禮被仰上ケルニ、本多上野介正純ノ曰、淡州ハ御拜領成ヘキカ、其內岩屋領ハ、西國ノ咽首ナレハ、公儀ヨリ番手持ニ可被成也ト、至鎭公、其岩屋領ヲ御番手持ハ、イカ樣ノ時ノ御用ニ被仰付哉、正純答テ、西國大名ノ野心ノ時、御手當ノタメ也ト、至鎭公仰ケルハ、然ハ貴容ヲ以（マヽ下同ジ）、淡路國返上仕ヘシ、御案內ノ如ク、年來忠節ヲ盡シ、既ニ上意ニモ、志シ不淺トノ御妛也、我ナンソ岩屋領ヲ賜リテ守之ヲ事、番手ノ諸將ニヲトルヘキヤ、西國ノ大名野心セハ、岩屋ノ儀堅ク相守ルヘシ、斯ノ如ク貴容ノ宣事ハ、定テ大御所樣ノ愚士ニ御疑ヒ有リテ、御內意ト存ル也、無二ノ忠節ヲ仕ルニ、御疑有事心外ナリト仰ラレ、御陣所ニ返リ玉ヒ、翌日本多佐渡守正信參ラレテ、樣々往事語ノ上ニ、正信言ケルハ、先以テ去年ヨリ御軍功ニヨリ、淡路國ヲ一圓ニ御拜領目出度ノ旨挨拶也、至鎭公宣フハ、仰ノ通ニ存知、御禮ヲモ申上ケレモ、承レハ岩屋領ハ公儀ノ御番手持ニ被仰付故、存志有之、淡路國ハ返上ノ心得ニテ、紙面下書ヲモ調ヘ置キタリトテ見セ玉ヘハ、正信見テ申サルヽハ、御餘儀無思召寄也、然ル淡路ノ國ハ、一圓ノ御拜領ト承ル、近日御判出ヘシ、其時岩屋領番手持ニ仰付ラルヽニ於テハ、此祖父ハ早束（マヽ）腹切リ、貴公ヘ申譯仕ヘシト也、因茲至鎭公淡路國御返上御紙面ヲ扣ヘ玉フ、追付淡路國一圓ト在之御判物出ル、依テ至鎭公御請在テ、阿州ニ下リ玉フ、

○蜂須賀至鎭ノ去冬ノ戰功ニヨリ、松平氏ヲ賜ハリシコト、正月十一日ニ、池田忠雄ノ、淡路ヨリ備前ニ轉封セラレシコト、六月二十八日ニ、各、其條アリ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔淡路要錄〕○淡路　元和元年乙卯攝戰ノ功賞ニ依テ、當國一圓ニ御當家賜、慶長廿年六月三日、此年御拜領、阿波侍從至鎭公、蓬菴君御子、元和元年六月廿三日御入國、依上意稻田植元、淡州城代、此時也、附箋或士曰、松平宮內少輔忠雄卿、由良成山城ニ、家老乾平右衞門城代ニテ在之候、至鎭君當國請取ノ爲、細山主水後加島主正ニ改、岩田七左衞門、笹山加兵衞後位田ヲ指添、由良ニ至ラシム、而シテ平右衞門ニ立合請取渡有、元和元壬六月十九日也、

由良御城番始ハ、牛田掃部、其次森甚太夫、笹山加兵衞、岩田七左衞門、甚太夫ハ浦方幷加子裁判ヲモ相兼勤ケルト也、

後稻田修理殿在番迄城代也、國中ノ御仕置ハ、岩田七左衞門、笹山加兵衞、此時御國奉行ト稱ス、

淡路ノ受渡

〔堅盤草〕五下

洲府昔談ニ曰、或士曰、至鎭公慶長廿年（編○渡曰、此年七月十三日改元、元和元也、）閏六月二日、於伏見御城、從將軍家、拜領淡路國之時、爲淡路城代、可指置稻田修理旨有上意、依之稻田家代々御城代也、又此時淡路者松平宮內少輔忠雄公ノ領地也、至鎭公國爲受取、細山主水副岩田七左衞門、笹山加兵衞今ノ位田半平ノ邸ナリ、遣于由良、立合于乾平右衞門、池田家城番、令受取鳴山城、卽以岩田笹山、爲城番、但城番而已執政可（ベ）渭津、其後忠英公御代稻田修理、長谷川越前被遣于須本、令經營須本城、時寬永年中也、至經營既成就、從公儀、依一國一城法令毀之、（編○曾聞、一國一城法令島亂後也、）尤因西國第一要害、崩城樓、殘石壁、又其後爲在番于修理、尤依在於阿州猪尻邸、九郎兵衞始一族皆居住猪尻、一旦修理依兩住不如意之願、或引退猪尻、後終一族悉移洲城云、自由良諸士移須本、從寬永九年至同十一年、不殘引移云、其頃國中執政岩田笹山、而稻田家者城代耳也、

洲本ノ經營

淡州御拜領御朱印御日付

元和元年閏六月三日、同月十九日御國へ渡ル、

成山城

至鎭ノ淡路入國ノ狀況

一元和元年七月　至鎭樣御入國

國中人定元和元年閏六月三日

一御國奉行岩田七左衞門、笹山嘉兵衞御藏入御代官中備與頭衆、〇下略

〔淡路草〕二上由良　成山城跡　同し浦の東北海濱りあり、池田氏始て築く處、前に記する如し、〇中略同〇元和元年五月、大坂落城り付、閏六月、台命を下し、前年冬陣の勳功を以て、當國を我公り加賜し給ふ、仍て當城を官處とし、岩田笹山以下の士を差越し、政務を執しめ給ふ、寛永中、今の洲本城經營の時、當城を壞ちてかゝこり運ひ遣りしと云、今り洲本官倉及ひ處々土屋敷に蝶の紋池田氏定紋の瓦あり、

〔安宅考〕中興淡州守護年次

元和元乙卯、攝戰ノ功賞ニ依テ、蓬庵君ノ御息義傳君、阿波侍從至鎭公也、淡路一圓ニ、此年閏六月、於伏見御城中御拜領、同七月、淡路ニ御初入、此時當國岩屋浦里民奉賀之、踊ヲ催シテ備上覽、君御滿悅有リテ賜御酒、其後吉例ニヨツテ、御代々御巡國ノ節、必踊ヲ備上覽、御酒賜如舊例、且每歲盆中ニハ、里民踊ヲ岩屋御在番ノ御番手御奉行御覽ニ入、是ヲ御座布踊ト稱シテ、恆例トスト聞ユ、元和元年、依

淡路總檢地

一國一城法令

淡路支配上ノ諸規定

上意、稻田植元淡州城代此時由良也、

寛永四年、淡路惣檢地、寛永年中、忠英公御代稻田修理、長谷川越前須本に遣はされ、洲本之城經營せしめ玉ふ、寛永八年はじめる、

同九年、由良府始須本ニ引、

同十二年、洲本城を〳〵く成就をといふ、公義ヨリ一國一城法令下ル、其後稻田修理在番也、其後一家中須本ニ移居ス、

〔阿波國社寺文書〕乾　淡路國御仕置之節被下、

覺

一城米壹万石可殘置事、

一ぬあ千石、りら三千束、國中へ可申付事、

一浦々へ他國ゟ罷越獵仕奉行高木善次郎、

一國中竹奉行廣田加左衞門、忠津庄右衞門、

一國中人足之觸平瀨孫兵衞、福田新右衞門可申付事、

一上方へ米積上舟賃、所之百姓可存事、

一上方まて米之仕切鷺森甚九郎、岩田彌次右衞門、喜多野加右衞門、阿波屋太助、右四人之手形を以算用可仕事、

元和元年閏六月三日

一舛之出目當國之米阿波舛ニて計拂候ハヽ、石ニ付六升宛ニ算用可仕事、
一山手之小物成、其在所よて改可上事、
一夫米加子米兩年三分一之通可相免事、
一國中八之うりのひ、本米を以取もとし可申事、
一井上之請等之義、所々相應ニ候ハヽ、地下中とゝて可申付候、大分之儀候ハヽ、奉公人可相加事、
一由良あき家篠山加兵衞見及可申付事、
一南郡肝煎岩田七左衞門、篠山加兵衞可申付候付、諸公事右兩人承屆可相濟候、万一落着不仕義候ハヽ、牛田宗樹へ可令相談事、
一於當國米相拂渡候ハヽ、浦手かゝるさる代官人手前ニゐ可申付事、

元和元年十月廿七日

篠山加兵衞とのへ

（朱書）「淡路國津名郡釜口村」

妙勝寺以先領之內寄進之事

田地壹町幷屋敷八畝拾三步同竹木諸役令免許者也、

元和元年九月日　　至鎭御判

〔伊勢古文書集〕二上伊勢

今度於淡州苅屋釜口之間、高百石可令知行者也、

元和元乙卯年十一月廿日　　松阿波守

橋村吉大夫殿　　至鎭書判

〔安倍氏穉記〕

由良御城番ノ始ハ、牛田掃部也、其次森甚太夫、笹山加兵衞、岩田七左衞門也、其後稻田修理殿在番ニ付、岩田、笹山ノ兩人ハ、組ノ足輕ヒ德島へ御引セ也、今南淡路丁、北淡路丁ト云ハ、卽此二組ノ足輕居ル故、呼習シタル也、甚太夫ハ、浦方幷加子裁判ヲモ相兼勤ケルト也、九郎兵衞殿（秀關）ハ、元脇ノ町ニ在城ノ所、一國一城ニ相成タル砌ヨリ、須本へ引、御父子一所ニ居住也、

淡州御國付先規御奉公人筋目之覺

元和元年閏六月三日

國付奉公人ハ諸役

私共先祖之儀、先規ゟ御奉公人筋ニゐ御座候、先年脇坂中務樣、當御國上郡御拜知被爲遊、其節被召出御奉公仕、御頭中島小平次殿へ御預ケ被爲成、御支配地方ニゐ被下候、下郡ハ加藤左馬助樣御拜知被爲成御奉公仕、御頭佃次郎兵衞殿へ御預ケ被爲成候、其刻兩郡御奉公人共、高麗兩度之御陣、關ケ原幷江戸御本丸駿府御城、尾州名古屋之御城、丹波笹山之御城、何ま茂御公儀之御普請相勤申候者、私共祖父曾祖父ニゐ御座候、其後淡州御藏入被爲遊、爲御代官、藤堂和泉守樣御入國被爲成、御奉公人共御支配、御藏米ニゐ被下、其上在々ニ搆居申家主諸役御免許ゟ被爲仰付候、其後池田三左衞門樣播州ゟ當御國御拜知被爲成候、右御奉公人被召出候節も、引付を以諸役赦免被爲成候、三ヶ年以後ニ、池田宮內樣に當御國御渡し被爲成、御頭鎌田五郎兵衞殿、石子又右衞門殿、片山五兵衞殿、武山太郎左衞門殿に御預ケ被爲成候、大坂兩度之御陣之御供仕申候、其刻義(至)鎭樣大坂御陣御高名之爲御加增、當御國御拜知被爲遊候、宮內樣に御奉公仕、御國中ニ居申御奉公人共、不殘御扶持ニ被召出候、其節右之趣岩田七左衞門樣、笹山加兵衞樣へ申上候得ハ、御達御耳ニ、先年之通諸役御赦免被爲遊候、御國付三百四拾余人之內

ヲ免除セラル

至鎭崇傳ニ銀十枚ヲ贈ル

至鎭阿波一圓ヲ領スルニ至リシ事情

をり、前之修理樣へ四拾壹人相渡り申候、延寶元年、御公儀樣御□□御改ニも末子下人ニ至迄、諸役御免許被爲仰付候、以上、○下略、稻田示植ニ付キタル國付奉公人四十一人ノ名ヲ擧ゲタリ、

〔附錄〕

〔本光國師日記〕十七

一請取申銀子之事

合拾枚但四百三十め也、

右從松平阿波守樣、金地院へ御音信之銀子也、幷御帷子五つ之內單物貳慥請取申候、以上、

卯六月廿日

金地院內　松首座

木村久右衞門

松平阿波守樣御內

山田源太左衞門殿

〔阿府志〕二十　王代幷阿波國司大領小領等之部

峻德院公　慶長丁卯(癸カ)○八年三月、家康公任大將軍、列國諸侯至駿府賀之、至鎭

長崎ト堺海路往來ノ要所

公亦(往ヵ)焉敬臺夫人亦以女使賀之、時乞化裝之田、家康公將與置塩領、公曰、置塩領則從弟細山主水、當初爲赤松家之養子、今旣嗣其後、乞以毛利兵吉領、授以爲化裝之田、家康公乃使本多佐渡守正信宣命曰、其如至鎭所願矣、於是阿州十八万六千七百五十石之地悉爲公之有焉、或曰、家政公告夫人曰、新婦以殿下之養女故、屢有懇命、然未有裝飾之田、今幸有兵橘領、須乞殿下以當之、夫人乞之、

今按、或曰、毛利兵橘領板東郡河崎村三俣(ツ)村凡一千八十二万(ヤ)石三斗餘之地也、兵橘本在九州之內、領十二三万石、(或云、曾攻日向之時、有功、因以領之、未審實否、)至于慶長五年江州關原之戰、黨石田三成、故家康公没其舊領之地、是以來阿州領千石餘地、然是將軍賜之也歟、其來有何年月耶、皆未審也、而天正十三年、家政公領阿州旹、以有置塩領兵橘領、故未稱阿州一圓、○下略

家康、長谷川藤廣ニ備前小豆島(セウヅシマ)ノ代官ヲ命ズ、

〔駿府記〕閏六月三日、小豆島者長崎與堺津海路舟之往來得便所也、長谷川左兵衞可致代官由被仰出、

〔參考〕

小豆島撿地

大庄屋ニ扶持ヲ賜ハリ帶刀ヲ許サル

藤廣支配當時ノ小豆島ノ草高

〔御用船加子舊記〕○岐讃　大坂御凱陣之後、伏見之御城ニテ、大御所樣御上意ニ付、御大老土井大炊頭樣被仰渡候者、今度小豆島御撿地帳差上可申由被仰付、則當島大庄屋共被召寄、御上意之旨、早々御帳面を差上申候得共、畑方斗代分麥ニ申付候間、御用之節ハ、島方水主共召連罷出可申候、因茲大庄屋共へ四人扶持頂戴ニ付、帶刀御赦免被爲仰付、難有仕合奉存候、御上意相守居申候御事、

京都二條御城ニテ、大御所樣御上意之旨、土井大炊頭樣ゟ被爲仰渡候者、小豆島義、塩飽島同前ニ常扶持被爲仰付候旨難有奉存候、其節申上候ハ、何時ニテモ御用之節ハ、御扶持頂戴仕、先々之通リ、御奉公相勤申候、乍併常扶持帶刀之義ハ、達而御斷申上候、然ルニ上ハ御用之節計四人扶持帶刀遣し可申旨、難有御請申候御事、

元和二年辰ゟ巳迄二ケ年ノ間、大坂船奉行長谷川佐(左)兵衞樣當島御支配被遊候、當時島方高三千三拾六石九斗八升、家數合三千六百三拾八軒、人數合壹万八千七百九十六人御坐候御事、

〔小豆島風土記〕○岐讃　御支配御役人

慶長十巳年ヨリ元和元迄
元和二ヨリ同三迄

是ヨリ先、酒井家次謫ヲ蒙ル、是日、家康之ヲ宥ス、

〔伊達政宗記錄事蹟考記〕二十三　本多上野介殿ヘ被遣候御書寫

返々、忝存候、又今日侍從御禮之儀、何よふ共可然樣御引廻奉賴候、ゝ
しく、

酒左殿之事、御前相濟申之由申來候段々目出度存候、內々御取成故と、於
我等別ゐ忝存候、出角之樣ニ御坐候へ共、御家久敷人ニ候間、笑止ニ存候、
其上被賴申候ふ付可申入候儀滿足仕候〳〵、恐惶謹言、○傍註ハ伊達貞山治家記錄ニ據ル、

壬六月三日

政宗御書判

本上州樣
人々御中

松陸奥守
政宗

右者大町二丁目渡邊道可所持、御記錄ニ摘載也、

壬六月三日秀忠公二條ニ御登城之事、前ニ有之本上州ニ之御書を以相考、

御記錄ニ記之、

〔伊達貞山治家記錄〕二十五下　閏六月癸未大三日戊申、本多上野介殿ヘ御書進セラル、曰ク、○中略、上ノ伊達政宗記錄事蹟考記所載ニ同ジ、

左衞門尉殿、此節御呵ヲ蒙ラレ、公ヨリ內々御佗言ヲ仰上ラレ、御免許ア
リシト見ヘタリ、

〔義演准后日記〕十九　閏六月四日、酒井左衞門尉今度武邊ニ付出入在之、但
申開無別儀安堵云々、

○酒井家次ノ譴ヲ蒙リシコト、他ニ所見ナク、ソノ事情詳ナラズ、今伊
達政宗記錄事蹟考記ニヨリ、本日ニ係ク、

伊豫板島宇和島城主伊達秀宗、二條城ニ抵リ、家康ニ謁ス、

〔伊達政宗記錄事蹟考記〕二十三　本多上野介殿ヘ被遣候御書寫

返々忝存候、又今日侍從御禮之儀、何よふ共可然樣御引廻奉賴候、ゝ〳〵く、

〔伊達貞山治家記錄〕二十五下　今日、○閏六月三日附、本多正純宛、政宗書狀ノ追書、全文ハ前條ニ收メタリ、○閏六月三日宇和島侍從殿二條ヘ御登城、大神君ヘ御禮仰上ラル、

伏見ヘ御登城ノ事ハ不知、舊冬宇和島御拜領、今春入部セラル、大坂ノ役ニモ、上意ニ因テ出陣シ玉ハス、故ニ今度大坂落居ニ就テ御悦ノタメ、且ツハ入部ノ御禮等トシテ、參勤セラルト見ヘタリ、

○秀宗ノ板島ヲ領スルコト、慶長十九年十二月二十九日ニ其條アリ、參看スベシ、

飛驒高山城主金森可重伏見ニ卒ス、第三子重頼嗣グ、尋デ、重頼、父ノ遺物ヲ家康、秀忠ニ獻ズ、

〔駿府記〕閏六月三日、酉刻飛驒國主金森出雲守正重死去云々、

九月廿三日、及晩金森長門守重頼、父出雲守正重爲繼目御禮御目見、出雲守遺物國次刀正宗脇指羽茶壺獻之、長門守獻銀子二百枚、弟兩人銀子十枚宛獻之、云々

〔寛政重修諸家譜〕三百六十二　金森長近兵部卿法印、

長則忠二郎、

可重（よしたけ）喜藏、出雲守、從五位下、

某五郎八、

可重ノ履歷

女子　母は慶隆ゟ女、

重近飛驒守、從五位下、號宗和、

重次甲斐守、從五位下、　重直市兵衛、

重頼左兵衛、長門守、出雲守、從五位下、

女子　母は某氏、飛驒國照蓮寺の則生院某ゟ妻、

可次内匠、

重勝小四郎、左京、　金森左京近興ゟ祖、

重義權大夫、左兵衛、　金森左兵衛可始ゟ祖、

女子　母は某氏、小出大隅守三尹ゟ室、

重澄右衛門八、山城守、　酒井但馬守忠宣ゟ祖、

可重　實は伊藤氏の男、母は某氏、今の呈譜、可重、實ハ長屋將監景重ゟ長男なりといふ、永祿元年、美濃國ゟ生ゑ、八歳のせたより、長近の左右りあゑて生長し、其養子となりて、織田右府をよひ豐臣太閤につゑへ、長近とおれ〳〵く數度の合戰に赴き、天正十三年、從五位下出雲守ゟ敍任す、乃ち朝鮮征伐のときも、肥前國名護屋に在陣し、丸壺の茶入まさ名物延壽の刀

遺領ヲ繼ギテ飛驒ヲ領ス

元和元年閏六月三日

をあさへらる、慶長五年、東照宮、上杉景勝御追討せしゝ御出馬あるによ
て、其事台德院殿に言上をしゝかハ、五月二十六日、御返翰を賜ひ、懇の仰を
かうふる、こまよて台駕に從ひ出てまゐり、下野國小山に赴き、まさ上方
の逆徒蜂起せしにより、稻葉右京亮貞通ゝ居城美濃國八幡の城を攻へ
きむ手仰を蒙て、領地飛驒にあへり、西尾豐後守光敎、遠藤對馬守慶隆と
しめしあハせ、九月朔日、郡上に發向して、瀧山に陣し、急に進まこまをせ
め、大に敵兵を討せり、城主貞通つゐに降參せ、落城ゝとた、家臣等戰死せ
るその五十餘人ゝをよふ、十四日、降將貞通を伴ひ、赤坂の御陣營にいさ
り、十五日、關原乃合戰ゝハ、父長近とおれしく兵をせゝめ、ミつから奮戰
して首級を得たり、逆徒こせ〳〵を誅に伏せのゝち、京都にをいて、其軍
功を賞せらる、十二年、遺領を繼、飛驒國を領し、弟五郎八某に、美濃河內の
領地二万三千石餘をゐゝちあさふ、のち封地ゝゆくの暇申のとき、東照
宮より鷹をよひ馬をさゐひ、台德院殿より國次の御刀、幷に鷹馬等を拜
賜せ、十六年、常陸國下妻にをいて鷹場をゆるけま、鴈捉の鷹を賜ふ、これ
年、弟五郎八某卒して所領を收めらるゝといへとも、其領地賜ハらける

大坂兩度ノ陣ノ戰功

紫野金龍院ニ葬ル

重近勘氣ヲ受ク

以前、關原ゝ役にも、そてに六万石の軍役を出せしにより、これよりのち
そ、なを先規にしさゝひ、諸務ゝとむへき旨仰出さる、十二月二十一日、
台德院殿、可重ゝ櫻田の邸に渡御あま、このせた國光の御脇指馬をよひ
時服白銀等をさゐふ、十九年、大坂御陣のとき、兵を率て領地よて出陣し、
天王寺口ゝむあふ、十二月、玉造口にして、眞田左衞門幸村と戰ひ、首數級
を得さり、可重もみつから騎兵二人ゝ討せる、元和元年、大坂城中にをい
て、ぬさゝひ兵を催せにより、天滿の攻口をうまさはそりて軍を出すゝ
せころ、まさ途中にして仰をかうすり、小出對馬守吉親、伊藤掃部助治明
せゝそに、小出大和守吉英ゝ居城和泉國岸和田の加勢とれり、五月七日、
落城乃せき、其つけを聞て、岸和田城を發し、御旗本ゝ赴くの道ゝしま、敗
北の兵八人を生捕、其餘首百五十二級（寬永系圖をよひ今の呈譜二百八級に作る、今元和首帳にしさゝふ、）
を得て、御本陣ゝ獻せ、閏六月三日、伏見ゝをいて卒せ、年五十八、雲峯閑公
德應院と號す、葬地長近ゝおれし、（○京都紫野金龍院）室せ遠藤但馬守慶隆ゝ女、離
婚に、繼室ハ名護屋因幡守高久ゝ女、
重近　母せ上ゝれし、（○慶隆ノ女、）慶長十九年冬、父ゝ勘氣をうけ、京師に屏居

元和元年閏六月三日

重頼父ノ遺領ヲ繼グ

も、明暦二年十二月十二日、彼地りをいゝ死も、年七十三、

重次　母ゟ上りおゐし、慶長十二年、はゝめゝ台徳院殿ゟ拜謁も、時り十五歳、これよりめけもて御小性ゟれり、常陸國のうちにゝて采地をさゐひ、大坂兩度の役り從ひもてまける、元和九年、大猷院殿御上洛のとき供奉し、寛永二年九月八日今の呈譜三月八日、死も、年三十三、法名詠見、妻も内藤紀伊守信正ゟ女、

重頼　母ゟ高久ゟ女、文祿三年、飛驒國り生ゐ、慶長十三年より、駿府ゟをいゝ、東照宮につゐへもてゐけり、御小性となれ、時り十五歳、十八年、從五位下長門守に敍任し、十九年、大坂御陣のとき、父ととゑりしさゝひもてゐつり、御歸陣のとき、尾張國名護屋の御旅館りをいて、美濃國關吉田れうちゟをいゝ、采地三千石をもゐふ、元和元年大坂の役りゑ、まさ供奉し、七月、東照宮の仰ゟよりゐ、遺領を繼、けきの采地ゟ收めらも、弟内匠可次、左京重勝り、所領のうち各三千石をりゝちあさふ、これとれ長光の太刀ゟ獻し、まさ父ゟ遺物國次ゟ刀、正宗の脇指をよひ志賀ゟ茶壺をさゐゐけり、台徳院殿り志津の刀、吉光の脇指、肩衝雲山の茶入を獻も、これゝち台徳院殿より、雲山ゟ茶入をかへしもぬもり、天下れ名物ゐもは、家りもゝめゐ祕藏もへきよし仰をかうふる、

可次兄ノ所領ノ中三千石ヲ分チ與ヘラル

可次　母ゟ重頼りれゐし、慶長十九年、はしめゝ東照宮、台徳院殿り拜謁す、時り十三歳、のち大坂兩度の役ゟ從ひさてゐつり、元和元年、兄重頼ゟ所領のうち三千石をりゝちあさへらゐ、寛永二年、采地を加增あり、三年三月九日死す、年二十五、今の呈譜年二十七、法名宗心、麻布の祥雲寺り葬る、のち此寺を澁谷ようつれのとき改葬れ、嗣ゐくして家さゆ、

重勝兄ノ所領ノ中三千石ヲ分チ與ヘラル

〔寛政重修諸家譜〕三百六十三

金森重勝小四郎、左京、　金森出雲守可重ゟ五男、母ハ某氏、慶長十九年、はゝめて東照宮りゐみもたてまける、時り十五歳、のち大坂兩度の役り、父可重も共り供奉し、元和元年七月、兄金森出雲守重頼ゟ所領ゟうち、三千石をりゝちたゐふ、

重義兄ノ所領ノ中二千石ヲ分チ與ヘラル

金森重義權大夫、左兵衛、致仕號雲雪、　金森出雲守可重ゟ六男、母ハ名護屋因幡守高久ゟ女、元和八年、はゝめゐ台徳院殿りゐみもたゝまけり、この年、兄重頼ゟ領地のうち、二千石をりゝちあさへらも、寄合ゟ列も、のち西城の御書院番と

ㇾり、廩米五百俵をゐるふ、

酒井重澄（右衛門八、山城守、從五位下、）　金森出雲守可重ゟ七男、母ハ名護屋因幡守高久ゟ女、慶長十二年、飛驒國ゟ生ゐ、元和八年、はゝめく台徳院殿ゟまみゑたてゐ（時ゟ）る、（六歳、）十ゐち大猷院殿ゟ近侍し、御小性をつとむ、（其のゝち台命ふより、）酒井讃岐守忠勝の家號を冒し、のち從五位下山城守ゟ敍任せ、

○可重、父長近ノ封ヲ嗣ギシコト、慶長十五年二月是月ニ、藥草ヲ家康ニ獻ゼシコト、同十六年八月十二日ニ、弟長光夭死シ、其封ヲ收メラレシコト、同年十月六日ニ、秀忠、可重ノ第ニ莅ミシコト、同年十二月二十一日ニ、秀忠、可重ヲ饗セシコト、同十九年二月二日ニ、各、其條アリ、マタ大坂冬役ニ參加セシコト、慶長十九年十一月二十八日、同十二月四日ノ條ニ、夏役ニ參加セシコト、元和元年四月二十九日ノ條ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔飛驒國治亂記〕　出雲守可重公、大坂御歸陣之後、京都祇園ふて御逝去被成

候、是を閑公と申奉る、依之可重公之三男駿府ふ御座被成候重賴公へ御家督被仰付、是則長門守重賴公と申也、法印閑公御父子之御力量御軍功揚てかそへゝらさし、（上略）○

〔飛州千光寺記〕　天下錯亂覃大坂一戰秀賴公滅亡、諸軍凱陣後、於平安城源可重病死、于時慶長二十年閏六月三日、春秋五十八、保國七年、雖所向靡、無遮留無常使、爲前法印菩提所、於紫野、建一院、金龍院是也、可重葬同寺、時長老松岳紹長引導之、此時家臣山藏縫殿介、森右衞門九郎二人、爲冥途供、切追腹、異于他高名也、（上略）○

〔見義集〕　一　追腹の事　金森出雲守內山通攴右衞門、川瀨右衞門九郎の事

金森出雲守內ふて追腹切しゝ、山通攴右衞門尉、高年六十計の者ゐりしゟ、年來の厚恩忍ひかさしといひゑけして切腹ゝ、川瀨右衞門九郎ハ、取立の小姓ふて、其恩を感し追腹をるゟ、風俗ふ仍て追腹切るゟ、志の程をゑらざる故ふ、つふさふこれをゐるさゞ、

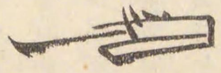
〔花押彙纂〕（カ之）部　金森可重

宗和ト長近ト混同ノ例

〔塩尻〕三　金森五郎八郎源長近入道、號法印男子ゐりし故、家人少年にして出頭せし者、長屋喜藏を養子とし、金森出雲守と稱せし、名ハ可重、

幕下ニ仕へし酒井山城守、及茶人宗和、皆喜藏の子也、

法印後ニ男子生せしゝ、早世せしとゐん、法印の兄あり、其末今我府下〇尾張名古屋藩ニ奉仕せ、金森ハ近江源氏にて久しき家也々る、



〇熊谷正太郎所藏花押帖（宮城）仲夏八日

〔茶道傳統〕乾　千道安

金森出雲守可重　從五位下、或宗易門ト云有、

金森宗和　從五位下、飛驒守、五郎八郎、長近、剃髮シテ、稱宗和法印（設カ）沒碑子（于カ）於紫野金龍院、題金英宗和居士、或飛驒守重近トアリ、明暦二年（脫アルカ）、〇本書宗和ト長近ト混同セリ、古今茶人系譜マタ同ジ、

宗和ト可重ト混同ノ例

可重小鴉ノ太刀ヲ得テ之ヲ國分寺ニ納ム

〔古今茶人系譜〕下　古田織部正重勝

金森出雲守可重　初名喜藏、實ハ長屋景長ガ男ナリ、元和元年閏六月二日歿ス、歳五十八、德應院雲峯閑公、

金森飛驒守長近　初名五郎八郎、信長公ヨリ一字ヲ賜リ長近ト云、後剃髮シテ宗和法印ト稱ス、慶長十三年八月十二日歿ス、歳八十五、

〔茶道聞書〕千道安

金森宗和　可重、從五位下、

出雲守ニ敍任ス、長近の男、茶道ニ熟し一流開く、明暦二丙申十二月十六日卒、申堅院宗和居士、〇本書宗和ト可重トヲ混同セリ、

〔飛州志〕六　大野郡　醫王山國分密寺　小鴉太刀記　天正十五年、忠尋〇常陸介平輝盛ノ一族川上小七郎忠尋以小鴉、飛陽太守捧金森出雲守源可重矣、後慶長七年、可重欲獻東照大權現、而問本多佐渡守正信、々々曰、是爲平氏重器、非源家之所用、客又源氏也、莫用之、可重於是令國分寺住侶大僧都玄海及其弟子尊雄大阿闍梨納藥師如來之寶殿云々、〇上下略

〔斐太後風土記〕一下　大野郡　灘鄕　高山一之町村　光曜山照蓮敎寺淨土眞宗東本願寺掛所　第二世卽生院宣了ニ領守金森出雲守可重朝臣ノ女岩子ヲ賜ヒ室トス、〇上下略

重勝ノ城址

〔斐太後風土記〕十五　吉城郡　高原郷　釜崎村　金森左京重勝故墟從高山八里釜崎村ニ在、

飛驒國領主金森二代出雲守可重ハ、江馬十六代輝盛滅亡後、其女ヲ收ヘテ妾トメ、男子出生セリ、幼名ヲ金森小四郎ト號、後ニ金森左京重勝ト名乘セ、外戚江馬家ノ縁ニ因テ、元和中、年月不詳、高原郷三千石ノ領主トセリ、此釜崎村ニ居館治所ヲ建、數代ヲ經テ、本家金森出雲守頼旹、出羽ヘ移封ノ時、元祿五壬申年、金森左京某モ、越前國丹羽郡白崎ヘ移サレテ、其墟荒野ト成ヌ、今俗曰御小屋、

漳州ノ商船砂糖ヲ積來ル商賣ヲ許サル

明船チヤンヲ以テ塗固ム

明商船、紀伊ニ來泊ス、

〔駿府記〕閏六月三日、漳州舟寄來紀伊國浦、淺野但馬守遣人見之處、載來沙糖、可被下撿使歟之由、以後藤少三郎言上之處、恣可致商買之由被仰出云々、

〔淺野考譜〕三　同年〇慶長二十年六月(閏六月)三日、漳州の船惣躰チヤンヲ以て塗あさむ、砂糖を多く載て、紀州の浦津ニ來る、長晟此旨達上聞、恣ニ可令商賣旨、後藤庄三郎を以被仰出候也、

〇明商ニ長崎貿易ヲ許シヽコト、慶長十六年十一月二十八日ニ其條アリ、又漳州船長崎著岸ノコト、同十八年六月二十六日條所引駿府記ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

〔附錄〕

唐船土佐ノ清水浦ニ來ル

〔南路志〕三十一　幡多郡　閩國十之四　清水村

貞享三年六月、德昌院樣〇山内忠豐より宿毛齋原治右衞門を以、伊南筋古老物語御聞合被仰付覺書之内ニ、

池田治右衞門覺之事

清水浦に唐船參破損仕ハ、元和元乙卯五月七日、今寅年迄七拾貳年、但是ハ加久見村六左衞門と申者之親六兵衞、加久見牢人仕參、翌年右六左衞門生候由、六左衞門今年六十九歲罷成候、加久見ヘ參、三年前、右唐船參候由申傳候と六左衞門申候由、〇上下略

忠興上洛ノ警固

四日、己酉、細川忠興、二條城ニ抵リ、家康ニ謁ス、尋デ、歸國ス、

〔駿府記〕閏六月四日、羽柴長岡也越中守忠興出御前、則被下御暇歸國云々、

〔梵舜日記〕十九　六月廿八日癸卯、天晴、〇中略折節越中忠興上洛ニテ、吉田ヘ北地下中ニ挑燈二百計也、警固被申付歷々義也、予夜半過迄、萬見合申付也、

閏六月六日辛亥、天晴、羽柴越中忠興依御暇帰國也、予至吉田罷出、暇乞申入了、

〔細川家記〕十四 忠興八　六月中、忠興君より御國へ被下候御書七通、（他ハ略ス、）

以上

急度申候、

一我ら事御暇出候間、さや（ママ）迎舟下候得共、我々つれて可上候間、下候早舟とも、不殘我らニ相次第可申候事、

一吉田を二三日中ニ可出候間、可得其意候事、

一從公方様面むきの御暇ハ被下候由ニ候、定る今明日中ニ可被仰出と存候御暇被下候との儀ハ、大御所様、我等へ被成御知を候、忝儀と申事ニ候、仕合無殘所候間、可心安候、萬々下國之時可申候、恐々謹言、

六月廿九日　　御判

氏家宗入老殿

小笠原民部少殿

朽木六兵衛殿

中路周防殿

小谷又左衛門殿

長岡勘ヶ由殿

長岡右馬助殿

藪　内匠殿

村上八郎左衛門殿

加々山隼人殿

益田藏人殿

加納曲齋殿

長岡式部殿

閏六月四日、一二三日、忠興君御歸國之御暇、將軍御直ニ被仰出、頓る御歸城被成候、

同廿五日、忠利君へ被進候御書、

以上

態勝部長左衛門上候、

忠興歸國ヲ國元ヘ豫告ス

一方々へ之狀共被見分、出頭衆へハ人を添可被遣候、さゐき衆へハ、其方之あち小性ニそゑせ可被居候事、

一大御所樣へ之進物ハ、上州と金地院とへ申遣候間、金地院へ能々示預、上州披露被申候樣可被仕候事、

一公方樣に之進物も、土井大炊殿、佐渡殿へ申遣候間、得其意披露被仕候樣可被仕候、可被得其意候事、

一飯守表ニゐ、藤泉州、井伊掃部跡へ不被付、由斷之樣ニ被仰候衆之御せんさく、如何成行候哉、中よも仙兵太儀氣遣候條、やうも具可申越候事、

一大學殿氣色彌能候哉承度候事、

一在江戸之衆ゐと、是又替儀無之候哉之事、

一正宗今度大和口よての儀、水野日向何とやらん被申上、其申ひらき直ニ可被申上樣ニ、我等下國之砌沙汰申つる、如何成行候哉之事、

一筑紫、公方樣に之御禮相濟候哉之事、

一金雲州跡、ゐふと成行候哉之事、

一田中筑後事、其後前ニ替儀無之哉之事、

一高野より、伊東丹後被召出、大坂表ニゐのやうも、御せんさく有へきやうふ申つる、是又如何成行候哉之事、

以上

後六月廿五日　　御判

内記殿〇忠利

〔參考〕

〔本光國師日記〕十七　壬六月六日、榮任所持之一休之諸惡莫作之墨跡、羽越中殿御ゟい候、則松首座請取、越中殿へ渡、金子貳拾枚榮任へ、松首座、越中殿使者ニ付候ゐ參、慥ニ渡請取、淺井茂大夫、加々山半兵衞ニ渡之也、榮任ゟ墨跡渡、金子を請取候との請取狀、松井右近所へ之あて所よて、越中殿へ被遣也、越中殿ゟ榮任へ金子渡□□□□□□□來、則其狀榮任遣、我等不□□□□□□□□□□渡ス也、

忠興一休ノ墨蹟ヲ購フ

先日者早々御下國御殘多候、越中殿御息災ニ候哉、爰元相替儀無之候間、以別紙不申入候、可然樣ニ被仰上可給候、隨ゐ藪内匠内ニ和倉勝兵衞と申者

崇傳ノ紹介狀

勢與ノ訴狀

有之由候、是ハ御城之周存善貞弟ニ候ハ、病者ニ罷成候故、役儀以下難成進退御座候條、越中殿へ被召出、相應ニ被召遣候樣ニ、拙老御取成申候樣ニと、右之兩人內證被申事ニ候間、貴殿迄內狀進候、能樣ニ被得御內意可被遣候、尙期後音候、恐惶謹言、

後六月十五日　　金地院

松井右近殿　御宿所

右之折紙、二條御城ニて周存へ渡ス、

同十五日、羽越州壬六月九日之狀、播磨備前ノ堺より來、內記殿ニ被居、則返書遣之、

五日、庚戌、淡路安樂院勢與、千光寺隆盛ノ紫衣濫用ヲ訴フ、是日、幕府、隆盛ノ紫衣ヲ禁ジ、綸旨ノ僞造者田邊三右衞門ヲ誅ス、

〔本光國師日記〕十七

乍恐申上候、

淡路之千光寺ら申坊主、三ヶ年此方無免紫衣私着申候間、三寶院殿ゟ申上候得者、不屆事ニ候、幸御奉行衆樣被成御改候間、申上候得と御申候故、則申

板倉勝重及ビ崇傳ノ隆盛召出狀

上候、惣別非官位紫衣着用申候儀無之旨承及候間、被下召符、彼人被召寄、如御法度被仰付候ゟ被下候者、忝奉存候、

慶長廿年六月五日　　金地院和尙

板倉伊賀守樣

如此目安指上候間、早々罷上可申分者也、

六月六日　　板倉伊賀守

淡路　　金地院

千光寺ら

急度申遣候、其方紫衣着用不謂由、如此目安指上候、幸高野衆も在京之儀ニ候、早々上洛候ゟ可被及穿鑿候、於油斷者、彌可爲越度候也、

六月六日　　板倉伊賀守

淡路

千光寺

右是ニ ゐ、裏書も書狀も相調、安樂院ニ渡、伊賀殿へ持せ遣ス、

金地院

淡路千光寺衣躰之儀ニ付ゐ、先日安樂坊目安被上候間、折紙差越候、千光寺上洛之由候、双方之出入直ニ可被聞召旨候條、千光寺明日二條御殿可罷出候樣、可被仰渡候、貴殿御存知之由、相手安樂坊申候間、令啓候、恐々謹言、

壬六月二日　板倉伊賀守

金地院

乾平右衞門殿　御宿所

勢與隆盛ノ對決

右之狀安樂坊ニ渡ス、

後六月三日、淡路之千光寺、御前へ被召出、双方聞召候、相手ハ安樂坊也、多聞院も御前ニ有、千光寺ハ淡路之松平宮內少輔殿之御內乾平右衞門馳走之人ヨて、昨日二日折紙遣候、其返書來、其安有左、平右衞門ゟ牧清兵衞へ狀來

候ゐ、千光寺賴入之由申來、御前ヨて双方之申樣ハ、千光寺三ヶ年已前ゟ、淡路ニて紫衣を着候と申、千光寺申分無之、當年四月ニ輪旨（マヽ下同ジ）取由申、其輪旨上樣被成御覽候、左少辨忠次と有之、烏丸中納言、冷泉中納言、日野唯心ゐとニ輪旨御見せ被成候、忠次ト申公家ハ、公家中ニ無之由被申上、左少辨ハ今ハ烏丸子也、似セ輪旨ニて有之間、上樣取次申候者を被成御尋候へハ、京之者と千光寺申也、明日相尋、可罷出と申候、御前を罷立、我等を（マヽ）申候ハ、我等申候共、罷出間敷候間、使者を御添被成被下候樣ニ申候間、伊賀殿へ參、樣子能聞屆候へハ、三知坊取次と申候、則伊賀殿ゟ三知坊へ人を被遣候へハ、內ニ居不申候、

尊書忝致拜見候、仍、淡路千光寺衣躰之義付ゐ、最前高野西南院ゟ可被成御尋之條、可召寄由被仰越、卽四五日以前上着仕候、西南院御他行之由ニ付ゐ、從是可得御意候、尊書之趣、彼千光寺ニ申聞、可罷出由可申渡候、猶追ゐ可奉得尊意候、恐惶謹言、

後六月二日　乾平右衞門

金地院様

伊賀守様 參尊報

閏六月五日、淡路千光寺法印輪旨マ子コトノ穿鑿、伊賀殿ニて聞居ル、書付貳通有、案有左、但此二通ノカキ物ハ、昨四日、伊賀殿ゟ持せ給、又今日五日伊賀直ノ口ヲ聞也、

輪旨僞造ノ穿鑿

覺

淡路之泉(マヽ)光寺法印成之儀、口宣之取次尋申候處ニ、三知坊を頼、口宣調候由申候間、三知坊宿へ、如御存知、知人を添越申候處ニ、三知坊致他行、昨日暮候ゟ罷歸候間、よひ寄尋申候得者、慶存と申坊主を頼候ゟ、口宣調申候由申候、禁中へ之取次者、竹屋辨殿内三右衞門と申者、口宣を調渡候由申候間、三右衞門ニ尋申候得者、傍輩ニ候喜右衞門与申者、書ゟ出候由申候、彼喜右衞門者、去五月十八日ニそて候由申候、三右衞門をハ、廣橋大納言殿番衆を御付置候由申候、今朝可申上候得共、右之様子尋申候ニ付ゟ、遲々仕候、三右衞門申分者、書付爲御披見進之候、已上、

壬六月四日　　板伊賀守

金地院

たゝへ三ゑもん申候口

一けいそんまいり候て、それらニ申候ハ、あれちのさうぞハ、けいそんよりもとゝよりにて御座候間、口宣を申うけ、死去の時がんニ入申へく候間、けちゑんあそハゝ候て可被下、せいそん(けカ)申ニつき、たゝへ喜右衞門ニ申きゝせ、喜右衞門もけちゑんの事にて候間、書候て可遣とて、喜右衞門書申候、

一禮として銀四十匁とハ申候へとも、それゑとハ無御座候、これをハ喜右衞門ニ又さし申候、又ゟきらニハ、銀貳匁九分くれ候間、ゑんゝやく申候へとも、いゟふてと申候てくれ申候、

一喜右衞門ハとゝより申候物にて御座候ゟ、去五月十八日ニ死去仕候、

一竹屋殿へハ、この事申きゝせす候事、

後六月四日

是ハ三右衞門申口を、早速安藝聞候ゟ書付上候也、二通ノ書物札を

田邊三右衞門ノ自白

三右衛門ノ處分

付目安箱へ入置、

同日、右貳通之書付二條之御殿よて、奥よて懸御目候、三右衛門とハ、伊賀守所ニ有之由申上候へハ、京中を御引候て、可有御成敗之由御詫ニ候、則歸ゟけニ伊賀殿へ參、其樣子申渡、三右衛門ハ籠者被申付也、伊賀殿煩も驗氣也、

隆盛赦サル

淡路之千光寺色衣着用ニ付ゐ、申分出來、則於御前、被及對決ニ、千光寺綸旨似物ニ相極、綸旨似候三右衛門ゟ申者御成敗候、向後色衣着用申間敷由、以一札本寺方へ詫言申候故、其趣達上聞候處、被成御赦免候、猶本寺方ゟ可有演說候、恐々謹言、

閏六月十四日

板倉伊賀守

金地院

淡路國

安樂房

右之折紙、伊賀殿よて相認、則安樂房へ遣ス、

千光寺一筆ハ、眞言本寺衆ゟ安樂坊へ遣ス、案左ニ有、

拙僧於淡路國、就色衣着用仕、安樂坊と申分出來、目安指上、卽被召被及御糺明、綸旨之御穿鑿候處、既似物ニ落着候故、綸旨似申三右衛門御成敗被成候、拙僧儀罪科難遁候處、種々御侘言申、御赦免忝候、向後色衣着用仕間敷候、萬一於相背御法度者、可被處罪科候、以此旨御奉行衆ゟ被仰理可被下候、仍狀如件、

閏六月十一日

千光寺

東　寺

醍醐寺

隆盛在判

高野山

各諸眞言中

右之樣子ニより得上意、御赦免ニ付ゐ、伊賀殿連判ニ、折紙安樂坊へ遣ス、兩方共ニ指下折紙之案ハ右ニ有、

〈義演准后日記〉十九　閏六月十三日、東寺年預ヨリ淡路國千光寺紫衣ノ儀、

元和元年閏六月五日

論者　諸將、幷公卿各列座、論題十惡起不起、身三口四意三同時俱起耶別起耶、論者寶性院深覺無量壽院長海遍明院覺雄正智院覺深金剛三昧院政算如意輪寺宥盛御庵室光宥北室院政昊講師多聞院眞尊頃日見寄自高野山爲御開法也論席訖將軍家還御于伏見也、

講師

參列ノ公家衆及ビ大名

先日於武家直御糺明、綸紙(ヤ)似候三衞門、卽御成敗、千光寺ハ命御赦免、東寺當寺高野三ヶ寺ヨリ、奉行衆侘言可然內證ノ由申來了、

十四日、千光寺事假名書五ヶ條調之、東寺ヨリ內緣在之可遣云々、

六日、辛亥、秀忠二條城ニ抵ル、眞言宗論義アリ、

〔駿府記〕閏六月五日、酷暑故、無出御云々、

六日、將軍家從伏見渡御二條御所、則於奧之御座間、有御閑談、本多佐渡守、同上野介伺候、今日於前殿眞言論議有之、題者十惡起不起、身三口四意三同時起耶各別耶、寶性院、无量壽院、遍明院、正智院、金剛三昧院、如意輪寺、菴室、北室院也、講師者多聞院、兩御所同有出御、令聞之給云々、〇駿府政事錄此間ニ「越後少將殿」ノ五字アリ、

尾張宰相殿、遠江中將殿、越前少將殿、松平陸奧守、松平筑前守、京極若狹守、藤堂和泉守、本多佐渡守以下伺候、其外日野入道等、諸公家成座列云々、〇中略　未刻將軍家伏見還御云々、

〔言緒卿記〕閏六月六日辛亥、天晴、前大樹へ罷出、論議アリ、大樹御出座也、

〔高野春秋〕十四　閏六月六日、學侶於二條御城中、御前論議、神君御出座、將軍家亦御同聽、御君達各列席也、御聽聞上座兩御所次、越後少將君、尾張宰相君、遠江中將君、越前少將君次、松平陸奧守及在京

〔伊達政宗記錄事蹟考記〕二十三　記錄拔書六

閏六月六日、台德院樣二條ゟ渡御、政宗儀も登城仕候由ニ御座候、

〔高山公實錄〕三十九　同〇元和元年閏六月六日、台德公伏見より二城の城へ出御あり、公を召し密談し給ひ、〇下略

年譜略　閏六月六日、秀忠公伏見ヨリ二城ノ城ニ渡御、公竝ニ本多正信正純ノ三侯ヲ近ク召テ密談アリ、其上ニテ眞言論義アリ、公又是ニ列シ、聽聞アリ云々、〇下略

忠勤錄　兩尊公御在洛中、高虎公每日二條亭へ御出仕、日々之招よ御閑談有之、其上於二條之殿中、節々諸宗之法問論議幷伶人奏樂等被仰付、其度々右之歷々公家衆伺公有之、斯樣之御家門方歷々御會坐之節者、猶以高虎公隨之召、一度も無御闕坐御伺公有之也、

〔附錄〕

〔言緒卿記〕閏六月九日甲寅、夕立前大樹ヘ參、六條中納言、德大寺中納言、水無瀨宰相、予、花山院少將、堀川少將等也、
十日乙卯、夕立前大樹ヘ罷出了、
十四日己未、天晴、二條御所ヘ參了、
〔梵舜日記〕十九 閏六月六日辛亥、天晴、二條之御城ヘ罷出、退出、無御目覺罷歸也、
八日癸丑、天晴、二條之御城罷出、無御出座、
九日甲寅、天晴、予二條之御城罷出、及御目覺令歸也、

幕府、南禪寺金地院末寺河內眞觀寺ニ寺田千石ヲ賜フ、

〔駿府記〕閏六月六日、今日、南禪寺金地院末寺河內國矢尾眞觀寺々領千石被下由、將軍家被仰出、
〔本光國師日記〕十七 後六月六日、二條之御殿ヘ、公方樣御成、御書院ヘ被爲召、忝き上意共也、本佐州、上州御取成也、於河內寺領可被下旨、被仰出候也、
同七日、伏見ヘ御禮ニ參ル、それより直ニ二條ヘ出仕申候、
同八日、二條御殿より、土井大炊殿、本上州ヘ對談、河內より可被下寺領所員數者、大御所樣御指圖次第と御內證將軍樣御諚之由、大御所樣ヘ被申上候由、被爲仰聞候也、

寺領所員數ハ御大御所樣御指

〔本光國師日記〕八十 八月十一日、北見五郎左衞門ゟ知行所可渡由之折紙來、返書遣、案在于左、
貴札拜見忝存候、大御所樣御送ニ水口迄御出候處、御機嫌能御暇被遣、直ニ御代官所ヘ被成御越候由尤存候、然所ニ小堀遠江殿ゟ飛脚參候ゟ、夜通ニ御上洛之由披々御大義共無申計候、今度河內ニて拜領申候知行所可被成御分義付ゟ、拙老儀も河內知行所寺之仕置申付、隙明次第可罷下旨被仰出候ニ付ゟ、逗留仕候、豐國之會所を被下、亀井眞觀寺引立申候、そくつし、舟よて下し申候、則罷下、萬申付度候ヘ共、知行所無御渡候ヘハ、申付義も不罷成候故、此中待兼申候、先日小遠江殿、伊喜助殿御出候ゟ、貴樣次第ニ可有御渡御物語候條、可然樣ニ御馳走奉賴存候、猶期面上候間、不能詳候、恐惶謹言、

八月十四日　北五郎左樣

豐國社ノ建物ヲ眞觀寺ニ移ス　崇傳知行ノ所引渡ノ督促ヲ依賴ス

金地院

眞観寺常光寺門前境内竹木人足等、守護不入之御判被下候案紙懸
御目候、先日小遠州へ爲進候へ共、爲念如此候、可然樣ニ頼存候、以上、
八月十五日　北見五郎左衛門
　　小堀遠江守
　　　　樣
　　　　

八月十九日

與安法印樣 人々御中

金地院

崇傳後藤光次ニ知行所ノ指圖ヲ依頼ス

一書令啓候、先日參殿仕候ゐ、緩々と得御意、別ゐ忝存候、其翌日、具ニ御報被示下、得其意、彌大慶存候、御立被成以後、未以書狀も不申入候、御疎々敷御床敷存候、上樣御下向、路次中天氣惡敷候間、御機嫌如何と、此方より案申候、自然御次ゐニハ、可然樣ニ御取成奉頼候、御前之樣子、善惡ニ付ゐ、可被仰聞旨、其御左右を奉待候、今度拜領申候河內知行所水帳、當月十五日北見五郎左、小堀遠州ゟ請取申候、今日先へ人を下申候、彼地小屋ゟけ共仕候て、左右次第罷越、萬可申付と存候、隨分仕置共申付、仕廻次第可罷下候、內々如申候、其內よも急度罷下可然樣子ニ候ハヽ、御左右候ゐ可被下候、諸事可然樣ニ御指引奉頼候、猶後音ニ追々可申入候間、不能多筆候、恐惶謹言、

八月十九日

後庄三樣 人々御中

金地院

乍憚此書狀共、被成御届可被下候、以上、

崇傳本多正純ニ知行所ニツキ幹旋ヲ依頼ス

一書令啓上候、上樣御下向路次中雨天、御機嫌如何と此方より案申候、自然之御次ゐ候ハヽ、御取成奉頼存候、今度河內より拜領申候寺領水帳、當月十五日、小遠州、北五郎左ゟ請取申候、近日彼地へ罷越、作事以下可申付と存候、不始于今儀ニ御座候へ共、今度者樣々御取成被仰上、重疊忝き上意共、外聞實儀餘身不淺存候、彌以貴樣御一人偏ニ奉頼有之儀ニ候條、萬可然樣ニ御指引御指南奉頼存候、用所共仕廻次第、早々可罷下候、內々如申上候、其內ニも急罷下可然と被思召候ハヽ、御一書可被下候、奉頼存候、猶後音ニ追々可申上候間、不能詳候、恐惶謹言、

八月十九日

本上州樣 人々御中

金地院

右之三通、幷彦九兵、道春へも書狀遣ス、此文躰ハざつと也、此文ハ文箱へ入、後庄三への宛所より、伊賀殿へ遣し、次飛脚之便宜ニ御届候へと申遣ス、內膳殿へも一書遣ス也、日野唯心へも狀遣ス、

崇傳後藤光次ニ執成ヲ依頼ス

八月廿日、八尾ゟ作藏ヲ上ス、久右衞門方ゟ狀來、
同廿一日、作藏ニくろげんそへ下ス、久右衞門方へ返書遣ス、此時色々道具
共下、祖藏主方ゟ注文よて遣ス、

一書令啓達候、當月十九日、以書狀申入候、相屆申候哉、其地へ御下着、彌御隙
御座有間敷と奉察候、上樣御機嫌能被成御座候哉、御次之刻、可然樣ニ御取
成奉賴候、先書ニも如申入候、一兩日中ニ河內へ罷越、寺建立以下仕置共可
申付と存候、早先へ人を下、こや以下申付候、涯分差急罷下候、其內よも急罷
下可然候者、御左右奉待候、萬端貴樣御座候間、御前向之義、心易存罷在候、指
引奉賴候、急便候條、不能多筆候、恐惶謹言、

八月廿二日　　金地院

後庄三樣　人々御中

廿二日、八尾ゟ上候人足下ス、久右衞門方へ返書遣ス、此時くぎまへ下ス、
八月廿三日、八尾ゟ與五郎、源七、作藏、喜介上ル、久右衞門八月廿三日之狀來、
寂前此方ゟ道具共下候注文請取來、亀井八尾以後之帳之覺として寫置、案

河內へ道具ヲ送ル覺書

左ニ有之、

河內へ相調下覺

一ゑやうゆう　一さる　一ていもいゑニ入　貳つい
一こふ上々　百五十本　一ゥんあへさるニ入　上下貳つ
一次のこふ　貳束　一手ゑよくさい　貳つ
一かんゑう　百把但十把ゆひ　一らうそく　卅丁
一ミそ　貳斗入桶一つ　一さうめん　大箱一つ
一ゑらひ　五十連　一さゥゑよくさい　一つ
一さるおけ　廿　一まるゑん　十八前
一すゝいゑニ入　貳つい　一あをしくぎ　貳くゞつ
一二いとめ　十　一酌子　一本
一ゑやくし　貳ゑん　一ひらおしき　十まい
一めしつき　壹つ　一まるゑん　十まい
一吉野ゑん　十まい　一ひらさい入　十

以上

崇傳八尾ニ赴ク

合貳十四色

八月廿一日

右之分さしゝにうけ取申候、

八月廿三日　　森久右衛門
　　在判

叢首座様ゟ

廿八日之御折紙、則其晩於八尾拜見仕候、一和州法樂寺ゟ之返書平遠州（○平野遠江守長泰）ゟ御屆之由候ゐ、爲披見被下候、寺僧衆奥田長左衛門同心ニ、近日罷上候由、於其地被聞召屆尤存候、一大御所様、廿二日ニ駿府へ被成着御之由被仰聞候、目出度存候、猶御前珍敷御左右も御座候者、被仰聞可被下候、一貴殿様大坂へ之御下向、可爲近日之由御物語ニ候條、我等も其刻可罷越と存知、いまゝ不參候、其地御用共多御座候ニ付ゐ、御延引之由候、左様ニ御座候者、拙老儀者下總殿（○大坂城代松平忠明）へ餘無音之様ニ御座候條、一兩日中ニ大坂へ可罷出候、一拙老儀、廿五日伏見へ參、隱岐様へ御見廻申上候處、

八尾龜井ノ荒廢

松平忠明ノ臣異議ヲ申立ツ

種々御振舞、殊御拜領之御茶被下、重疊忝次第、可申上様も無御座候、御次ゐ之刻、可然様ニ御取成奉賴候、其晩八幡ニ一宿仕、廿六日ニ八尾へ參着申候、八尾龜井之様子、作毛以下も、散〳〵荒果申躰、可被成御推量候、一兩寺共ニ、普請作事無油斷申付候、存知之外手間入可申躰ニ候、猶後音ニ追々可申入候間、不能多筆候、恐惶謹言、

八月廿九日　　金地院

板伊州様（尊報）

右之折紙三寶院殿使主水上候時遣ス、眞西堂へも松首座方ゟ狀上ス、伊賀殿への返書、眞西堂ゟ被屆候へと申遣ス、道惠方へ狀上ス、茶碗壹つ上ス、

態申遣候、今日龜井普請申付、我等自身在之處ニ、下總殿御横目衆と候ゐ、平野彦兵衛、若林八左衛門、稻垣與三左衛門と御名乘候ゐ、庄屋年寄百性を被召出、樣々存分被申、惡口狼藉被申候、長老へ渡樣不審成由、重々ニくつとも被申由候、門前境內守護不入之御直判頂戴申候上、奉行衆ゟ水帳被相渡、殊

今度寺を立、拙老自身有之内さへ如此之躰ニ候へハ、駿府ニ罷在内ニハ、留守居之躰よて、猶以無心元存事候、右之衆今晩者、久寶寺ニ逗留之由候、此書中之趣山田清大夫○次重ニ見せられ、三人之衆無案内ニ候ハヽ、其御理御申候様ニ可申候、以來之さめニ候條、萬入魂可申候、下總殿へ別ニ得御意間柄之儀、□□下々之申分出來候へハ、如何と存知申入候義ニ候、其心得ニ可申理候、恐々謹言、

九月朔日　　松首座

金地院

八尾西郷村へも、定而可被參候、是も右之通ニ可被申ハと不審ニ候、むさと惡口被申候へハ、互之外聞も如何と存事ニ候、早々清大夫殿へ内證申理候事專要候、以上、

右之折紙大坂へ與五郎ニ持せ遣ス、

九月朔日、山田清太夫ゟ飛脚來、亀井よて披見候也、則返書遣ス、案左ニ有之、

清太夫折紙も左ニ案を書置、

態御飛札亀井ニ而令拜見候、爰元作事申付取紛候故、其地へ御見廻延引非本意候、下總殿へも可然樣ニ御取成所仰候、然者今朝松首座方迄折紙遣候、昨日御下代衆御越候ゟ、庄屋年寄ニ出入被仰由候條、内證貴殿へ申入候へと申遣候處、早々被入御念、御折紙之趣御入魂之驗相見え、別而滿足仕候、拙老儀者、駿府ニ相詰候間、爰許留守之儀をハ、萬下總殿賴存知、貴殿御馳走をうけ可申と存候間、彌其御分別候ゟ、下々之衆申分無之樣ニ被仰付可被下候、互ニ外聞能樣ニ賴存候、何樣近日參、以拜顔萬可示合候間、不能一二候、恐惶謹言、

九月朔日　　山田清太夫殿　貴報

金地院

返々、昨日之出入者、必御沙汰無之樣ニ尤候、御書中之通具ニ承屆候、御心安可被思召候、以上、

松首座へ御狀見申候ゟ驚入存候ゟ、彼鄉中見廻申候者共のゟさへも、早々飛脚を遣申候、百姓ゟと改ゟ穿鑿仕候へとハ、中〳〵下總守も不申付候、當毛ゟと仕付候ゟと見廻申候へと申付候處ニ、ゟ樣之仕合、下總守聞

申候ハヽ、則成敗をも可仕候間、先々下總守ニハ不申聞候常々何よても御奉公ふりを被仕度と被申候、乍恐日本之神そ右之者共、公儀をも存候ハぬ者共よて、むさと右之通申候儀、御免可被成候、委細者松首座へ申入候、近比無御面目儀共候、則〳〵郷中見廻申候者共ゟさへも早飛脚を遣申候、百姓ゟと改申候事ハ、中〳〵不申付候間、我等も念を入候ハて、只今行當迷惑仕候、恐惶謹言、

九月朔日　　山田清太夫

金地院様　　在判

松首座　御披露

猶々、下總守聞申候ハヽ、成敗をも可仕候、今度ハ先々御免候ゟ可被下候、惣別郷中へかゝり申候者共ハ、公儀をも存候ハて、年寄申候者共よて御座候故、如此之次第、中〳〵難由上候、委細者松首座へ申上候、已上、

一書令啓候、一亀井眞觀寺作事申付、昨日柱立、今日棟上申付候、天氣能御座候ゟ、仕合能大慶ニ存儀ニ候、御心安可被思召候、巨細ハ隙明次第罷上、以拜顔可得御意候、一爰許取紛申故、未大坂へも不參候、一貴様大坂邊へ之御下向も、公儀之御用多候故、御延引之由、先度御書中ニ候、何比可爲御下向候哉、大略ハ成ゟ存可申と存候、〇下略、崇傳、金地院知行所北山村ノ内平野ニカヽル、年末雜載ニ收ム、九月日附、板倉勝重宛、崇傳書狀案、

九月四日　下總殿ゟ禮狀來、則返書遣ス、

〇上略　一眞觀寺御作事被仰付候處ニ、折節天氣よく御座候ゟ、一段之御仕合と目出度候、〇下略、西洞院時慶ト訴訟ノコトニカヽル、年末雜載ニ收ム、九月四日附、金地院宛、板倉勝重書狀案、

四日之御返書、五日亀井ニゟ拜見仕候、一上様廿三日駿府御着座之旨、內膳殿ゟ御左右之由被仰聞候、存其旨目出度存候、一八尾亀井之作事、無油斷申付候、頓ゟ罷上可得御意候、〇下略、西洞院時慶ト訴訟ノコトニカヽル、年末雜載ニ收ム、九月六日附、板倉勝重宛、崇傳書狀案、

元和元年閏六月六日

眞觀寺作事了ル

當國中一番ノ寺

豐國社ノ一部ヲ眞觀寺ニ移建ス

七日之尊書、乍御報拜見忝存候、〇中略此地作事申付候庫裡やき、昨日仕廻申候、一兩日中ニ方丈之やきも出來可申候、御心安可被思召候、今ハ當國中一番之寺ニて御座候、ちいさく御座候へ共、念入結構成寺ニあ、外聞實義忝存事候、是も貴殿樣御取成故拜領申候、每度御芳恩難忘候、猶近日罷登、以面上可得御意候、恐惶謹言、

九月九日　　金

板伊州樣　人々御中

駿府ゟ珍敷御左右も候ハヽ、南禪寺迄被仰聞可被下候、以上、

一拙老儀、河內ニ于今逗留仕候、今度拜領仕候豐國之寺を、眞觀寺ニ引建立仕候、過半出來申候、今少用所共申付、近日可罷下候、〇上下略、九月十五日附、本多正純宛、崇傳書狀案、

一拙老事、于今河內ニ逗留仕候、眞觀寺建立過半出來仕候、今少用所とも申付、近日可罷下候、〇上下略、九月十五日附、後藤光次宛、崇傳書狀案、

崇傳ノ上洛

崇傳駿府ヘ下向ニツキ眞觀寺ノコトヲ松平忠明ニ依賴ス

一上樣御息災ニ御機嫌能被成御座候旨、目出度存候、拙老儀、早々罷下可然旨被仰下候、存其旨候、涯分此地用所とも仕廻次第罷下可申候、眞觀寺建立申付、于今河內ニ罷在候、作事もそや過半出來申候、御心安可被思召候、今少仕置とも申付候間、御鷹野出御前可罷下候、先此僧先へ指下申候、御前之樣子被仰聞可被下候、恐惶謹言、〇上下略、九月十五日附、與安法印宛、崇傳書狀案、

同十九日、上洛、松平下總殿、同淸太夫へ狀遣、案左ニ有、

一書令啓候、爰許作事共大方仕舞申候間、令上洛候、以參御暇乞可申入候へ共、近日そや駿府へ可罷下と存知、差急飯森通を罷上候、爲御理松首座を以申入候、眞觀寺、常光寺兩寺共ニ、看坊共申付置候間、萬奉賴存候、猶使僧口上ニ可得御意候間、不能多筆候、恐惶謹言、

九月十九日　　金地院

松平下總守樣　人々御中

此木錬一折任到來、令進入候、以上、

崇傳ノ大坂町屋敷

眞觀寺ノ制札

爰許作事共大方仕廻候間、令上洛候、廿二三日比ニ駿府へ可罷下内存ニ候故、飯森通を指急罷上候、爲御暇乞、松首座を以申入候、眞觀寺、常光寺兩寺共ニ、看坊共申付置候、万可然樣ニ奉賴存候、下總殿へも以書狀申入候、猶以御取成所仰候、隨ゐ先日者松首座を被召寄、其地町屋敷之儀、被入御念被仰渡候、爰元寺領等之手廻ニ付ゐ、万其地ニ用所共も可有御座候條、召遣候者一人召置候樣ニも仕度候間、尙以可然樣ニ御指引賴存候、尙松首座可得御意候、恐々謹言、

九月十九日　　金地院

山田清太夫殿　御宿所

此大栗一折、任到來令進入候、以上、

眞觀寺門前境内竹木人足等、爲守護不入旨、大御所樣御判有之、

元和元年九月日

相定條々

一てつはうをうち、はなさし、はこさし、鷹狩、鳥さし、諸殺生禁制之事、

一ひくれん諸百姓、かうさくゆさんあるまゝき事、

一窄人幷いさつらもの宿仕間敷事、

一爲守護不入上ハ、他之御給人より課役等申かけられまゝき事、但他領之田畠作仕候ハヽ、其年貢夫錢等難澁申まゝき事、

一けんくれこうろんかさく停止之事、萬一非分之儀申かくる族於在之ハ、其もの幷主人之名たしゥに承屆、注進可申事、

右如件、

元和元年九月日

右六まいつゝ眞觀寺ニ有之、

同文言にて常光寺ニも四まいにゝ有之、

同廿日、松首座大坂ゟ上ル、松下總殿、山清大夫十九日之返狀來、清大夫方ゟハ大坂町屋敷相渡由申來也、金地藏ニ有之目安箱ニ入置也、

大坂より亀井ニ被置候法度書之札二つ久右ニ渡し置也、九月廿日ニ、

廿一日、伊丹喜介、鎭目市左衞門、大久保六右衞門連判之九月八日之折紙來、

案在左、

西鄉龜井兩村借米ノ催促

急度申上候、仍、河内國御拜知之内八尾西鄉龜井村へ先度小堀遠江守、北見五郎左衞門、永野内藏尉、村上三右衞門奉ニて被爲借八木、當秋伏見之御藏へ納候樣ニ可被仰付候、委細右之衆ゟ可被申入候、恐惶謹言、

九月八日　　大久保六右衞門尉

判

鎭目市左衞門

判

伊丹喜介

判

御中

金地院侍者

右之折紙伊州ゟ て披見、則伊賀殿、藥任ニも見せ候若百姓難澁候ハヽ、我等手前より納候樣ニ可仕と、兩人へも申候、則折紙者久右衞門ニ渡し置、百姓中へ可申屆旨申付也、右之折紙藥首座方より持せ上せ候、返事可遣候へ共、右之三人之奉行衆早駿府へ被歸候我等明日立候間、面ニ可申也、

同日、山田清太夫、龜井八尾へ無理成儀申かけ間敷との折紙、幷松首座狀久右衞門ニ渡置、○眞觀寺等守護不入ニヨリ堤築ノ人足ヲ免ゼラルヽコト、本光國師日記元和三年正月十四日ノ條ニ見ユ、同年末雜載ニ收ム、參看スベシ、

○崇傳謝恩ノコト、本年九月二十七日、崇傳駿府ニ至リ、家康ニ謁スル條ニ見ユ、參看スベシ、

七日、壬子、土佐高知城主山内忠義、大坂ニ籠城セシ者ノ交名ヲ幕府ニ上ル、〔山内家四代記〕忠義公　大坂ゟ御國ゟ籠城仕者共御差出之寫左記、

大坂ゟ籠城仕候覺

一不破左近　慶長十八年十二月ニ走リ申候、親ハ當年四月ニ死申候、弟一人御座候、年十七、

一稻葉清六　去々年九月ニ扶持を放申候、親ハ去年十月ニ暇乞申候故遣申候、

一岡田縫殿　當年籠城仕候、去年九月ニ走リ申候、

一南部太郎左衞門　去年三月籠城仕候、土佐國住人、

一本山次郎右衞門　當年四月、畑郡ゟ女子召連走リ籠城仕由申候、舅國許ニ御座候、但此次郎右衞門ハ土佐國住人、

一西川助太夫　去年七月、江戸ニある新參召置、則國へ下シ申候へハ、直ニ籠城仕候、

一淺井熊之介　慶長十八年ニ召置候故淺井道有浪人仕罷下在之候つれ共、讃岐殿御構有之由承屆候間、去年春、父子

共暇遣、則罷上候、

此外城持共與力ニ付置申候内籠城仕さる者有之儀も可有御座候、國本へ改ニ遣候、若御座候ハヽ、重ゐ言上可仕候、

慶長二十年後六月七日　松平土左(マヽ)守

本多佐渡樣
酒井雅樂樣
土井大炊樣
安藤對馬樣

八日、癸丑秀忠、飛鳥井雅庸等ヲ伏見ニ召シ、蹴鞠ヲ觀ル、

〈駿府記〉閏六月八日、今日於伏見、將軍家召飛鳥井父子、令御覽蹴鞠云々、

〈土御門泰重卿記〉一　閏六月八日、晴天、昵近公家衆從將軍召候廣橋大納言、日野大納言、六條中納言、飛鳥井中納言父子、家君、山科、烏丸中納言、右衞門佐、鞠之衆飛鳥井父子、德大寺殿、四辻宰相、阿野宰相、右衞門佐、堀川、龍雲、各御見物也、此外大炊御門殿一齋見物也、

〈言緒卿記〉閏六月八日癸丑、天晴、武家御所へ參、今日蹴鞠會也、八數飛鳥井中納言、德大寺中納言、四辻宰相中將、阿野宰相中將、永慶朝臣、雅胤朝臣、康滿了雲等也、見物公家衆廣橋大納言、大炊御門大納言、日野大納言、六條中納言、烏丸中納言、業光朝臣、久脩朝臣、予等也、各振舞アリ、

○山科言緒ノ伏見ニ抵ルコト、此前後ニ見ユルモノ、便宜左ニ合敍ス、

〈言緒卿記〉六月七日壬午、天晴、伏見將軍樣へ參、十七日壬辰、雨、將軍樣御裝束仕立可申由、後藤生藏ヨリ申來了、廿七日壬寅、夕立、將軍樣夏裝束一通調進、後藤生藏へ渡申也、

閏六月三日戊申、夕立、伏見武家御所へ六條中納言、予參進物單物帷子也、

九日、甲寅信濃松本初メテ銀及ビ鉛ヲ出ス、幕府、城主小笠原忠政ニ命ジテ、之ヲ採掘セシム、

〈駿府記〉閏六月九日、信州松本山初出銀及鉛之由註進、則言上之處、其守護人可令堀由被仰出、松平右衞門佐、○大河内正綱伊丹喜之助○康勝奉之云々、

〈信府統記〉七信濃國筑摩郡境記會田組　會田與山川地理附保福寺鉛山ノ事

保福寺町ハ、松本ヨリ江戸ヘ往來ノ路ナリ、故ニ道程記ニ見ユ、但保福寺町ヨリ峠境マテ一里十六町五十八間、堺ヨリ上田領奈良本マテ一里二十八町二間、又坂本領内村マテ三里二十六町三十間、内峠堺分レ路ヨリ内村マテ二里九町

保福寺鉛山ノ初

三十町間ノ南ニカキアケ城ノ跡アリ、町ノ出口ニ番所アリ、町外ニ保福寺ト云禪院アリ、道ヨリ南ニ月澤山ト云アリ、昔ハ鷹巢山故留山ナリシヲ、久シク鷹ノ巢モタヘケルニ依テ、炭釜ヲ願、運上ニテ炭ヲ燒出ス所ニ、元祿二巳年、鉛山領四ケ村ヨリ願ニヨリテ入合トナリ、炭釜止ヌ、とやろ峯ヨリ澤通リ峯ツタヒおーろ澤、是保福寺町頭ヘツヽキテ、とやろ峯ハ高キ山ナリ、稻倉山トノ境ナリ、大ひいト云フ山アリ、月澤山ノ内ニテ、保福寺分ノ大山ナリ、但シ草木ハ入合、鉛山領ノ山境、南ハ丸山ノ峯ヨリ尾根通、保福寺町裏ノ城山ニテ、北ハ大野田入舟久保峯ヨリ尾根通リ穴澤峯北平保福寺町分林マテ境目ナリ、鉛山領ノ村々ハ、金山赤ぬさ反町殿ノ入古瀨、赤奴田ノ内、此ノ分正德三巳年、水野肥前守知行所トナル、委細別記載ルコトニ略ス、但シ四ケ村合テ七百拾六石五斗壹升二合ノ所ナリ、鉛山ヘ此村々ヲ付ラレシコトハ、鉛山ヘ人歩入ルカ故、保福寺苅屋原ハ驛路ノ宿場ニテ、此鉛山入用ノ人足出スコト成難旨訴ルニ依テ、後ニ右四ケ村ヲ附ラレケルコトハ下ニ見ユ、此金山始リハ、石川玄番頭松本領守ノ吃、慶長年中、保福寺ヲシカ澤ニ鉛山ヲ見出セリ、然レトモ鉛ノ吹分ケヤウヲ知ラス、其頃甲州浪人甘利藤内ガ子彌右衞門、鹽尻ノ邊ニ居住ス、其家來庄八ト云フ者カ子ノ、吹ヤウヲ知ル由ヲ聞テ、彼甘利ヲ保福

鉛發見ノ場所

御金山トナル

荷分ケ

寺ヘ招キ寄セ居ラシメテ、鉛ヲホルコト十ケ年ハカリ、守護ヘ達スル程ニテモナキガ故ニ、內證ニテホラセケル、其後甘利今ノ金山村ヘ越テ住セリ、元和元乙卯年、小笠原兵部太輔秀政松本城主ノ時、保福寺町ノ下南ノ丸山澤ノ下行人平ト云處ニ、能カナ山ヲ見出シ鉛出ル、此節ハ大坂御歸陳ノ砌故、甘利弥右衞門鉄炮玉ヲ鑄テ、山城ノ國伏見マテ持參シテ、小笠原右近太夫忠政ヘ獻シテ、カナ山ノコトヲ注進ス、卽公義ヘ言上ノ所ニ、御嘉運ノ山ナレバトテ、公義ヘ差上ヘキ由命セラレテ、御金山トナルニ依テ、翌元和二丙辰年、檢使トシテ德山五兵衞佐渡ヨリ此ニ至リ、江戸ヘ歸ル、此時御代官井上新左衞門支配トシテ、八年ノ內日々堀出ス、鉛半分上納、殘テ半分金堀ノ元メニ下サル、是荷分ケトテ、佐渡ノ國御金山ノ法例ナリトカヤ、元和三年、小笠原忠政播州明石ヘ得替ノ砌、殿入村ヨリ七嵐村マテ御藏入ト成ルヘキノ所ニ、七嵐村ハ松本ヨリ保福寺通リ江戸往來ノ路ナル故馬次ノ助鄉ノ由、保福寺町ヨリ願フニ依テ、殿入村、赤奴田村、反町村三所、高五百石、御代官所トシテ、是ヲ御金山料ト云フ、金山村ハ高ナシニテ、鉛ヲ上納セリ、井上新左衞門ハ、元和二年ヨリ同九癸亥年マテ御金山支配ナリ、寛永元甲子年ヨリ、御代官高田小次郎、同三丙寅年マテ支

配、此吃鉛山悪敷ナルニ依テ、運上鉛二十八貫目ニ定リ上納ス、寛永四丁卯年、御代官乙畑半右衛門支配、運上鉛右ニ同シ、同五戊辰年、御代官設樂長兵衛、近山五兵衛支配トナリ、翌己巳年、殿入赤奴田反町ヘ竿入テ、高七百石餘ニナル、金山村ハ前ノ如ク運上鉛二十八貫目上納ナリ、寛永八辛未年、能キ山ヲ見出シテ鉛出ルニ依テ、運上鉛増テ七百貫目ニナル、同九壬申年ハ、又増テ三千二百貫目ニナル、同十癸酉年、又増テ四千貫目ニ成リ、同十一甲戌年ハ、山色悪ク、運上鉛三千五百貫目上納ス、同十二乙亥年ハ、彌山悪ク鉛出サル故、前々ノ通リ運上二十八貫目ニナル、設樂長兵衛、近山五兵衛兩人支配、寛永十五年マテ勤ル、堀田加賀守正盛、松本城主仰蒙リ、翌寛永十六己卯年、御金山料預リニ成リテ、御代官止ヌ、此吃モ運上鉛二十八貫目ナリ、同十九壬午年、水野隼人正忠清公領主ノ時モ、相續キ預リニテ、運上鉛同前、但シ物成ハ年々公義ヘ收納、口米ハ會田組支配ノ代官役ノ者ヘ取ラセ遣ス、忠職公ノ時、鉛少モ出サルニ依テ、屋敷跡山畑年貢ヲ定、運上鉛二十八貫目ノ代トシテ、金子一兩充上納ノ筈ニ言上、明暦元乙未年ヨリ、延寶元癸丑年マテ十九ケ年ノ中、金子一兩ツヽ上納ナリ、忠直公ノ時、延寶二甲寅年四月、金山村ヘ竿入テ、高七石壹斗七升一合ニ定リ、運上鉛代ハ止ヌ、其後

身延本本朝文粹
道春第一卷ヲ索メ

元祿二己巳年、御金山料御代官所トナリ、太田作之進支配ニ仰付ラルニ付、手代淺井吉右衛門、小林喜太夫ヲ差越、同年七月二十四日、赤奴田村角兵衛宅ニ於テ、帳面等引渡ス、此年彼四ケ村願出テ、月澤山入合トナリ、炭釜止ヌ、太田作之進支配十年ニシテ、元祿十二己卯年六月、御代官替リ、高谷太兵衛、正德二壬辰年マテ十四ケ年支配、同癸巳年八月御代官替リ、平岡三郎右衛門支配トナリ、同年十月十六日、水野肥前守知行所ノ内ニ下サル、

肥前平戸城主松浦隆信、物ヲ家康ニ獻ズ、

〔駿府記〕閏六月九日、松浦肥前守獻高麗鵯(マヽ)、其觜赤、

○明日、隆信、祖父鎭信ノ遺物ヲ家康ニ獻ズルコト、慶長十九年五月二十六日、鎭信卒スル條ニ收メタリ、參看スベシ、

是ヨリ先、家康、五山僧侶ニ命ジテ、本朝文粹ヲ謄寫セシム、是日、金地院崇傳、其功成ルヲ以テ之ヲ家康ニ獻ズ、

〔駿府記〕閏六月九日、大御所出御前殿、金地院持本朝文粹兩部、備御前、件本者、自甲州身延山久遠寺到來、仍、先日仰五山僧、令書寫給所也、第一之卷不足之處、道春於京探出之、備御覽、仍、急可寫補由被仰出、一卷出來奇特之由、道春

出シテ賞セラル

蒙御感云々、

〔本光國師日記〕十六　四月二日、身延之上人狀來、在府也、昨日御禮申上忝由也、使僧アリ、金藤半右衞門御まんゐより御使ニ被來、本朝文粹二ヨリ十四迄十三册來、此時之狀目安箱ニアリ、

〔本光國師日記〕十七　四月廿八日、本朝文粹書寫箱も緒も出來候ゐ、二條之御殿よて上ル、榮任取次よて、奥よて被上候也、本々ハ身延へ返し候へと被仰出候也、

原本ヲ身延ヘ返却ス

六月四日、身延之物之本本朝文粹拾三册、日下部五郎八殿へ渡、請取狀有、懸硯箱ニ入置、本朝文粹拾四册よて全部之本よて候へとも、同一册前ゟ不足よて、以上十三册也、日下部五郎八殿ゟ身延へ可被返渡也、

淺井元吉ヲ通ジテ獻上ス

閏六月九日、本朝文粹全部十四册、表紙箱緒以下出來、則二條御殿へ持參、淺井七平ヲ賴候て上申候、本々と今寫ト二部田餘(マヽ)ニ上申候、一ノ卷ハ身延ノ本も不足候ヲ、道春町ニテ尋出候て、御前へ被上候ヲ、我等へ被下候、今度寫候二部共ニ全部也、道春尋出候一册ハ、道春へ今日二條御殿ニて返ス也、

壬六月十一日、身延寂照院六月廿日之狀來、三浦長門殿〇賴將家老三浦爲春ゟ被屆、長門殿ゟ狀添來、長門殿ゟ之狀ニハ、本朝文粹本々返度由申來、其本ハ去六月四日、日下部五郎八殿へ渡候間、定ゐ可相屆由申遣ス、身延への返事をも、二條之殿中よて認也、案左ニ有、

六月廿日之飛札、後六月十一日令披見候、先度御使僧被進候刻、御披露申、御仕合能御滿足之由尤候、隨ゐ日祝上人御遠行之由絶言語候、後住之儀ニ軈ゐ使僧可被指上旨、其節可得上意候、恐々謹言、

壬六月十一日　金地院

身延山寂照院　貴報〇日祝寂スルコト、年末雜載ニ收ム、

身延日祝上人寂ス

〔本光國師日記〕十八　九月廿一日、本朝文粹身延へ返し候との上樣御在京中、日下部五郎八請取、慥九月廿一日、目安箱へ入候也、

十月二日、久遠寺ゟ使僧來、九月廿九日之狀來、段子三卷來、則返書遣ス、

〔本光國師日記〕十九　十二月廿二日、身延久遠寺ゟ使僧來、極月廿日之狀幷胡桃一箱來、則返書遣ス、

五山ヘ謄寫物ノ配分

〔鹿苑日錄〕二十四　四月十九日、大御所令五岳之衆謄寫本朝文粹、到當寺三册配分來也、予到方丈寫之也、

閏六月三日、到南禪金地院、爲書物見舞也、

○家康、本朝文粹ヲ獻ズルコト、本月二十二日ニ其條アリ、參看スベシ、

家康、織田有樂ニ大坂城中茶器ノ事ヲ問フ、

〔駿府記〕閏六月九日、大御所出御前殿、織田有樂出仕、大坂城中兵火之後御茶入肩衝等多紛失、仍令問其貌給云々、

十日、乙卯、是ヨリ先、幕府、本多忠政ノ次子政朝ニ命ジ、故上總大多喜城主本多忠朝ノ遺封ヲ繼ガシム、是日、忠政等之ヲ謝ス、

〔駿府記〕閏六月十日、本多美濃守、○政同子息平八、○忠刻同弟甲斐守○朝政出御前、今度大坂合戰之時、美濃守舍弟出雲守忠將等討死、出雲守本領上總國小多喜城六万石、甲斐守□□拜領、則出雲守女子可嫁甲斐守由、依有御內證之仰、將軍家先日被仰付故、今日爲御禮出仕云々、本多上野介披露之云々、

〔大三川志〕一九十 閏六月四日、是頃去月七日ニ、本多出雲守忠朝戰死ス、男子僅ニ二歲ナレバ、其遺封上總小多喜ノ城五萬石ヲ忠政ガ二子甲斐守政朝ニ賜ヒ、忠朝ガ女ヲ妻トスベシト命ゼラル、

〔寬政重修諸家譜〕六百八十一 本多忠勝中務大輔、

忠朝ノ女政朝ニ嫁ゲ

忠朝戰死ノトキ子政勝僅カニ二歲

女子　母ハ右衞門某ノ女、眞田伊豆守信幸ノ室、

女子　母ハ上ゝ被レ、奧平大膳大夫家昌ノ室、

忠政　平八郎、美濃守、從五位下、侍從、從四位下、

忠朝　內記、出雲守、

女子　母ハ信康君ノ息女、

忠刻　初忠爲、平八郎、中務大輔、從五位下、　母ハ上ゝ被レ、

女子　母ハ長女ゝ被レ、

政朝　初忠氏、忠鄕、鍋之助、甲斐守、從五位下、侍從、從四位下、

忠義　初忠光、唐之助、右兵衞、幸千代、能登守、　母ハ上ゝ被レ、

政勝　入道、丸、內記、從五位下、從四位下、侍從、　實ハ本多出雲守忠朝ノ二男、母ハ某氏、

政朝　母ハ上ゝ被レ、

日、從五位下甲斐守ゝ敍任ニ、時ノ四歲、

せてまゐりヒ、首級ハ得たヒ、七月朔日、東照宮ゝれゐませにより、叔父出雲守忠朝の遺領上總國大多喜五万石ハたまひ、○下略、本書七月朔日トスルハ誤レリ、

慶長四年、大多喜ノ生ル、十七年十二月十八日、元和元年、大坂御陣ノトキ、ハさゝりむ

忠政忠朝ニ男子無キ由ヲ言上ス

〔寛政重修諸家譜〕六百八十三　本多忠朝内記、出雲守、

女子　母ハ直盛ゟ女、本多甲斐守政朝ゟ室、

女子　母ハ某氏、家臣山口主水某ゟ妻、

政勝入道丸、内記、

女子　實は有馬左衞門佐直純ゟ女、政勝やしなひ〻妹とし、黑田東市正高政ゟ嫁に、

〔參考本多系傳〕四　本多政朝　出雲守忠朝、一子入道丸を殘置(シキ)て討死に、然るに美濃守忠政いゐなる心よや、出雲守にも男子御座なく候と申上しより、同年七月十七日、一説ニ六月十一日とあり、忠政の二男政朝ハ、叔父忠朝の遺跡を繼ぐべき旨仰(セ)渡され、上總國大田喜五万石をぞ賜りゟる、漢文御家譜、假字文御家譜、藩翰譜、横井氏筆記參考、

○本多忠朝戰死セシコト、五月七日ニ、政勝、政朝ノ封地ヲ分チ、播磨龍野四萬石ヲ賜ハルコト、寛永八年閏十月十八日ニ、政朝死シテ其封ヲ襲フコト、同十五年十一月二十日ニ、各、其條アリ、參看スベシ、

幕府、使番青山清長ノ款ヲ大坂城中ニ通ズルヲ以テ、命ジテ自刄セシム、

伏見ニ於テ切腹ス檢使青山忠俊

〔駿府記〕閏六月十一日、昨日於伏見青山石見守切腹被仰付、青山伯耆守、○忠俊爲檢使云々、石見守密與大坂内通之由、其子訴申故也、

〔斷家譜〕阿平氏　青山本國尾張紋

北條時行七代横井雅樂助時勝男

時久　祖父江作右衞門、

居于尾州祖父江村、仕織田信長、

清長　五郎右衞門、剃髮法齋、還俗改青山石見守、　斷絶

實大橋與左衞門重賢二男、仕織田信長、領千貫文、後屬福島正則、關ヶ原役以有軍功、大神君に被召出還俗、青山常陸介授名字、依之改青山石見、其後御使番、慶長二十年乙卯、大坂役城内に令内通事露顯、同閏六月十一日切腹、

關ヶ原ノ役ニ軍功アリ還俗シテ青山忠成ノ苗字ヲ名乘ル

〔禮典〕三　伯耆守忠俊君　慶長二十年閏六月十一日、台德院殿以上意、青山石見守清長、於伏見切腹、忠俊檢使被仰付、相勤之、

是清長者、初福島正則部下、稱祖父江五郎右衞門定翰入道法齋、慶長五年庚子以來還俗、列御家人、則忠俊忠俊ハ誤、父忠成也、可授苗字之旨以上意、號青山石見守、然大坂城中七組頭之内眞野豊後守頼包之實弟也、故隱密内應露顯

之罪科也、

〔参考〕

〔武功雑記〕十三　關ケ原ニテ、福島方ヨリ青山石見ヲ使ニサシアクル、源君（此時ハソプエ法齋ト云）折節御氣分ヨロシカラスシテ、石見ヲ御寢所ヘメサレ御逢、其方功者ユヘ、福島方ヨリ使ニ被越候ヨナドヽ結構ノ御意ナリ、後ニ御家ヘメシイダサル、二千石領知ス、大坂扱ノ後、御使トシテ山田十太夫、渡邊圖書、青山石見三人、大坂ヘツカハサル、城ノ一女石見ニ對面シテ、アレコレノ安否ヲカタリ問フテ、シミジミトシタル挨拶ナリ、コレヲ石見迷惑ガリテ、兩人ヘモ東ニテ沙汰ヲイタシタマハルナト云シトナリ、青山石見、大野彌十郎（修理子）兩人大坂内通ノ咎ニヨリテ、御成敗ナサル、〇下略

〔難波戰記〕三　祖父江法齋城中江内通露顯事

御和睦調ヒ、摠堀ヲ埋、石壁ヲ壞下奉行トシテ、御使番山田十大夫、渡邊半四郎、青山石見守（初ノ名ハ祖父江法齋）等參向シケリ、抑此青山石見守ハ、去慶長五年庚子九月、濃州關原御合戰ノ砌ハ、祖父江法齋トテ、福島左衞門大夫正則カ手ニ屬シテ武剛ヲ顯シ、其外度々ノ高名ヲ遂シカハ、福島頻ニ依執申、新將軍

秀忠公被召出、初ハ青山常陸介忠成組ニ屬シテ還俗シ、常陸介名字ヲ與ヘシカハ、祖父江ヲ改メ、青山石見守トソ名乘ケル、渠ハ福島カ家人ノ時ヨリ、家康公御心安思召レ、常々御寢所迄モ被召寄シ者也、然ルニ今日山田渡邊青山三人ニ□入ケル時、女房一人立出テ、御使番青山石見守ニテハ無之哉ト呼フ、石見守面ヲ赤メ、迷惑ノ躰ニ見ヘナカラ、石見守也ト答フ、時ニ彼女房高聲ニ、御城中ニテモ、上々樣方御恙ナケレハ可御心易、足下ニモ無異ノ事誠ニ目出度ト申テ内ヘ入ヌ、石見守、山田十大夫、渡邊半四郎二人ニ對シテ語リケルハ、兩人ノヲモハク、近比無面目、某カ輩幷親類共籠城仕ルニヨリテ、彼女房モ能知テ、ケ樣ニ呼懸申ニヤ、定テ此事達御耳ハ、可有御糺明トカ、猶無覺束ヤ思ヒケン、竊ニ達シケレハ、回忠顯ルヽ上ハ、終ニ御成敗被成ケリ、去ハ前廉不慮ニ閧ノ聲ヲ揚シカトモ、城中少モ不騷、時々聲ヲ合、松明ヲ投出シ〳〵、大筒小筒ヲ打掛シハ、此青山カ内通セシ故トソ後ニハ聞ヘシ、

松平忠輝、松平忠昌等、家康ニ謁ス、

元和元年閏六月十日

〔駿府記〕閏六月十日、越後少將殿、幷伊豫守殿殿越前少將殿御舍弟御目見、

德川義利義直病ム、

〔駿府記〕閏六月十日、尾張宰相殿、從昨夕少令煩暑氣給、成瀨隼人正、與安法印言上之處、六和湯可宜之由依仰調進之、則令得驗氣給、

島津家久、片桐貞隆等、物ヲ家康ニ獻ズ、

〔駿府記〕閏六月十日、片桐主膳正獻伽羅一折、嶋津陸奥守獻鐵炮藥袋、幷火繩十筋、件火繩者薩摩國所產唐竹所綱也云々、

十二日、丁巳幕府、使番溝口常吉ノ、大坂浪人北十左衞門ノ事ニ連坐セルヲ以テ、改易ニ處ス、

〔駿府記〕閏六月十二日、溝口外記父子御改易、南部十左衞門于大坂城籠、於京都宿所肝煎罪科也云々、○十左衞門、寬政重修諸家譜ニハ、久左衞門トアリ、今駿府記ニ從フ、

〔元和年錄〕乾略○上首尾惡敷候テ、御改易之衆討死之衆覺、

青山伯耆守組

同○御改易被仰付候故、半左衞門、寬政重修諸家譜ニハ、外記父子被成候、無左候へハ、半左候答ニ有候、

溝口半左衞門○他ハ略ス、

右之時分御改易之衆、

是閏六月十二日、於伏見父子被仰付、

溝口外記

溝口半左衞門

同新三○他ハ略ス、

〔寬政重修諸家譜〕二百十八　溝口常長　與十郎、

常吉　外記、

某佐左衞門、

女子

重長半左衞門、庶流半左衞門政府ら呈譜に政高ト作ル、

常勝新左衞門、

重朝五左衞門、

女子　境新右衞門成常ら妻、

常吉　母は某氏、慶長五年、そしめくら台德院殿ゐ拜謁し、おほとし上杉景勝を征したまふのとき、下野國小山ゟ供奉し、眞田昌幸御征伐よもおさゝひたゝくまゐるに、大坂兩度の御陣ゐき、御使番をうけたまはりて扈從ニ、元和元年、ひきに南部信濃守利直ゟ家臣南部久左衞門某、利直の使をうけたまりおに京師にあり、おゝ忍に大坂のこと起るて、處士ゆへおく京都

常吉十左衛門ノ身元ヲ保證ス

十左衛門大坂ニ籠ル

ゐ徘徊をおこたとを禁せらるゝにより、板倉伊賀守勝重ゑをを糺明に、これとき常吉、久左衛門を、利直ゟ家臣にして、君命により上京せしむ事、勝重ゟもとり證狀を贈るれところ、久左衛門、のち秀頼ゐまゑきにをりて、大坂城ゑ籠ゐしかは、ゑのことに坐して改易せらる、

重長　母は某氏、文祿二年、めさをて台德院殿りほゟへたてまける、時ゟ十五歳、慶長五年、眞田昌幸を征したゐふゐとき供奉し、れち御書院番とあり、元和元年、大坂御陣れとおを、青山伯耆守忠俊ゟ手に屬して從ひたてまける戰功あゐ、ゑれとし父ゐゑとに坐して改易をらる、寛永十八年十二月十三日、めしかへさ終ゐ、下總國印旛郡ゐうちにをいて、采地六百石をゐまひ、○下略

常勝　母は某氏、慶長十四年、はしめて台德院殿にゐみ參たてまける、大番とれゐ、大坂兩度の御陣ゐ供奉し、ゐち廩米三百俵を賜ふ、元和元年、兄重長と共に改易せらる、寛永十八年四月十八日、めしかへさ終て、御小性組ゐ列し、十二月十三日、廩米三百俵をゐまふ、

○家康、十左衛門ヲ舊主南部利直ニ付シテ誅セシムルコト、本年秋ニ其條アリ、參看スベシ、

城破却ノ奉書

十三日、戊午、幕府、諸大名ニ令シ、各、居城以外ノ城壘ヲ毀タシム、

〔毛利氏四代實錄考證〕元和元年國中御居城之外古城破却御奉書

以上

急度申入候、仍、貴殿御分國中居城をハ被殘置、其外之城者、悉可有破却之旨、上意候、右之通諸國へ申觸候間、可被成其御心得候、恐々謹言、

壬六月十三日

安藤對馬守
重信判
土井大炊助
利勝判
酒井雅樂頭
忠世判

松平長門守殿

〔別本吉川家譜〕十六　廣家　元和元年乙卯

廣家公横山ノ城ヲ破却シ玉フ、

岩國城破却ノ問題

廣正公ヨリ御本家ヘ差出サルヽ御書物

按スルニ、廣正公ヨリ御本家ヘ差出サルヽ御書物ニ、大坂御陣御存分ニ被任候、以後一國一城之外者、城破却可仕之旨、天下依御掟、山口長府兩城ヲワリ城破却被仰付候、岩國之城ヲワリ申候樣ニト、宗瑞樣（○毛利輝元）ヨリ被仰聞候、廣家申樣ニ、岩國ニ私罷居候段者、先年ヨリ大御所樣御存知之儀御座候、今度之御掟一國一城トノ被仰出之由候、防州ニテハ岩國計之儀候條、苦間敷候哉、一旦被成御伺被下候儀ニテハ御座有間敷哉ト御斷申上候ヘ共、長府之城同前ニト被思召、御內意共候哉、彌破却可仕之由、重疊御意付而、不能違背、城ワリ申候トアリ、又十月九日、廣家公ヨリ、組中今田一庵、香川宗尤、今田下野守、松岡安右衞門、吉田宗右衞門、松浦佐渡ヘ連名ニテ賜フ書ニ、一書申入候、仍、諸國之城破却之儀傳ニ承及候處、多分石垣マテコソ候間、各ヘヤトヒ可申候、是ハ公儀之事候間、右之石垣、今少ヲロシ候テヨク候ハント存候、萩其地（他カ）ホシ申候由、然者其元之御見合候ヘク候トアリ、普請旁以大儀之事候ヘトモ、是ハ公儀之御事候間、各馳走可爲祝着候、右之趣、萩ナトヨリ被仰越儀ニ候ヘ共、遠慮ニ申入候、委細九右衞門所ヨリ可申候、又城ノヲモテノ方ヲ取分ヲロシ可然候哉、人數共無之候ハヽ、十

日十五日之事ニテコソ候間、各ヘヤトヒ可申候、是ハ公儀之事候間、右之分候、何モ山下ヨリモ城ヨリモ、ヨク御見合候ヘク候トアリ、又按スルニ、或說ニ、元和元年一國一城ノ制禁仰出サレ、同二年、城破却トアレヒ、廣家公ヨリ靈光寺ヘ賜フ書ニ因テ、姑ク今年トス、（○岩國城ヲ毀ツコト、毛利氏四代實錄考證所載吉川家文異事ナキニヨリ略ス、）

〔細川家記〕（十四忠興八）

閏六月、一國一城之御觸ニ付テ、被仰付樣之儀等、忠利君ヘ被仰進候閏六月廿九日之御書、

以上

去廿日之書狀二通披見候、

一公方樣七月上旬、大御所樣下旬御下向之沙汰有之由、得其意候事、

一諸國城割之御觸狀、今日廿九到來候、則門司之城今日よりとらせ申候、殘城々使之參着次第、とり候へとのさく申付遣候、此由御奉行衆、金地院、上州ヘ可被申候事、

一中津之儀、大炊殿ヘ談合候由尤ニ候、濟候へハ能候、濟候ハでも不苦候事、

三年ニ一度宛目付ヲシテ巡視セシム

一城ヨリのもやうの儀被申越候、千萬ニ一つ前のまとく城を仕候へと被仰出候共、御詫言申、一城ニあ居可申と存候間、こんゑんざいヨらせ申候事、

一上下侍むゥ〳〵の公方の法度被成御引直、可被仰出候由、得其意候事、○中略

一先書ニ申候と被書候へ共、十四日より前之書狀不來候事、

以上

後六月廿九日　御判

内記殿　御返事

一書、當十二月二日、一ニ十一月と有、兩將軍御下知ニ、諸大名居城之外、ことことく破却をへ〳〵、但、出羽奥州兩城の脇城計、其まゝ可差置とて、當年より三年ニ一度つゝ御目付下さるへきとの事、是ハ政道の理非を計らるへき爲と也、右之趣ニよつて、豐前ニも小倉中津兩城之外、城々御れ被成候と云々、考ニ、十二月との事いふあし、右之御書ニあ詳ニヨあり申候、

伏見城ノ破却

小倉城ノ破却見合ハセ

杵築城ノ破却

城破却ニ就イテ苦心ス

〔松井家譜〕七春光君御譜七　同年元和元閏六月、天下一統一國一城之御制法被仰出、伏見之御城を始、所々之端城悉御刷去ニ成、長岡興長伏見之屋敷も秀吉公ゟ父松井康之ニ被爲拜領候屋敷ニあ御座候、解除申候、豐前御領内ゟ、小倉之一城被殘置筈之處、妙解院樣○細川忠利御居城中津者、被爲御殘置度旨、於江戸土井大炊頭殿に被仰達置候間、先御樣子相分ル迄者、御見合ニ相成、同年之冬、御願之通被仰出候、其餘之端城者、御刷を被成、興長居城杵築之儀ゟ刷去申候ニ付、妙解院樣ゟ、閏六月晦日被成下候御端書、同七月十二日之御返書、

尙々、木付あともヨり被申候哉、天下事ニ候間、無是非事ニ候、此方あハる事無之候、以上、

御本文者略仕候、

閏六月廿九日之書狀披見申候、此方相易事無之候、其元城破候普請ニ、皆々可爲苦勞と推量申候、爰元も軈あ皆々御暇被下候由申候間、下々(リカ)可申候、恐々謹言、

七月十二日　内記　忠利

長岡式部少輔殿　返事

同年元和元七月中旬、於大坂、妙解院様御歸國之御暇被爲蒙仰、白銀三百枚御拜領、同月下旬、中津ニ被遊御着座候、此節長岡興長儀者、杵築城刷去ニ付而、出府難仕、使者を以奉伺御機嫌候之節、被成下候同月廿六日之御書、重而飛脚差立、御肴進上仕候付、同晦日之御書、共二通（御兩通共御自筆被成下候、）我等下國ニ付而、早々使者滿足申候、上方替儀無之、公方様當十九日、大御所様同廿七日御下向ニ相定候キ、御所様ハ未のひ可申ニ存様子候、此度も九州衆之うちニ、一番御いとゐ被下、殊ニ銀子ゐと拜領申候、忝御意共まて候キ、忠興様今度御奉公故、我等迄如此ニ仕合能忝存事ニ候、木付も不殘ハり被申候よし、左様ニ可有之と、いつそや其方ゟ之書狀之ときくにいニ見不申候て、一しほ殘多候、猶重而可申候、小倉まても、其方へ人を遣候へハ、其地ニ候故、右近ゟさへ申遣、御前ニ出候、恐々謹言、

七月廿六日

長岡式部少輔殿　返事

内記

忠利御判

杵築城ノ櫓ヲ崩シ石壘ニ取カヽルヲ中津城ノ破却

猶々、田中ちく後ハ御いとゐも不出、御ともとも無之て、京ニとう留まて候キ、ふゟ〳〵しきとのさんさん、此外ゟハる事無之候、以上、

爲見廻書狀披見申候、殊ニ海老廿こゝもとめつらしきさゟゐまて、則忠興様一兩日之うちニ御出被成候間、御ふるまいニ出し可申候、次ニ其元やくらハ不殘くつし候へ共、只今ハ石ゟけニとりゟゝり被申候よし、そりうまりゟ可申とすいまやう申候當津も多分ハ城ハり可申ニ可相定ゟと申事ニ候、手間をそらひ候へハ、事〳〵しき普請まて、下々めいわくゟり申候、猶重而可申候、恐々謹言、

七月晦日

長岡式部少輔殿　返事

内記

御判

猶々、我事ハ、又越年ニ下まて可有之、うちつゝキ下々くろうの程、すいまやう可被申候、以上、

右城刷相濟候而、興長小倉之屋敷ニ引移居住仕候上者、万端在城之格ニ相

心得候樣被仰付、出府料を以不相替被下置、家來とも者、過半杵築ゟ通勤仕を候、且又去ル慶長十八年、松井康之爲追福杵築城下ニ建立仕置候春光院者、此節小倉御城下ニ引移申候、

城破却ノ奉書

〈薩藩舊記增補〉二家久公御文庫二番箱家久公一卷中御譜中ニ在リ

以上

急度申入候、仍、貴殿御分國中居城をハ被殘置、其外之城者、悉可有破却之旨上意ニ候、右之通諸國へ申觸候間、可被成其御心得候、恐々謹言、

安藤對馬守
重信判
土井大炊助
利勝判
酒井雅樂頭
忠世判

元和元年（朱カキ）
壬六月十三日

嶋津陸奥守殿

〈舊傳集〉坤○舊典類聚七下所收

大坂御陣之脇武家へ仰出內一國ニ一城之外ハ、皆可割捨由被仰出候付、諸國其分ニゐ候當國之何をの城も、其儘ゟ被立置、殊城本ニ給人共餘多居候、自然之時者、卽時ニ可取構樣ニ見へ候、如何樣之儀ニて、右之躰ゟて候哉ゟ御尋候因幡申上候ハ、給人共城本ニ居候事ハ、先年義久九州を領之時、過分之人數ニゐ候、太閤樣御下向之時、六ヶ國被召上候付、其人數貳ヶ國半之內に引入候、一所ニゑ無居所故、そこ〳〵ニて知行少つゝとらを、又藏入之作職をもさせ申候ニ付、方々ゟ賦付候、右鄕之屋敷ハ、皆知行高之內ニて候付、城本の古屋敷ニ移置候、城を堀崩し不申儀ハ、城廻り過半田畑ニゐ候ニ堀崩出入候ハヽ、知行之高過分引入可申候、就其不堀崩と、古き家老共申候を承候ハヽ、知行之高過分引入可申候と申上候得者、御三人共ニ御納得ニゐ候、

島津氏領内ノ城ハ舊ノ儘ニ存ス

〈南路志〉五十五年譜十五　忠義公御代二　元和元年乙卯

一國一城之御掟被仰出ニ付、宿毛、窪川、佐川、本山、安喜之土居城毀之、屋敷構ニ相成、

山內氏ノ城破却

〈別本黑田家譜〉十五　元和元年長政四十八歲忠之十四歲

大城落城して諸國の端城悉く破却をべき由被仰出、國持大名一城成へしと定給ふ、此時宰臣より長政へ來る奉書ゟ曰、

黑田氏ノ城破却

急度申入候、仍、貴殿御分國中居城を被殘置、其外之城者、悉く可有破却候
旨上意候、右之通諸國へ觸候間、可被成其御心得候、恐々謹言、

壬ノ
六月十三日

黒田筑前守殿

是ゟ依て、筑前國中の端城六有之を、歸國の後、悉くゟ破却せられ〻る、長政
大坂落城の後御暇給ハり、筑前へ下ㇾ給ふ、

〔鍋島勝茂譜考補〕四　今年〇元和元年一國一城ノ外破却被仰付御奉書ニ云、

一國一城之外破却候樣ニと被仰出候、可被得其意也、
閏六月十三日

安藤對馬守　重信
土井大炊頭　利勝
酒井雅樂頭　忠世

鍋島信濃守殿

又一通アリ、

鍋島氏ノ城破却

急度申入候、仍、貴殿御領分中居城をハ被殘置、其外之城者悉可有破却之
旨上意候、右之通諸國へ申觸候間、可被成其御心得候、恐々謹言、
閏六月十三日

安藤對馬守
土井大炊頭
酒井雅樂頭

鍋島信濃守殿

是ニヨリ、先年石井壹岐守へ下目一通防禦仰付ラレテ、拜領サセラレシ
蓮池小曲ノ城、幷ニ石井五郎右衞門へ賜ハリシ嘉與丁ノ出城、石井又左
衞門へ下サレシ蒲田江ノ出城等、此節御取揚ニナリテ、此人人佐嘉へ移
住セシメラル、其故ヲ以、今ニ佐嘉江口ノ鹿江ノ御番所ハ、壹岐組内石井
寄合ノ者ヨリ勤來ルトイヘリ、（石井家記、此外武雄、多久、諫早等ノ城郭モ解崩シ、皆屋敷構トナル、）

〔淨信興起錄〕〇肥後　元和改元乙卯、天下有一國一城之制法、然如肥後、最爲
大國、故官容八代子城、於是戚老之中、獨擇正方、〇片岡以爲八代郡麥島城主、更
曰右馬允也、正方當入此城、令淨信精舍鎭留內牧、以祭祖考之塔矣、

〔日向記〕十三　大坂冬御陣祐慶〇伊東主供奉ノ支

肥後ニハ特ニ八代ノ子城ヲ許ス

日向ノ城破却

○上略今年○元年國主領主ノ外城廢地ニ被仰付當家ニ於テモ曾井清武紫波洲崎酒谷南鄉五ケ所ノ城ヲ掃セラル、

〔參考〕

〔因幡志〕十五氣多郡郡鄉之部上　鹿野　古城ハ妙見山ニアリ、王舍城ト號ス、○中略元和三年、台命ニ因テ、亀井家封ヲ石州津和野ヘ移サル、父子二代在城三十七年也、同年光政君因伯兩州管領シ玉ヒケル、其トキ一國一城ノ外、持城制禁ノ公命ニ因テ、當處ノ城モ卸シ捨ラレタリ、但シ長臣日置豐前守此處ヲ知行シケル故、山下ニ居宅ヲ設ケタリト、十六年ノ後、寛永九年、御國換有テ、御當家御入國ナル、同十六年、松平石見守輝澄君、後薙髪號石入、興禪君御叔父、故有テ當處一万石ヲ領シ、播州ヨリ移リ玉フ、館舍ノ地ハ、城山西ノ麓ニテ、築山泉水等ノ迹今ニ殘レリ、斯テ二十餘年ノ後寛文二年、卒去ナサレ、御嫡子能登守政直君御家督ノトキ、播州粟賀ヘ飯リ玉ヒテ、其後住ム人ナカリケレバ、空山草木長シテ、樵歌牧笛ノ聲ノミナリ、

〔因幡志〕二十八東郡古城之部二　若櫻鬼カ城　同年○五年慶長東照宮ヨリ山崎左馬允殿ヘ、右二郡二万五千石内千石在但馬賜リ、子息甲斐守殿マテ二代在城

アリシカ、元和三年、迄十六年、官命ニ因テ、備中ノ成輪ヘ封ヲ移サル、其後光政君御領國ノ時、一國一城タルヘキトノ關東御下知ニ就テ、當城ヲ卸捨ラレタリ、城ハ東ヲ表トス、本丸ノ南ニ鬼山トテ、上古鬼神住シト云處アリ、鬼カ城ト號スルモ其故ナラン、又本丸ノ下ニ名高キ大松アリ、株ノ周圍二丈八尺餘ト、近年此鄉ノ鞨匠肥松ヲ取ントテ朽タル穴ヨリ這入、中心ヲ削取ケル程ニ、次第ニ坎大ニナリ、寶暦八九年ノ比終ニ枯ケル也、今其穴ニ八八人籠ラルヽトソ、山下ハ家中ノ惣構ノ跡ニテ、石垣モ其マヽニ殘レリ、○下略

〔因幡民談〕九　國中所々城破事

元和元年乙卯ノ歳、大坂一亂落城ノ後、天下東風ニナヒキ、關原以來ノ凶徒ノ餘類殘リナク泯ヒ失、今ハ四海ニ可窺國家亂賊モナク、邊國遠境マテモ靜カナレハ、馬ヲ華山ノ陽ニ歸シ、牛ヲ桃林ノ野ニ放チ、弓ヲ韔ニシ、太刀ヲ函ノ底ニヲサメ、目出度御世トナリニケリ、然ルニ中古以來日本國中亂逆甚シクシテ、國々ニ城々ヲ築キ、里々村々ニ用害シケク、今ニソノ構ノコリ、一揆劫盜謀叛ノ用心ニモ宜カラス、是治世ノ備ニアラス、日本國中ノ大城一ツハ除キ、端々ノ小城ヲハ破却シ、天守櫓ヲ下シ、石垣等崩スヘシトノ御

高砂城ノ破却

下知國々ニ下ルニ因テ、不日ノ中國々不殘是ヲ卸シケリ、當國モ鹿野、浦住、若櫻、用瀬等ノ城々、此時ニ破却シケリ、年經シ城々金城湯池ノ構トモ、皆目ノ前ニ野原トナリ、荊棘露瀼々トシテ、强呉亡テ姑蘇城ヤフレシ昔ノ形勢ニ相似タリ、

〔播磨事始經歷考〕三古城門　加古郡　高砂古城　御厨庄高砂浦　城主別所　○播磨

幕下梶原平三兵衞景行　天正年中落城、その時相生靈松も燒失をといふ、其後慶長年中、池田輝政城を再興し、家臣中村主殿ゟ是を守らしむ、元和年中、本多美濃守忠政是を破らせらる、其跡ゟ牛頭天皇を祭れり、相生の新松有、○本多忠政ノ姫路ニ封ゼラレシコト、元和三年七月十四日ニ其條アリ、

〔來住文書〕○備前

尙々、明石高砂之儀、如何被仰出候ハん哉、無心元候、樣子委可被申越候、去ル十三日之書狀令披見候、

一兩國御普請之儀、將軍樣、大御所樣へ被仰上候處ニ、御ゆるし被成間敷と御諚之由、不及是非候、

一明石高砂城之儀、內意令滿足候、權左衞門も、夜前參着ニて委申聞候、

明石城破却後ノ慘狀

三木城ノ破却

筑前益富城

一牛原內記事、いゝ樣之儀ニて御うゑさあしく候や、無心元候、樣子くゑしく承度候、其地相替儀候ハゝ可申越候、謹言、

極月廿五日　武藏○池田利隆

山田兵左衞門殿

〔小笠原忠眞一代覺書〕乾○上略　扨右近樣、○小笠原忠眞　明石よゝ御落着被成候所を、池田三左衞門殿家老ニ、池田出羽守と申ゐ、四万石余取申候居城よて候、大坂御陣前迄ハ、城構多門塀ゟ掛ケ、小キ殿主を有之候、大坂落城ゐりゐ、天下一國一城と、家康公ゟ被仰出、國々ニゐ居城計りニ仕り、ゑさ城不殘をき申候ニ付、明石之躰淺間敷有之候故、何ゟ落着兼候、三木よて三左衞門殿家老伊木長門守と申候ゐ、三万石計り取申候者罷在候由、是を尙以城ゟをき申候ニ付、明石よりも淺間敷体ニゝ候、池田三左衞門殿よを、本城姫路共ニ城七ケ所御持候、大坂陣以後、ゑさ城を何ゟをき取申候由、

〔筑前國續風土記〕二十三嘉摩郡　古城古戰場　益富城址○上略　長政公入國之後、此城を改め築き、家臣後藤又兵衞を置る、又兵衞逐電せし後ハ、毛利但馬

同鷹取城

を置ましよ、元和三年、台命よよりて城を崩さる、

〈筑前國續風土記〉二十四　鞍手郡　古城古戰場　鷹取山古城　頓野村よ有、高山の上ふ有、天正の比、毛利兵部少輔鎭實在城せり、是大友氏の幕下也、長政公入國之後、此城を改ゑ築き、家臣毛利但馬を入置る、慶長十一年よ、但馬ハ嘉摩郡大隈の城よ移り、此城ゑハ手塚水雪を置る、此山昔ハ木あゥりしを、水雪在城せし時、初ゝ植しゥ、今ハ茂山也、此城元和年中、台命よ依ゝ崩さる、

遠賀郡　陣原　是香月庄司と三河守範頼の兵と戰ひし所也、故よ陣原と號ス、本書よ記きゑ、長政公の家臣井上周防ハ、黒崎の城よ居ゐるゑ、元和元年、黒崎の城こゑもちて後ハ、此所よ宅を構て居住す、今よ其跡殘まり、此村ハ穴生村の枝村也、

同黒崎城

黒崎古城　藤田村の上の山よ有、此所よ昔よゑ城あし、長政公入國の後築き給ひ、家臣井上周防よ是を守らしめらる、其かゝ此山を黒崎とハ云と、此城山の南の麓よ農人の宅一邑有て、其所を黒崎と言ひしゥ、是よよつて黒崎の城と名付、熊手町ハ昔ゐ有、藤田町ハ黒崎の城出來て後ゑてり、黒崎城下よ有故よ、此町ゐ三所の町を名を取て黒崎と稱ス、元和元年一國一城の

同中島城

黒崎城ノ要害

外ハ破却すへきよし合命在し時、此城もこゐさる、

若松中嶋古城　若松と鳥簗の間中嶋よ城跡有、長政公入國の後ハ、此所ニ築きて中嶋の城と號し、家臣三尾若狹を置給ひしゥ、元和元年公命よ依ゝ城破らる、

〈小早川式部翁物語〉○蛸魚殘篇六所收　或時寺澤志摩守殿家中に居さる人の物語よ、先年志摩守、黒田筑前守同道よて、上方へ上りし時、筑前の國ゟ黒崎よて鹿狩を催ゐ、志摩をもてなし給ふ、其時黒田筑前守殿物語よ、當地よ此城を我ゥ築申時、此山より向の丸山好山よてあゑとも、我ら心付有て、此山を取立申也、其子細ハ、自然の事あらハ、我ら細川越中とハ中あしく、然る時ハ豐前より此黒崎の城を取巻責へし、然る時ハ一日の內よ我居城福岡へ告不越といふ事有ゐし、其時あの向の山肝要の山なれハ、あの山に我ゥ旗を立、後詰働をせん時ハ、越中守ゥ人數責ゑらんて敗軍をへし、此山を越中守ゥ人數よ取らゑてハ、黒崎の城一日もさへゥさゥらんと思ふよ付て、此山を城よ取立、向の山をハ、味方の勝利の爲よ殘し置さり、大坂落城の後、一國一城よ被仰付故、今ハ此城破壞〳〵て、最前兼ての億意も不入物よて侍まハ、

豐前門司城

只今口をひらくと有々れハ、寺澤志摩守も、尤と被申たり〳〵語る、(ミ脫カ)

〔豐前志〕三企救郡　門司城趾　古城記云、永祿二年、大友勢押〳〵寄す、大内家の旗下仁保常陸介の養子仁保帶刀、楠原村の三隅山に寨を築き戰ひて勝てり、後又毛利壹岐守と戰ひて討死す、慶長五年、細川侯當國を領知〳〵、此の城を修造〳〵て、長岡勘解由左衞門を城代に置く、元和三年城破却す、

同馬嶽城

〔豐前志〕四京都郡　馬嶽城趾　大谷村にあり、○中略天正八年九月、龍造寺安房守信周之れに居り、同十五年より黑田家の抱城となり、慶長五年、又細川忠興の持城となりて、元和元年終に破却せり、

〔豐前古城記〕馬岳城　在京都郡　○上略天正六年より、長野三郎左衞門助盛守り、天正十五年より、黑田甲斐守抱城となり、元和乃後破却、

LÉON PAGÉS, HISTOIRE DE LA RELIGION CHRÉTIENNE AU JAPON.

Chapitre XVII.

1615-1616.

*　*　*　*　*　*　*　*　*

Daifousama donna l'ordre de reconstruire immédiatement les cités de Sacaï et d'Ozacca. En même temps, et pour déconcerter les seigneurs et les rendre impuissants, il ordonna de raser toutes les forteresses, à l'exception d'une résidence unique pour chacun des princes; quatre cents citadelles disparurent en quelques jours. Enfin, il priva de sa principauté l'un de ses propres fils, Canzousadono, et le fit raser et enfermer dans un couvent de Bonzes. Alors seulement le terrible vieillard crut avoir assuré son empire et recueilli les fruits de sa politique. Il alla chercher le repos dans sa résidence de Sourounga; la Chogoun son fils habitait toujours Yendo.

四百ノ城砦數日ニ破却シ去ラル

〔パジェー日本耶蘇教史〕第十七章　千六百十五年―千六百十六年

内府樣は、直ちに大坂堺兩市の再建を命じ、之と同時に諸侯を苦め、且其の勢力を殺がん爲め、各諸侯の居城一ヶ所を除く外、すべて城砦を毀たゝめたり、かくて四百の城砦は、數日の間に破却し去られぬ、尙彼は遂に其の子の一人なる上總殿の所領を奪ひ、彼をして剃髮して寺院に入らしめたり、恐るべき老公は、かくして始めて天下を安全ならしめ、その政策の成果を收め得たりと信ぜり、彼は駿河の居城に赴きて休息し、其の子なる將軍は、常に江戸に住したりき、

○畿内諸城破却ノコトハ、尙五月八日、秀頼自殺スル條ニ收メタル一

六一五年及び一六一六年耶蘇會のパードレ等より同會の總長に送りし日本の年報、及ビ五月二十三日、幕府、故秀頼ノ子女ヲ捕フル條ニ收メタル訂正增補日本西敎史ニ見エタリ、參看スベシ、

十四日、己未、旗雲現ル、

〔孝亮宿禰日次記〕四 閏六月十六日辛酉、晴、大外記來臨、去十四日曉、旗雲出現、東西ニ引也、自東方消云々、

十五日、庚申、幕府、公家衆ノ知行高ヲ錄上セシム、

〔土御門泰重卿記〕一 閏六月十五日晴天、今日番頭大炊御門大納言殿知行之指出仕候ゐ、公方へ上可申候由御振アリ、則父子指上申候、

〔孝亮宿禰日次記〕四 閏六月十五日庚申、晴、諸家家領指出可進由、自傳奏有命、予知行指出進傳奏、

十六日辛酉、晴、諸司來、指出之事談合、

松平忠輝、織田常眞、神龍院梵舜。家康ニ謁ス、マタ大和法隆寺、阿彌陀院實秀ノ遺物ヲ獻ズ、

〔駿府記〕閏六月十五日、大御所南殿出御、諸侍各出仕、公家衆如例出仕、越後

知行指出シノ事ヲ談合ス

中井正清ノ斡旋

梵舜謁見實秀ノ入寂

黒絹著用ノ例

少將殿出御前給、南光坊傳長老、其外天台眞言之僧衆伺候、今日南都法隆寺阿彌陀院爲遺物、唯識論幷諸疏等一箱、中井大和守、〇正清以金地院備御前、先度多聞院死去之時申云、此書者先師興福寺多聞院所相傳也、織田常眞御禮、

〔言緒卿記〕閏六月十五日庚申、天晴、前大樹へ參了、

〔本光國師日記〕十七 後六月十五日、和州法隆寺之阿彌陁院弟子唯識論本經抄一箱被上、中井大和被申ニ付ゐ披露申也、

〔梵舜日記〕十九 閏六月十五日庚申、天晴、二條之御城罷出、及御目見、仕合也、

〔法隆寺文書〕十七〇大和 慶長廿年二月、阿彌陀院實秀義死去仕候、任遺言、東照宮樣ニ、乍恐爲遺物書籍數品奉獻上候、則閏六月十五日、中井大和守を以、御前ニ奉備候趣、駿府記ニ御座候、〇上下略、弘化三年阿彌陀院由緒書、

〇實秀ノ事ハ、慶長十九年十一月十六日、家康法隆寺ニ次スル條ニ見エタリ、又實秀寂スルコト、二月是月ニ其條アリ、參看スベシ、

〔附錄〕

〔駿府記〕閏六月十四日、大御所出御頃着黒絹給、是者雖不着袴表着、令對面諸人給也、今度山科侍從申上之云々、

山科言緒家康ノ袍指貫ヲ調進ス　言緒お龜ノ方ニ家康ノ道服裁縫ヲ教フ

〔言緒卿記〕六月十日乙酉、雨、前大樹御袍同御指貫致調進了、

廿九日甲辰、天晴、前大樹ノ御女房衆アンサイ、御グサ兩人、御カメノ御方ヨリ文持被來、大御所御道服ノ縫載(裁)ノ樣可傳之由被申、則タチ縫敎申了、

〔梵舜日記〕十九　閏六月廿二日丁卯、天晴、二條之御城ヘ罷出、及御目覺(見カ)也、

廿五日庚午、天晴、二條之御城罷出、及御目覺(見カ)也、

秀忠、安藤重信ヲ二條城ニ遣シ、家康ニ候セシム、

〔駿府記〕閏六月十五日、安藤對馬守爲御使、從伏見參候云々、

德川賴將、賴宣、伏見城ニ抵リ、秀忠ニ謁ス、

義直病ミテ出デズ

〔駿府記〕閏六月十五日、遠江中將殿於伏見令赴給、幕下御對面、未刻令二條歸給、尾張宰相殿御煩暑氣之後、股少腫、故于伏見不赴給云々、

幕府、大和長谷寺能化職小池坊玄音ヲ改易ス、

賴音玄音ノ跡職ヲ望ム

〔義演准后日記〕十九　閏六月十五日、泊瀨玄音異上意、仍御改易云々、就其賴音望申了、卽金地院申遣、御前御次候者、踈意有間敷由返答、

○玄音、常陸佐竹八幡宮社領ノ事ニツイテ、家康ノ譴怒ヲ蒙リシコト、慶長十八年九月八日ニ其條アリ、參看スベシ、

十六日、辛酉、秀忠、二條城ニ抵リ、家康ニ謁ス、

〔駿府記〕閏六月十六日、將軍家自伏見渡御二條御所、於奧御座間、有御閑談、本多佐渡守伺候、未刻還御云々、越後少將殿、越前少將殿、松平和泉守等出仕、其外御譜代衆、各如例出仕、

譜代衆ノ出仕

〔言緒卿記〕閏六月十六日辛酉、天晴、武家御所、前大樹ヘ御出、予參了、

〔本光國師日記〕十七

一書令啓上候、昨日者公方樣二條ヘ被成御成、御機嫌能目出度存候、○後六月十七日附、本多正信外二人宛、崇傳書狀案、

家康秀忠ニ武家古法ノ書ヲ授ク

〔家忠日記增補〕二十四　閏六月十六日、大神君武家古法ノ書ヲ以テ、台德院ニ授ケ給フ、

〔公室年譜略〕十二　閏六月十六日、秀忠公、又二條ノ城ニ渡御、公○藤堂高虎登營アリ、兩三侯ト俱ニ閑談アリ、

家康、冶工下坂某ヲ召シ、大坂城中兵火ニ罹リシ刀劍ヲ鍛ヘシム、

〔駿府記〕閏六月十六日、今度大坂城兵火故、銘物之刀脇指悉燒、其後尋出之、今日召鍛冶下坂、再燒之試、令燒淬給、○家康、コノ燒刀ヲ井伊直孝ニ賜フコト、本月十九日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

冷泉爲滿大比叡歌合ヲ獻ズ

十七日、壬戌、公家衆門跡幷ニ諸大名等、家康ニ謁ス、家康、淨土宗ノ法問ヲ聽ク、

〔駿府記〕閏六月十七日、於前殿、有淨土法問、卽座被仰付、題者難易二通云々、增上寺國師、呑龍、了的、廓山、長流、理益以下十二人云々、一乘院、青蓮院、大乘院、其外公家衆參上云々、松平陸奧守、藤堂和泉守出仕、松平右衞門佐忠之、松平武藏守□□(利隆)御目見、冷泉中納言獻大比叡哥合一册、

〔言緒卿記〕閏六月十七日壬戌、天晴、前大樹へ參、淨土衆法文アリ、

〔公室年譜略〕十二　閏六月十七日、門跡公家衆二條ノ城ニ候ス、公○藤堂高虎モ伊達政宗卿ト同伴シテ、登營シ玉フ、

私ニ曰、先月ヨリ在京ノ內、日々公二條へ登營アリトイヘ𪜈、實錄ニ漏ル故是ヲ載セス、

〔附錄〕

〔言緒卿記〕閏六月十九日甲子、天晴、前大樹へ罷出了、

廿二日丁卯、夕立、前大樹(御酒アリ)へ參ル、

廿三日戊辰、天晴、前大樹へ被出衆廣橋大納言、三條大納言、大炊御門大納言、花山院大納言、飛鳥井中納言、烏丸中納言、冷泉中納言、西洞院宰相、予、花山院少將、竹內刑部少輔等也、

廿五日庚午、天晴、前大樹へ罷出了、

廿六日辛未、天晴、前大樹へ罷出了、

〔駿府記〕閏六月十八日、出御前殿、諸士各御目見、金地院、南光坊僧正、竹林坊等參上、仍、有佛法御雜談、

一人ヅヽ召出シテ訊問ス

剛臆ノ糺明

糺明ノ證人

家康、麾下ノ士ヲ召シ、大坂ノ役ニ潰走セシ者ヲ糺察ス、

〔駿府記〕閏六月七日、今度大坂表合戰之時、崩逃之族餘多有之之由、內々達上聞之間、可有穿鑿之由、度々有御諚云々、

閏六月十七日、今日被議彼合戰之時崩逃族而、一人宛於御前召出、其時在何處否令尋問給、各申開族有之、或又所申上不分明族又在之、

〔寬政重修諸家譜〕三十七　松平能見勝隆出雲守、○上略、五月七日ノ戰ニカヽル、其後勝隆おゐき茂うけゝ、御供の大番惣組中を剛臆を糺明せ、

〔寬政重修諸家譜〕五百十　平野長重九左衞門、元和元年乃合戰ゐは、長重、永井右近大夫直勝ゟ隊ゟ備ふ、○中略、五月七日ノ戰ニカヽル、亂平くゝ乃後、諸士の軍功の甲乙を糺さゐゝ乃とれ、長重證人とれゐ、